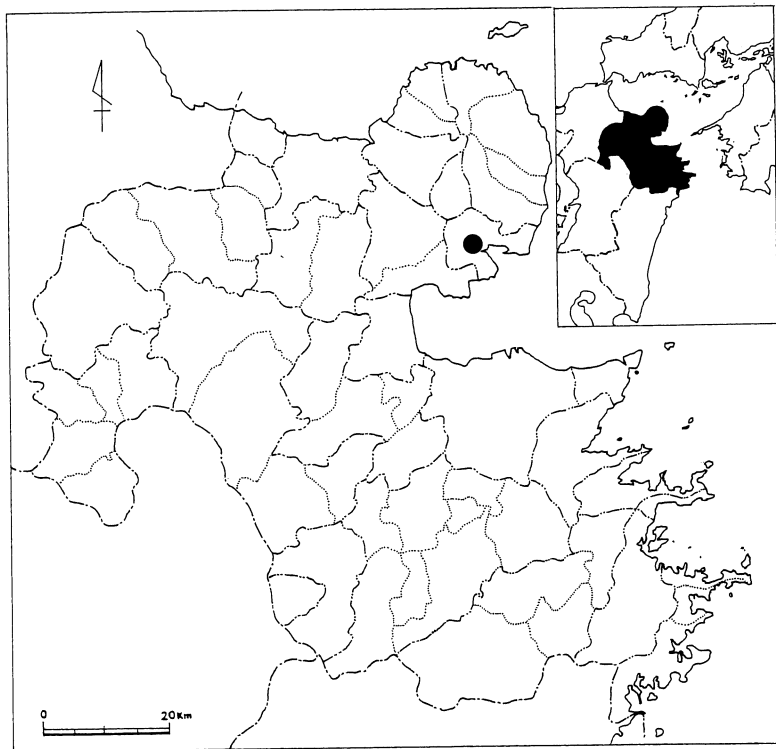


# 杵築城下町遺跡

2004年

大分県教育委員会

# 杵築城下町遺跡



2004年

大分県教育委員会

# 序 文

本書は、県教育委員会が大分県別府土木事務所の依頼を受けて実施した、県道宗近魚町線道路改良工事に伴う杵築城下町遺跡の発掘調査報告書です。

杵築市は国東半島南部に位置しており、縄文時代の貝塚をはじめ、古墳時代には多くの古墳が築造され、県下でも有数の遺跡密集地となっています。

杵築城下町遺跡は、南と北の台地上にある武家屋敷と、それに挟まれた谷部の町屋からなります。武家屋敷と町屋は、今でも当時の姿を良く残していますが、今回の調査で、町屋部分から更に古い時代の道が確認され、城下町の成立を考えるうえで貴重な資料となりました。

本書が、埋蔵文化財の保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成16年3月31日

大分県教育委員会教育長

深 田 秀 生

# 例 言

1. 本書は大分県土木建築部の依頼で調査した、県道宗近魚町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は、大分県教育委員会が実施した。
3. 調査にあたり、杵築市教育委員会、県土木建築部別府土木事務所の協力を得た。
4. 遺構の実測・撮影はすべて調査担当者が行った。
5. 出土遺物の整理は、文化課文化財資料室で整理作業員が行った。
6. 本書の作成にあたり、遺物について文化課吉田寛氏の教示を得た。
7. 出土遺物・図面・写真原版等は文化課文化財資料室で保管している。
8. 本書で使用した方位は座標北である。
9. 本書の執筆は、Iを高橋信武が担当し、それ以外を生野令子が担当した。
10. 本書の編集は生野令子が担当した。

# 目次

序文

例言

目次

## I 調査に至る経過

- 1 調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- 2 調査団の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

## II 調査の概要

- 1 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
- 2 調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

## III 調査の記録

- 1 1区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- 2 2区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
- 3 3区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
- 4 4区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
- 5 5区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
- 6 6区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
- 7 7区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
- 8 8区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
- 9 9区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
- 10 10区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
- 11 11区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
- 12 12区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
- 13 13区の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
- 14 14区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
- 15 15区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
- 16 16区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
- 17 出土銭貨一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99

## IV まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106

# I 調査に至る経過

## 1 調査に至る経過

杵築城下町遺跡は、近世になって成立した城下町遺跡として周知されている。現在、模擬天守の建てられている台地は江戸時代には直接海に突き出た半島であり、南側に並んで存在する台地上には武家屋敷が置かれていた。これらの台地の下、周辺部は町屋が取り巻いていた。当時の城下町の状況は杵築城下町資料館にある当時を復元した模型に端的に示されている。これは江戸時代末期文久年間頃と推定される絵図等を基に復元されたものであり、それ以前の状況については不明であるが、基本的に変化はなかったものと考えられているようである。

大分県土木建築部別府土木事務所は、平成13年度の県教育委員会文化課による事前分布調査に杵築市谷町における県道宗近魚町線の拡幅工事を提示した。県道宗近魚町線は杵築城下町遺跡の中では、武家屋敷があった台地部にあたる北台と南台に挟まれた谷部分の町屋地区を東西に貫く幹線道路である。今回の県道改良工事では、城下町特有の故意に屈折させた場所の存在や道幅の狭さが自動車を利用する生活に不便なため、現状の路線を踏襲し直線的に改修するものである。工事はそれ以前に西部地区で実施されていたが、文化課では把握していなかった。道路が屈折していた箇所はすでに直線的に拡幅されて工事が終了し、その部分から東側が今回の工事予定地として残っていた。城下町跡の道路は本来幅7m前後で、両側に直接民家が軒を連ねていたが、拡幅工事が終わった箇所では片側一車線の車道が通り、両側に歩道が置かれ、背後には和風に統一した町並みが旧来の景観を一変し、出現している。

文化課は平成13年度に工事を行う全長290mの予定地に対して用地買収終了の後、確認調査を実施したところ、すべての場所において現地表下に近世の遺構が良好に残っていることを確認した。そのため土木建築部と遺跡の取扱いについて協議した結果、工事实施に先立ち本調査を実施することになった。

調査は基本的に現状道路の両側が対象である。用地買収により撤去された民家はそれぞれ背後に退いて新しい家を建て、新しい生活を始めている。発掘調査では対象地域を一気に掘り下げることが効率的であるが、商業地であるため日常の営業の支障にならぬよう民家毎に区切って、しかも出入り口を確保するため一つの民家の前を半分ずつ調査するという手間取った方法になった。表土は調査区を開く毎に調査区外にトラックで搬出し、調査終了後埋め戻した。民家と民家の間には南北方向に排水路があり、現在利用しているため撤去して調査区域にいれることができなかった。従って、排水路を区切りとして長方形の調査区が連続することとなり、合計16区となった。

発掘調査は平成14年11月26日から平成15年3月18日まで行った。

## 2 調査団の構成

杵築城下町遺跡調査団の構成は、以下のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	田中恒治	大分県教育委員会教育長	
	岩尾康晴	大分県教育庁文化課長	
	麻生祐治	同	参事兼課長補佐
	清水宗昭	同	参事兼課長補佐

調査員	井川泰成	同	発掘調査一般事業担当主査 (現大分県宇佐市立駅川中学校教諭)
	生野令子	同	嘱託
報告書作成 (平成15年度)			
	高橋信武	同	発掘調査大型事業担当主幹
	生野令子	同	嘱託

## Ⅱ 調査の概要

### 1 遺跡の位置と環境

今回調査したのは杵築城下町遺跡のうち、杵築市大字杵築字中町及び谷町である。

杵築市は九州の北東部に突き出た国東半島の南部にあたり、同時に別府湾北部に開く守江湾という良港をもっている。国東半島は1,000万年以上前に噴出した火山堆積物からなる円形の半島で、円の中心部にあたる部分がかもっとも高い。そこから放射状に丘陵が広がり、丘陵の間には細長い沖積地が海から半島の中心に向かって展開するのが一般的な状態である。半島を一周すると分かり易いが、単純に丘陵と水田が繰り返し現れる。杵築城下町遺跡は守江湾の最奥部にあり、北側の高山川と南側の八坂川に挟まれた南東に延びる丘陵周辺に所在する。

八坂川の南には標高50m程度の低い丘陵が東西10km、南北4kmほどの規模で広がるが、その南西部には旧石器や縄文時代早期の遺跡として有名な速見郡日出町の早水台遺跡がある。10万年以上前の海岸段丘地形の上に、礫層や火山灰層が乗り、そこに日本列島でも有数の古さを示す石器が出土している。湾の北部にあって海を見下ろす海辺の山上には早期の稲荷山遺跡がある。古い押型紋土器、稲荷山式の標式遺跡でもある。干満差の激しい守江湾周辺は干潟が発達した遠浅の地形で、大分県内では数少ない縄文時代貝塚の集中分布地帯である。神領貝塚（近年圃場整備に伴い発掘調査された。西和田式・中津式）・東貝塚（凹線紋系の三万田式土器や晩期の土器が採集されている）・須崎貝塚・須賀貝塚・東大内山貝塚等が知られていたが、近年高山川流域で圃場整備後、山迫貝塚（後期前半：約3,500年前頃・中津式・福田KⅡ式）が発見された。

弥生時代には目立った遺跡はなく、次の古墳時代には杵築市域は県下有数の古墳密集地となるが、集落址は未発見である。市街地の南東約3kmには古墳時代前期の小熊山古墳（全長120mの県下最大級の前方後円墳）・御塔山古墳（全長80mの円墳）があり、後期には七双子古墳（横穴式石室・円墳）が調査されている。杵築市内では、他にも群集墳が約90基確認されている。

古代には杵築は豊後8郡のうち、速見郡に属し八坂郷が設けられた。郡の中心地は不明だが、別府市が候補地として有力であろう。八坂川下流の本庄遺跡では最近数年にわたり河川流路の変更に伴い水田地帯の発掘調査が行われ、古代から中世にわたる集落が出土した。古代八坂は杵築地方の郷の中心であったと考えられている。溝をめぐらせた多数の居館跡が見つかった。

1285年、大友氏の一族が杵築地方八坂下荘に地頭職を得て以来、木付氏がこの地域を治めてきた。中世後半の1394年、木付頼直が現在の杵築市北台付近に台山城を築いたとされているが、考古学的な裏付けは未発見である。1593年、秀吉により豊後の領主大友氏が追放された際、木付氏も同じ運命を辿った。中世末から近世初頭にかけて杵築の領主はめまぐるしく交替した。1596年杉原長房、1600年細川忠興、1632年小笠原忠知、1645年松平英親（三万七千石）である。最後の松平氏は幕

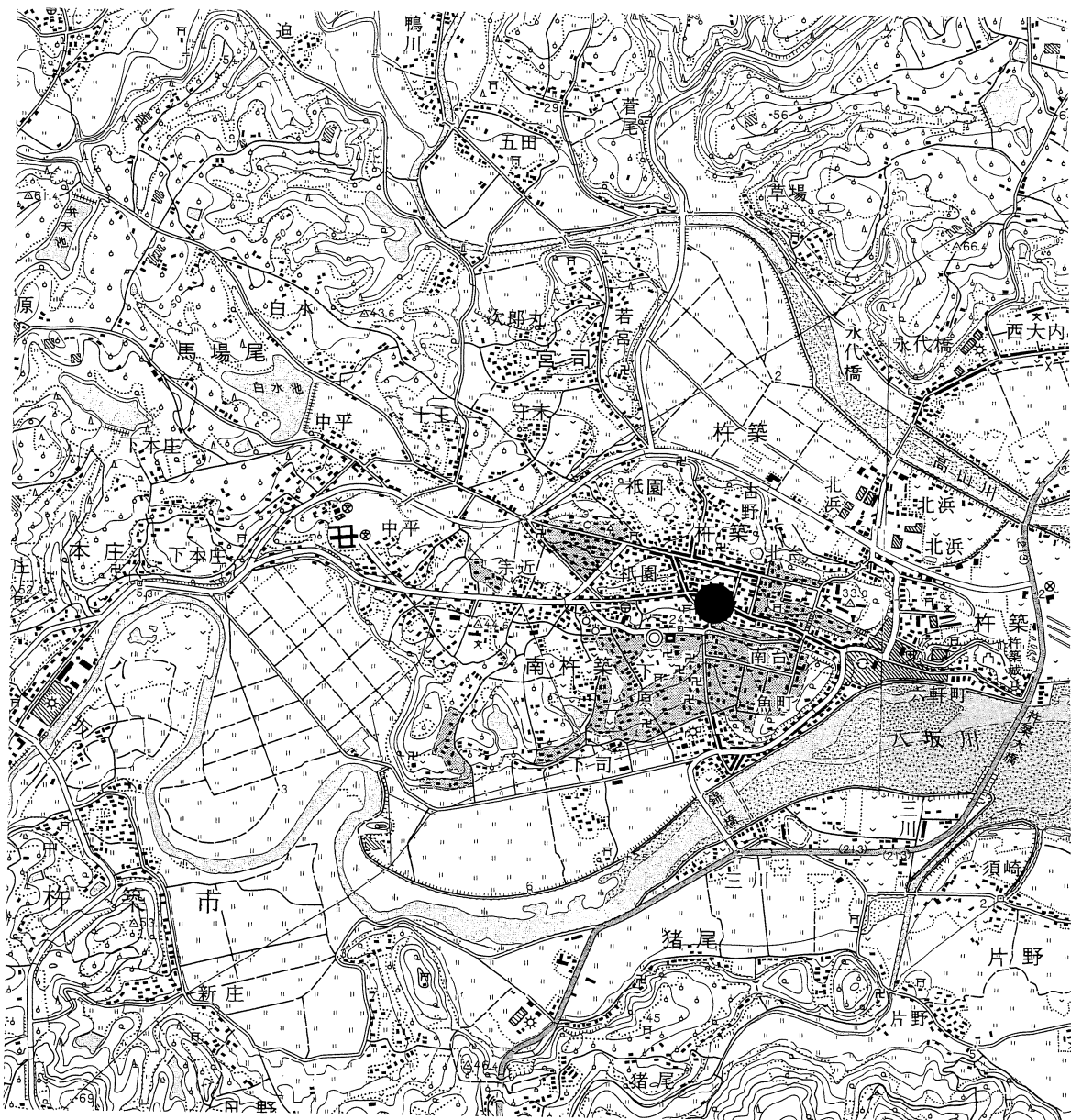
末まで続いた。近世の杵築領は国東半島の東半分を占め、現在の杵築市よりも相当広範囲であった。杵築城下町は北台の北東にあたる低地に御殿を設け、言葉どおりに地形を表す北台と南台の上を武家屋敷が占め、周辺の低地を町屋が取り巻いていた。1986年、北台中央部にある杵築小学校の改築に伴い発掘調査を行ったところ、近世初頭の良品のいわゆる初期伊万里や古九谷・柿右衛門人形等が多数出土した。付近は家老職を担当する上級武士の屋敷が集まった地域である。その後、今日まで県下で行われた多数の発掘調査でもこれ以上良好な遺物群は出土していない。今回の調査地付近は北台と南台との中間に位置し、中町・谷町という町屋があった場所であり、現在の町並みの骨格は城下町当時に踏襲している。

<引用・参考文献>

高橋信武・吉武牧子 1987 「杵築小学校内遺跡」杵築市埋蔵文化財調査報告書第1集 杵築市教育委員会

後藤一重 2003 「八坂の遺跡」八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第150輯



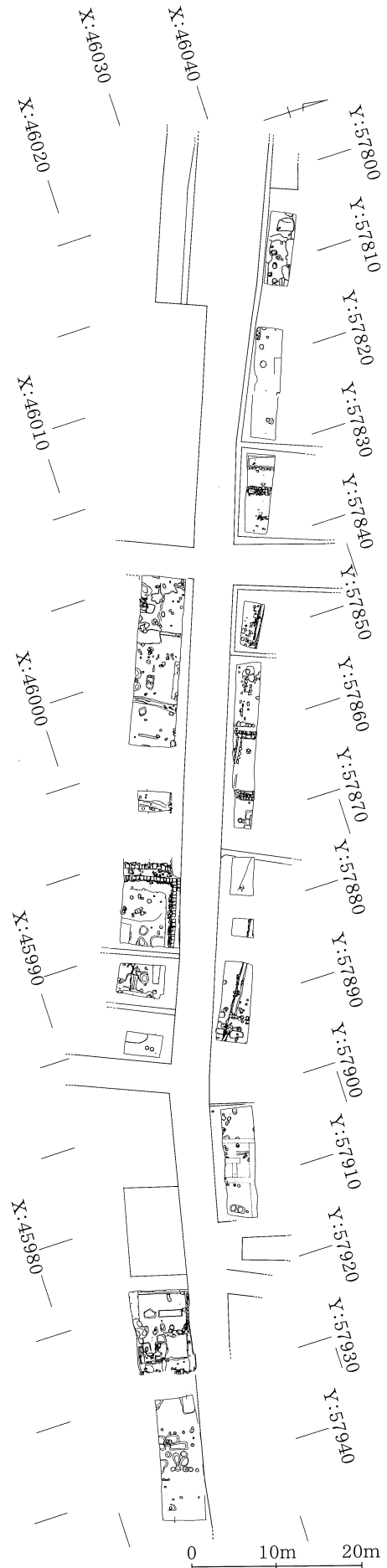
第1図 遺跡周辺地図 (1/25,000)



## 2 調査の成果

調査した場所は北台と南台に挟まれた町屋跡である。杵築城下町の近世の地図として知られているのは文化12年の作成だが、現在、町屋地区の中央部を東西に走る県道宗近魚町線は近世段階の道路を踏襲したものである。今回発掘調査した範囲は東西約290mであるが、東部では現道と重複するように平行に道路の側溝を検出した。しかし、西部では側溝が北側に向かって現道を次第に離れ、西端では道路両側の側溝まで検出し、これが約10度の角度で斜めに走っているのを確認した。この遺構に伴う遺物は17世紀前半から18世紀前半に属することから、城下町創建時の道路跡と考えられる。文化12年の絵図に描かれた道路は、中町の西端にあたる新町で鍵状に曲がるが、発掘調査で得られた成果では、当初この鍵曲がりには存在しなかったとみられる。

また、調査区では最大三枚の火事に関する層が重なっていることを確認した。記録に残る江戸時代の火事との関連が考えられる。発掘調査によって、城下町成立からその後の改造の過程まで明らかにすることも可能であると分かってきた。



第2図 調査区全体図

### Ⅲ 調査の記録

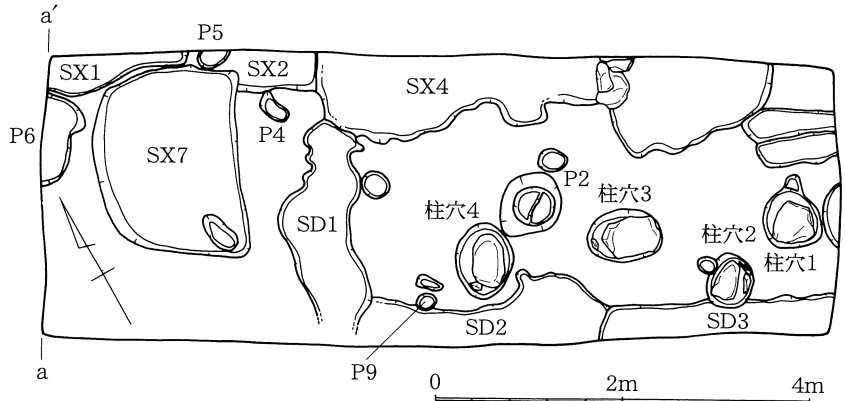
#### 1. 1区の遺構・遺物

##### <概要>

今回の調査区の最も西にあたり、東西5.8m、南北3.0mの調査区である。町屋敷絵図（1815）では『佐伯屋小助』の屋敷内に相当し、地表下70cmで総数19基の遺構（柱穴5基、溝状遺構3条、ピット9基、土坑1基、焼土

坑1基）を確認した。（第3図）  
遺構面は1面である。

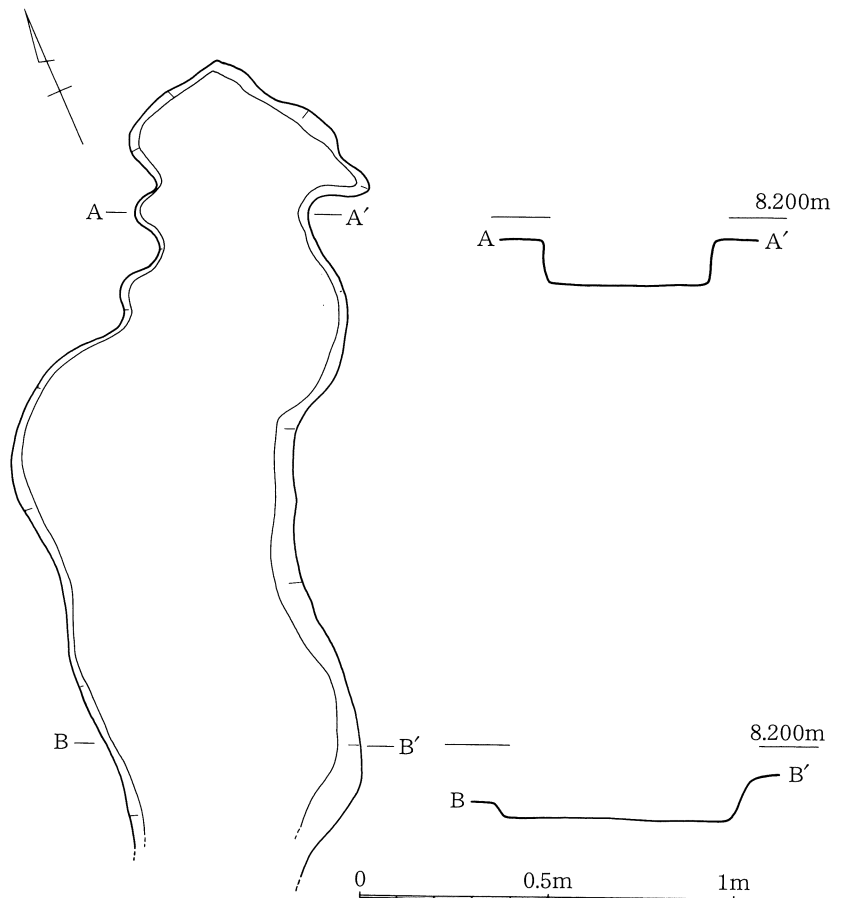
溝状遺構3条（SD1・SD2・SD3）は調査区のほぼ中央から南端にかけて確認した。これらはどれも浅く深さ10cm前後である。柱穴1～4は、どれも柱の基礎となる石が置いてある。調査区西端に、昭和22年8月23日の火災に伴うものと思われる焼土坑があり、その東隣に近代のものと思われる土坑（SX7）を確認した。調査区北には、現代の攪乱が広がっており（SX4）、近世の遺構は確認できない。



第3図 1区 平面図

##### ◆SD1（溝状遺構）（第4図）

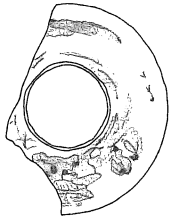
調査区を北から南へ伸びており、北でSX4（用途不明土坑）に切られ、南は調査区外へ伸びている。深さは10cm前後である。掘り方は不規則で、底面も凹凸が見られる。南は調査区外へ伸びており、同時にSD2と重複している。



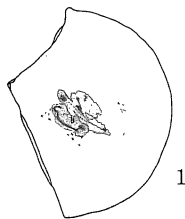
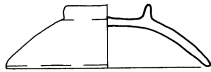
第4図 1区 SD1平断面図

◇SD 1 出土遺物 (第 5 図)

SD 1 出土の染付碗の蓋である。  
この遺物から、SD 1 は 19 世紀前半から中頃の遺構である。



No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(24.5)	3.4	6	肥前系	SD 1	1810~1860	端反碗の蓋



0 10cm

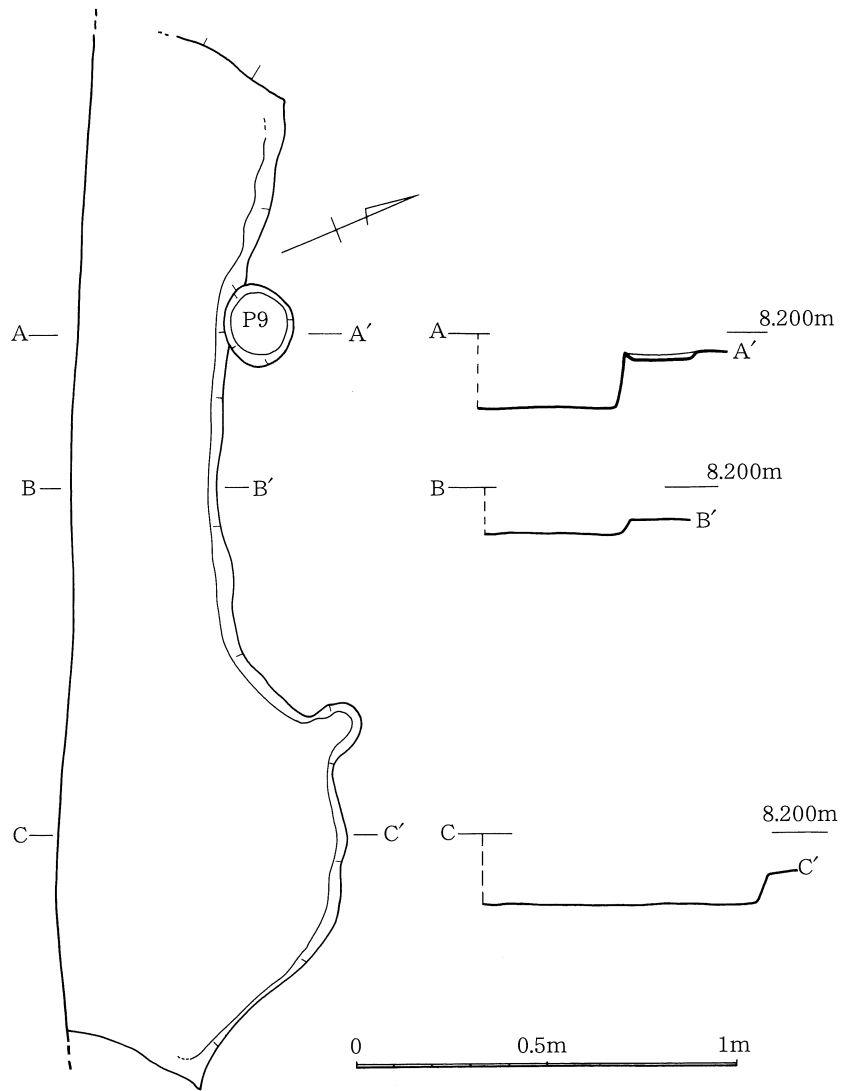
第5図 1区 SD1出土遺物

◆SD 2 (溝状遺構) (第 6 図)

東西に伸びる遺構であり、東西の両端でそれぞれ SD 3・SD 1 と重複し、南の掘り方は調査区外であるため確認できない。SD 1 同様に掘り方は不規則で、深さも 10cm 前後と浅い。

◇SD 2 出土遺物 (第 7 図)

1 は軒丸瓦である。巴文をもつものとみられ、周辺に珠文が 3 個残る。



第6図 1区 SD2平断面図



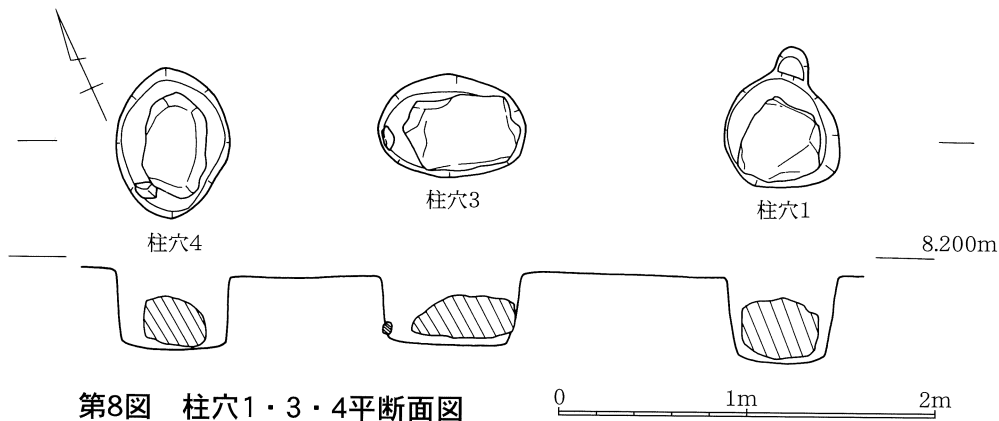
0 10cm

第7図 1区 SD2出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	軒丸	-	-	-	在地	SD 2	18世紀後半	瓦

#### ◆柱穴（1・3・4）（第8図）

東をSD 1、南をSD 2・3に囲まれる位置にある。3つの柱穴全てに直径40cm前後の礎石を確認した。柱穴は他にも1基（柱穴2）（第10図）確認しているが、柱穴1・3・4が約1.6m間隔で並んでいる。柱穴1からは遺物（第9図）を確認したが、他の柱穴から遺物は確認していない。これらの主軸は現道と同一でない。



第8図 柱穴1・3・4平面図

#### ◇柱穴出土遺物（第9図）

柱穴1から出土した軒丸瓦である。円の復元口径は17cm、巴文をもち、6個の珠文をもつ。

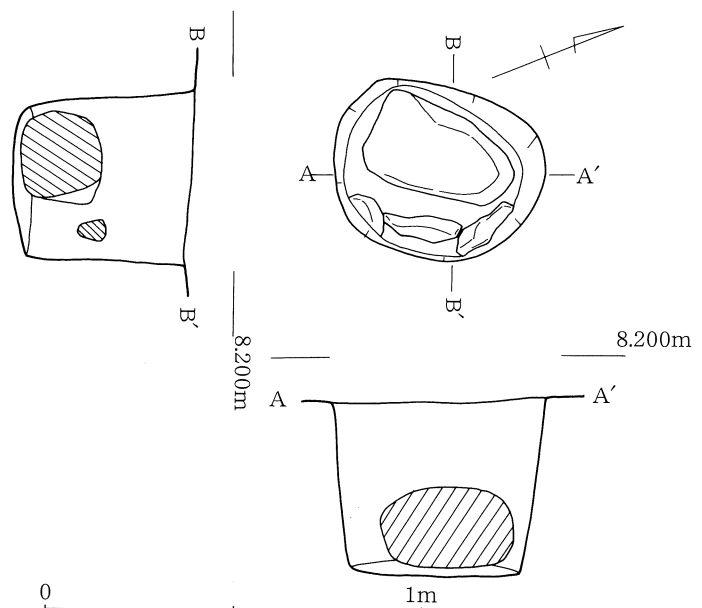


第9図 1区 柱穴出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	軒丸	-	-	-	在地	柱穴1	?	瓦

#### ◆柱穴2（第10図）

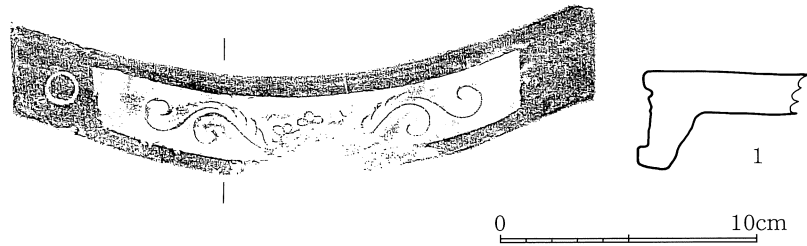
柱穴1・3・4の並びから30cmほど南に位置する長軸55cm、短軸50cm、深さ40cmの柱穴である。遺構の南でSD 3と重複している。直径30cmほどの礎石を確認しており、掘り方や礎石レベルから、柱穴1・3・4とほぼ同時期の遺構と考えられる。しかし、本遺構と関連性のある柱穴は調査区内では確認できなかった。



第10図 1区 柱穴2平面図

◇柱穴2出土遺物（第11図）

柱穴2から出土した軒平瓦である。府内三の丸遺跡の分類によるE-5類（17世紀後半～末前後）に該当する（吉田 1993）。

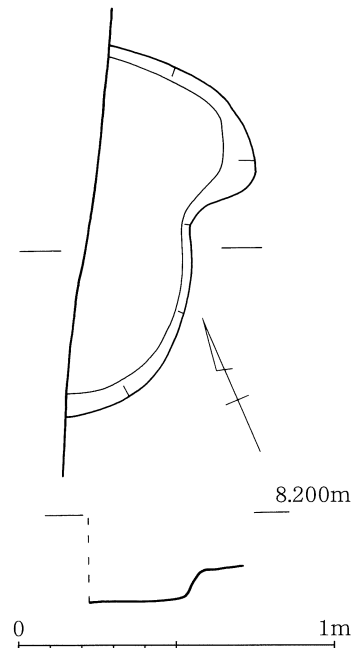


第11図 1区 柱穴2 出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	軒平	-	-	-	在地	柱穴2	17世紀後半～17世紀末	瓦

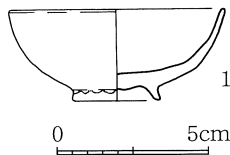
◆P 6（焼土坑）（第12図）

調査区西端に位置する。表土直下から掘り込まれており土層断面（第18図）から見て、1947（昭和22）年8月23日の火災の際の土坑と考えられる。



第12図 1区 P6平断面図

◇P 6出土遺物（第13図）



第13図 1区 P6出土遺物

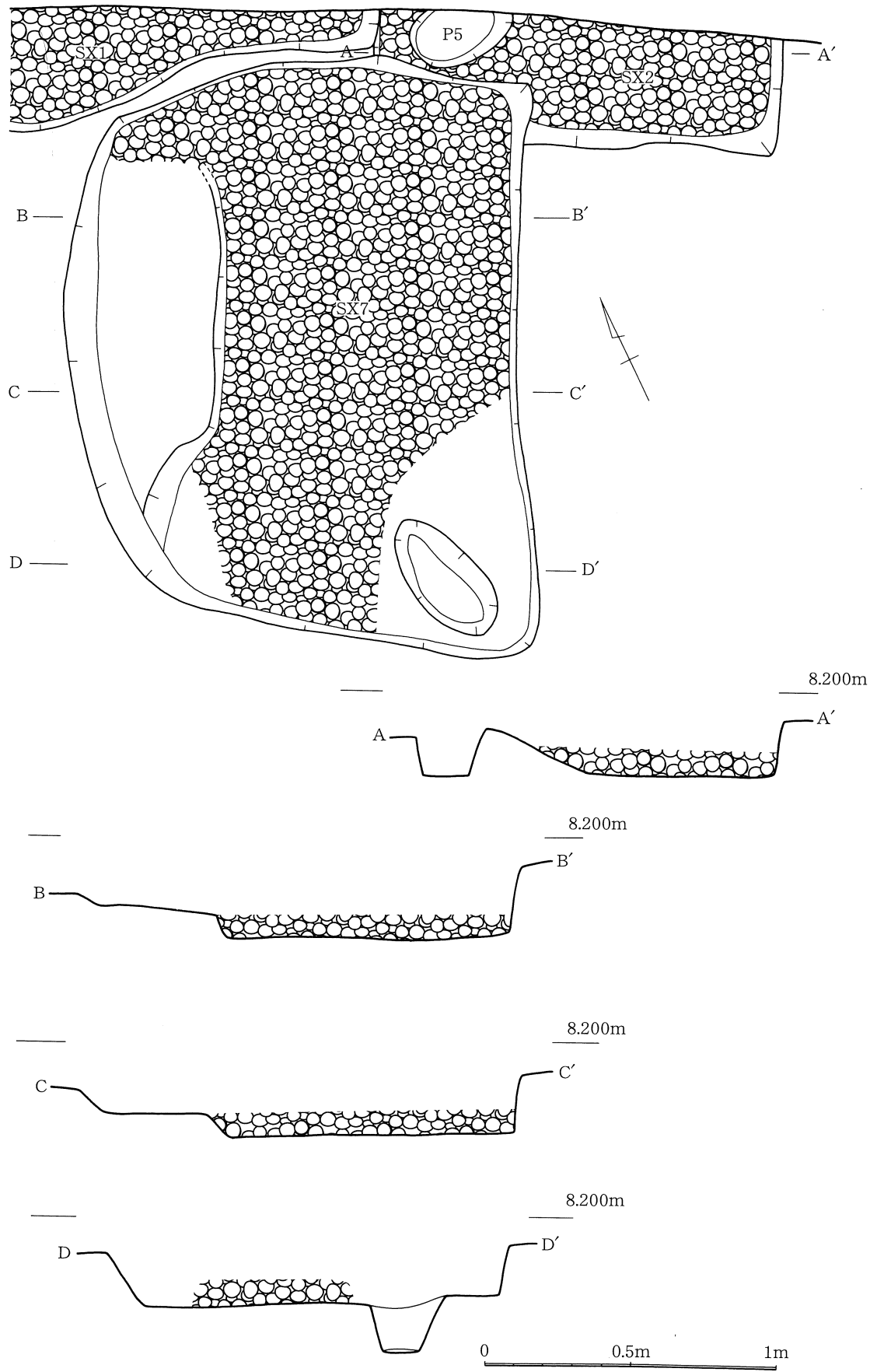
No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	5.8	3.6	2.6	瀬戸美濃系	P 6（焼土坑）	大正後半～昭和	1947年8月23日の火災跡

◆S X 7（用途不明土坑）（第14図）

P 6の東に位置し、近代の遺物や拳大の石が多量に出土し、近代の廃棄土坑と思われる。石を取り除いた下には、砂地の堅い盤を確認した。

◆S X 2（用途不明土坑）（第14図）

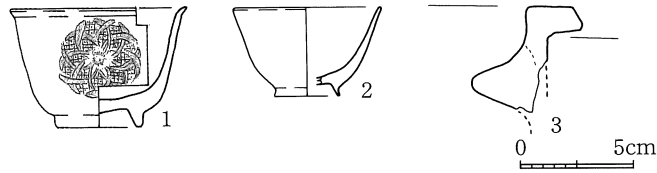
調査区北端に位置し、南にP 4が隣接し、西でS X 7とP 5と重複する。東は現代の攪乱に切られている。深さは20cmほどあるが、掘り方が全て確認できないため、どのような性格の遺構かはっきりしない。



第14图 1区 SX7·SX2平断面图

◇ S X 7・2 出土遺物 (第15図)

1、2は S X 7 から出土した近代の遺物である。3は S X 2 から出土した焜炉か火鉢の口縁部である。

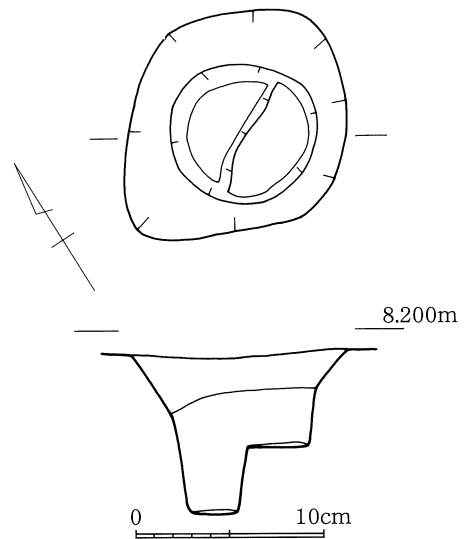


第15図 1区 S X 2・7 出土遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	6.9	4.7	(3.3)	不明	S X 7	大正後半～昭和	近代の攪乱か
2	磁器	5.8	3.5	(2.6)	瀬戸美濃系	S X 7	大正後半～昭和	"
3	瓦質				在地系	S X 2	19世紀	焜炉か火鉢の口縁部破片

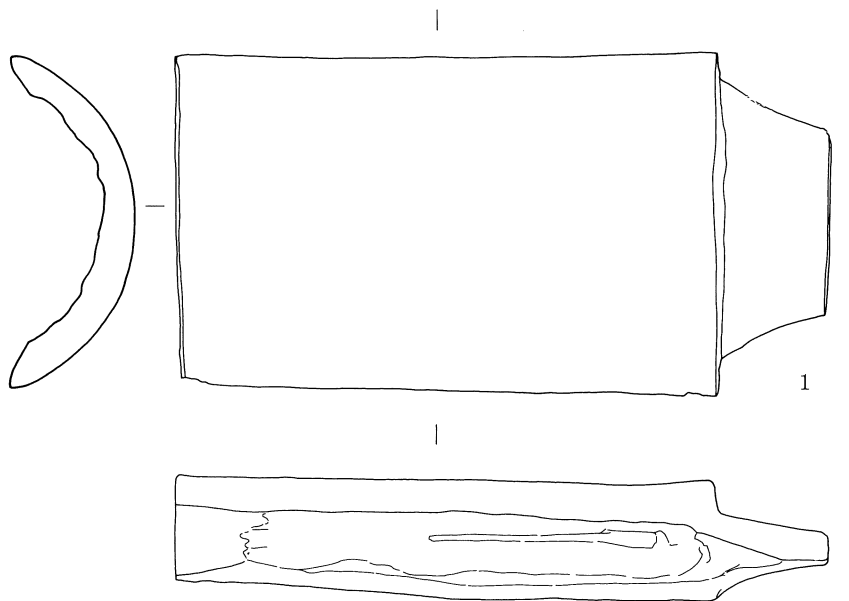
◆ P 2 (柱穴・土坑) (第16図)

柱穴 4・3 の北に位置する長軸65cm、短軸60cmの遺構である。他の柱穴と酷似しているが礎石が見つからず、柱穴とは断定できない。遺物は出土していない。

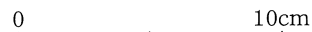


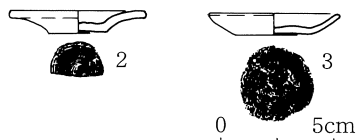
第16図 1区 P2 平断面図

◇ その他の遺物 (第17図)



第17-1図 1区 その他の遺物

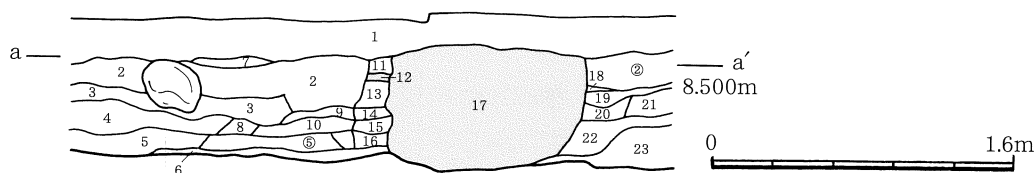




第17-2図 1区 その他の遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	丸瓦	—	—	—	在地	1区一括	?	瓦
2	陶器	5.3	0.9	2.3	関西系	1区一括	18世紀後半～19世紀	
3	土器	5.0	0.85	3.0	関西系	南壁	19世紀前半～中頃	

◆西壁土層図 (第18図)



第18図 1区 西壁土層図

1. 表土 2. 暗黄褐色 砂質 レキを含む ②. 11層より黄土を含む 3. 黒褐色 砂質 貝殻含む 4. 2層よりやや暗い 5. 黄褐色 締り強 ⑤. 5層よりも明るい 黒土を少し含む  
 6. 5層よりも暗い 砂質 7. 黄褐色 砂質 もろい 8. 4層よりも明るい 9. 黒褐色 黄土を多く含む 10. 9層よりも黄土が少ない 11. 暗黒褐色 黒色に近い 12. 焼土 13. 茶褐色 焼土を少し含む  
 14. 13層より黄土を多く含む 15. 黄土 粘質 16. 黄土 粘質 底部に赤褐色土を含む 17. 灰褐色 焼土 (昭和22年の火災) 18. 灰層 19. 茶褐色 黄土を少し含む 20. 19層よりも黄土を多く含む  
 21. 20層より黄土が少ない 貝殻多い 22. 茶褐色 砂質 レキを含む 23. 茶褐色 砂質 締り弱

西部の大きな穴 (第17層) がP 6(1947年の火災に伴うもので、それより上 (第1層) が表土である。



1区 遺構検出状況 (東から)



## 2. 2区の遺構・遺物

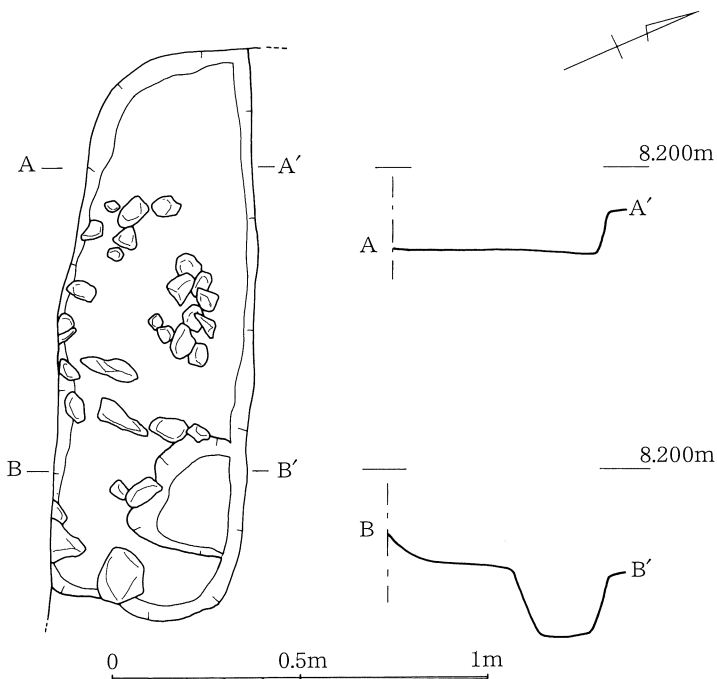
### <概要>

1区の約5m東に位置する東西15.7m、南北3.2mの調査区である。町屋敷絵図では1区同様『佐伯屋小助』の屋敷内に相当する。

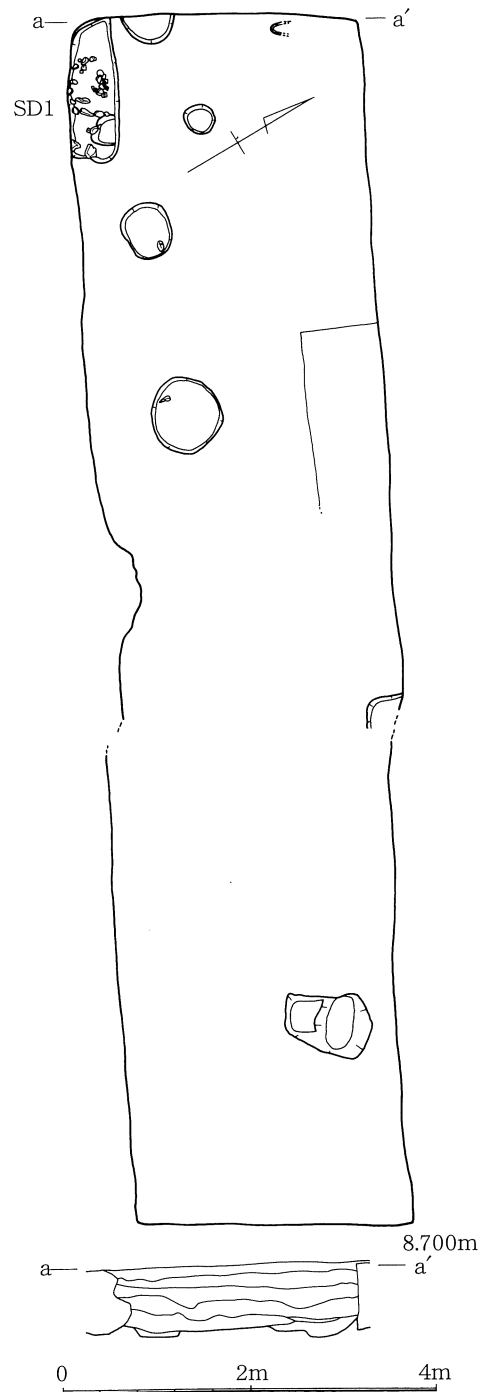
本調査区では地表下60cmで5基の遺構（溝状遺構1条、土坑4基）を検出した（第19図）。1区と比べると非常に遺構が少なく、土層断面で判断すると、コンクリート面下25cmの面で備前の水屋糞が見られ、表土剥ぎ時点で下げすぎた可能性もある。

### ◆SD1（溝状遺構）（第20図）

調査区西南端に位置し、長さ1.5m、幅0.5m、深さ10cmの溝状遺構である。東西に伸びていると思われるが、西は調査区外へ、南の掘り方も調査区外となっており全体像は確認しがたい。全体的に浅く、拳よりもやや小さい石が散在しており、位置・検出レベルから1区のSD2もしくはSD3とつながる可能性もあるが、どちらも遺物が少なく、時期を断定することは出来ない。

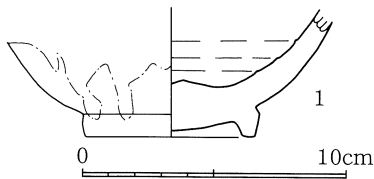


第20図 2区 SD1平断面図



第19図 2区 平面図・東壁土層図

◇ SD 1 出土遺物 (第21図)

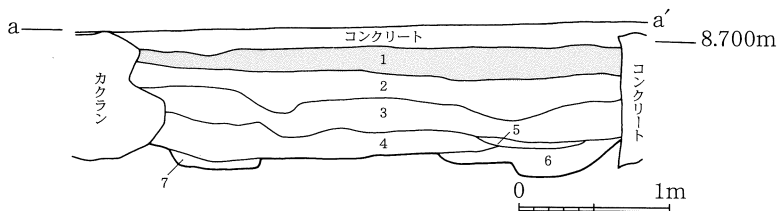


SD 1 出土の陶器である。高台は削り出しており、外面上部に釉がかかる。

第21図 2区 SD1出土遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	-	-	6.8	肥前?	SD 1・北壁	17世紀?	底部完形

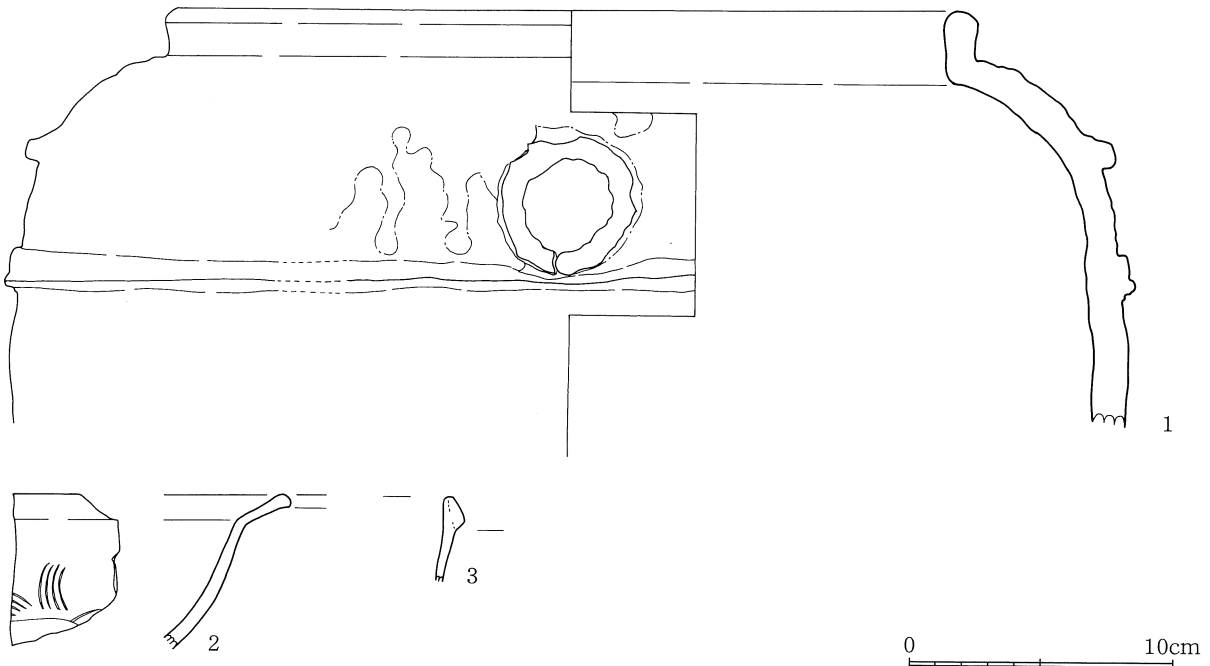
◆ 西壁土層図 (第22図)



1. 焼土 赤色粒・瓦・炭を含む (昭和22年の火災)
2. 褐色混じり土 明黄褐色 ブロック・粒・炭を含む 近世の遺物含む
3. 黒褐色土 2~5cmのレキを含む 粘質
4. 褐色土 地山直上
5. 砂層 6. 明褐色土
7. 4層よりやや暗い 遺物含む

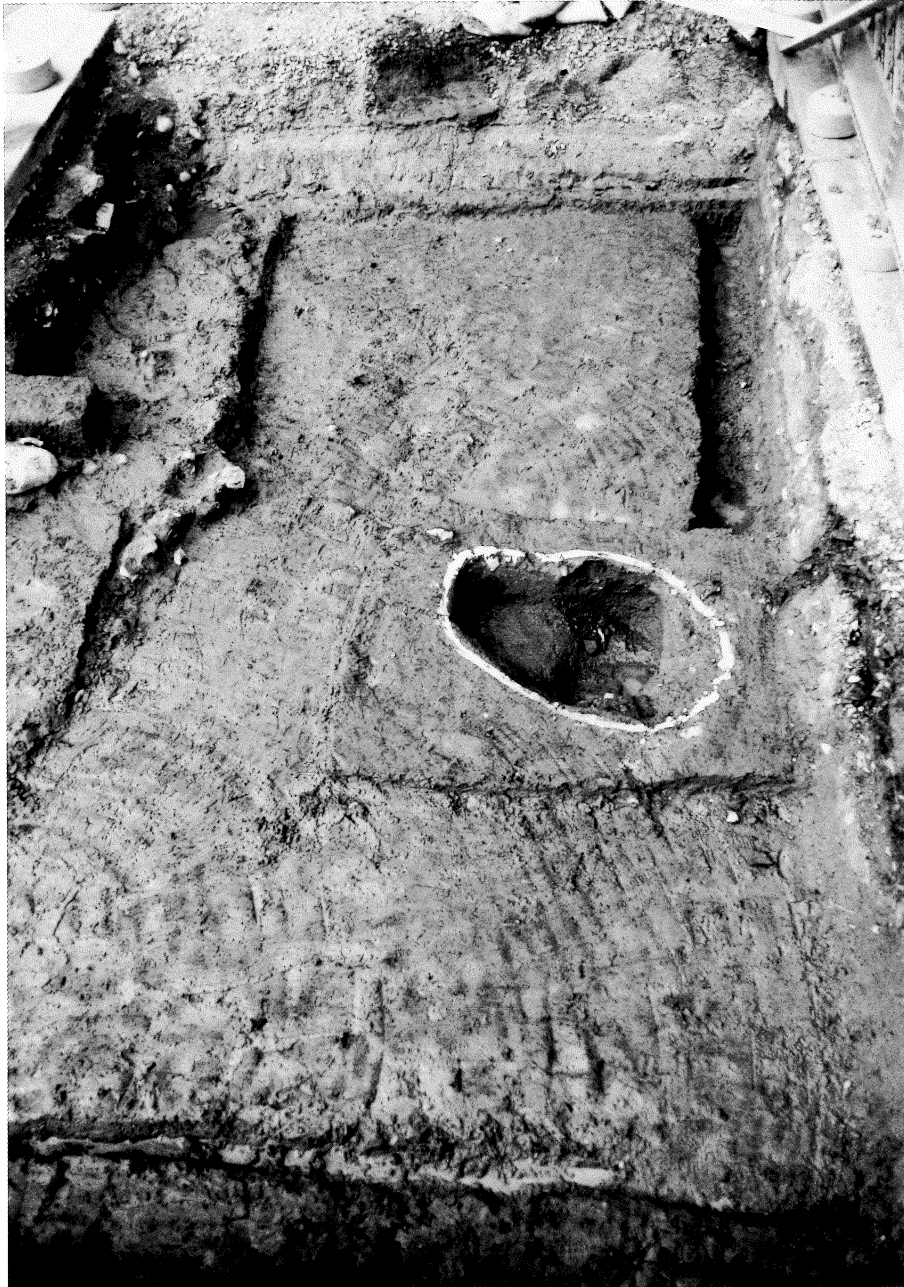
第22図 2区 西壁土層図

◇ その他の遺物 (第23図)



第23図 2区 その他の遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	31	—	—	備前	北壁	16世紀末~17世紀前半	水屋甕
2	磁器	—	—	—	肥前	北壁	17世紀後半	青磁 口縁部破片
3	磁器	—	—	—	中国	2区一括	11世紀~12世紀	白磁 口縁一部



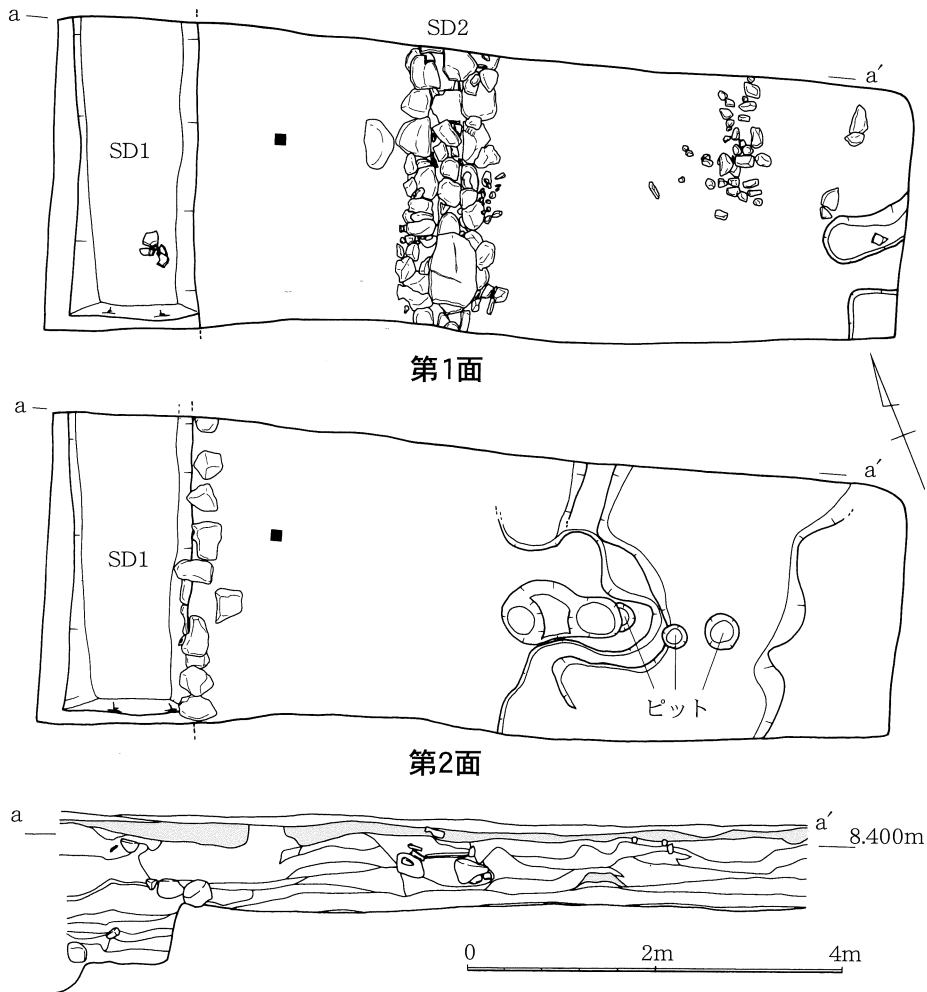
2区東 完掘状況 (西から)

### 3. 3区の遺構・遺物

#### <概要>

北台へと上る『紺屋町の坂』の西に隣接する東西9m、南北3mの調査区である。町屋敷絵図では1区・2区同様、『佐伯屋小助』の敷地内である。

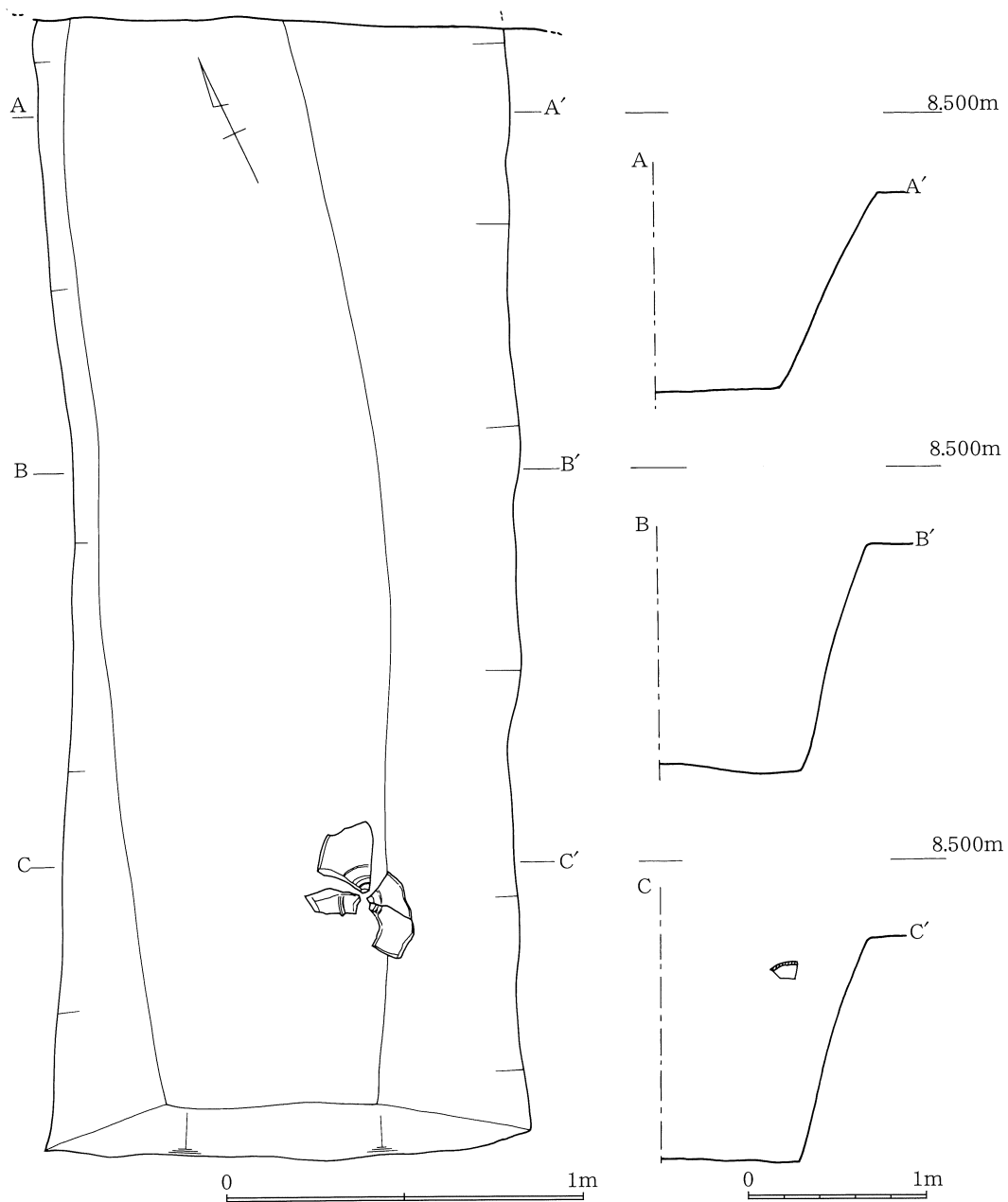
当初、地表下40cmで2基の遺構（溝状遺構2条）を検出したが（第24図）、検出面を下げていくと地表下80cmで新たに3基の遺構（ピット3基）を検出した（第24図）。溝状遺構2条はほぼ平行に南北に伸びており、SD2は屋敷の区画溝だと思われる。



第24図 3区 平面図（第1・2面）と北壁土層図

#### ◆SD1（溝状遺構）（第25図）

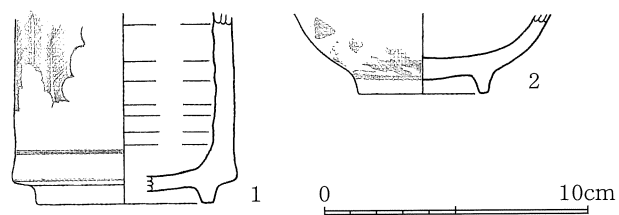
調査区の西端にあるSD1は、深さが2m近くあり、北台から南の谷川へと南北に伸びる水の湧出の多い溝である。西側の掘り方は調査区外のため確認できなかった。表土剥ぎを行ったレベル8.0～8.1mの段階では石列は確認できなかったが、SD1とSD2の間に広がる整地層と思われる黄褐色土を取り除く段階で石列を検出（第24図）。SD1の掘り方も30cm近く広がった。このことから、SD1はもともと北台から流れる溝であったが、人為的にラインを決められることなく周囲に砂層や礫層を作りながら氾濫を繰り返し、後に人為的にラインを定められ、石列造作後に黄土で整地し、溝との区切りをつけたと考えられる。上層から福岡産の大皿など中世の遺物が出土した。



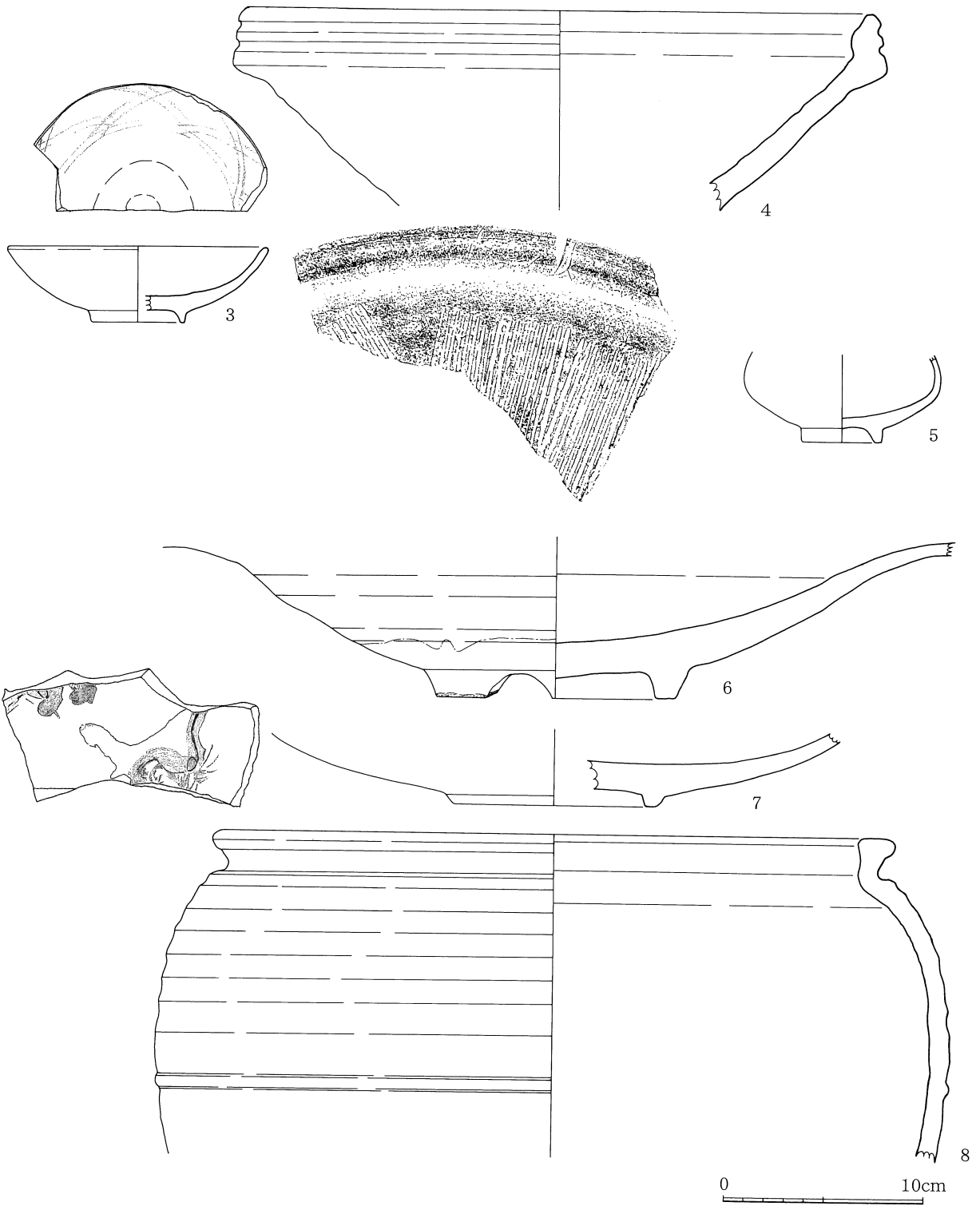
第25図 3区 SD1平断面図

◇SD1出土遺物(第26図)

1、2、3は肥前系の磁器である。4は備前の播鉢の口縁部であり、6が福岡産の大皿である。



第26-1図 3区 SD1出土遺物

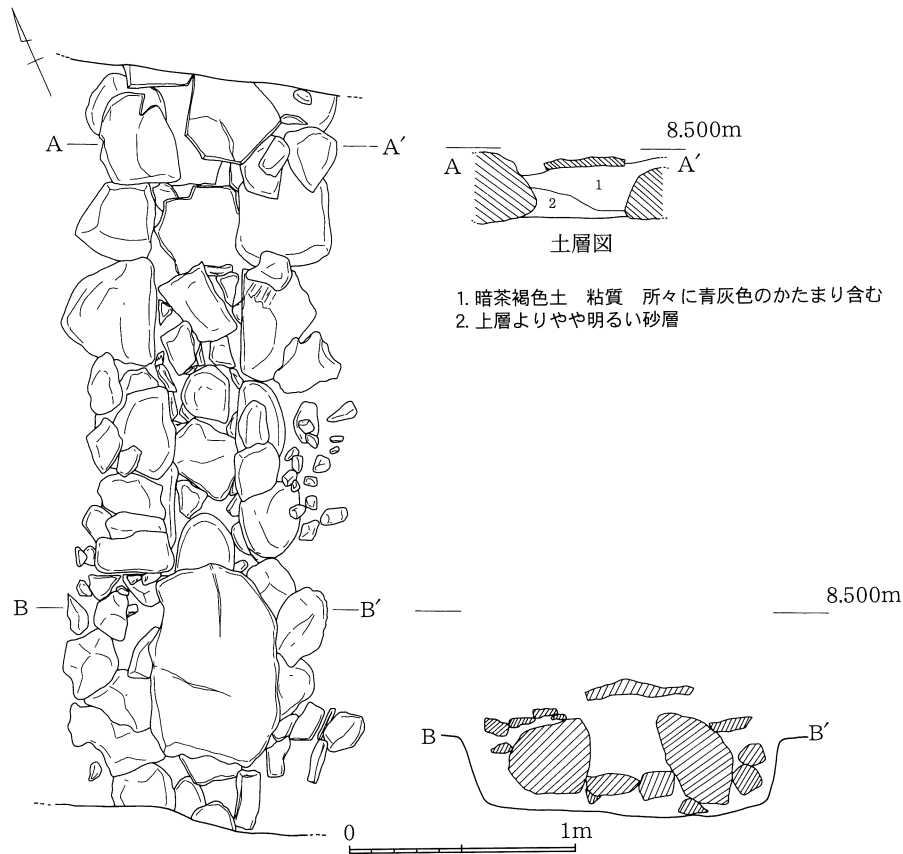


第26-2图 3区 SD1出土遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(12.9)	3.8	(4.7)	肥前	SD 1	18世紀後半	
2	磁器	—	—	(7.0)	肥前	SD 1	?	
3	磁器	—	—	5.2	肥前	SD 1	?	底部完形
4	陶器	(30.8)	—	—	備前	SD 1	17世紀前半	播鉢口縁部
5	陶器	—	—	(4.8)	関西系	SD 1	18世紀～19世紀	
6	磁器	—	—	(11.8)	福岡産	SD 1	19世紀	大皿 藁灰釉
7	磁器	—	—	(10.2)	肥前	SD 1	1630～1650年	
8	陶器	(34.0)	—	—	備前	SD 1	16世紀末～17世紀?	水屋甕

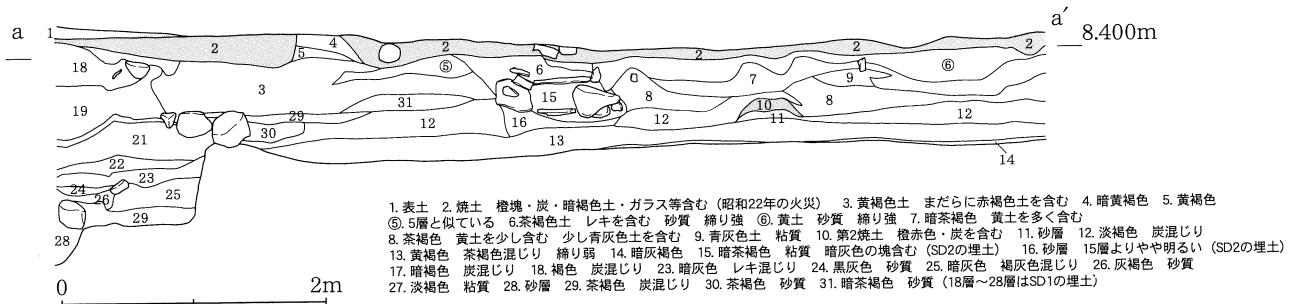
### ◆SD 2 (溝状遺構) (第27図)

調査区のほぼ中央に位置するSD 2は、長さ3m、幅1mの暗渠である。検出時点で石組みが露出しており、SD 1同様北台から南の谷川へと南北に伸びる。30cm以上ある石を一段丁寧に固く組んでおり、暗渠内の埋土(下層は砂層)からも水路であったことが分かる。暗渠の南には石蓋が残っており、屋敷の区画溝であった可能性もある。遺物は出土していない。



第27図 SD2 平面図

### ◇北壁土層図 (第28図)

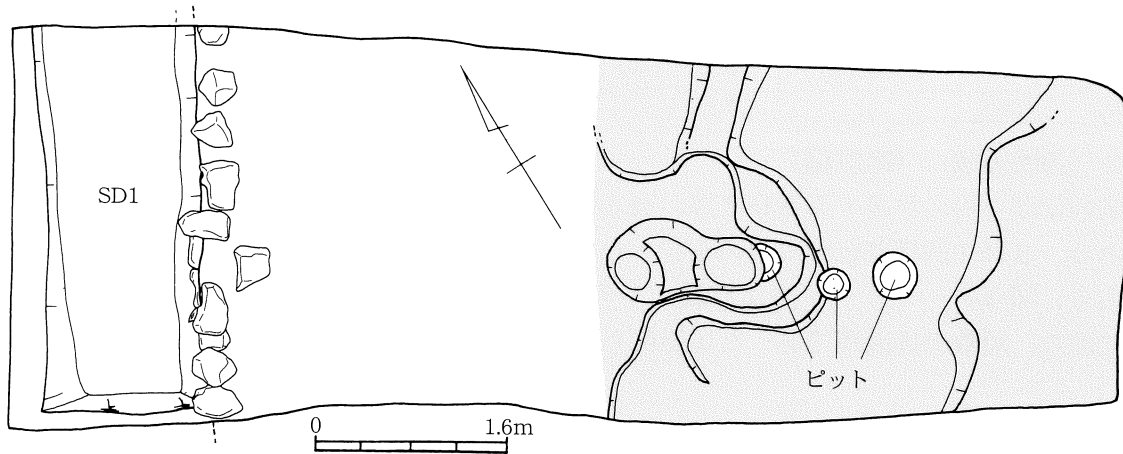


第28図 3区 北壁土層図

◆焼土層（第29図）

SD1の東側には土層断面（第28図 第10層）からわかるように、レベル7.9m付近で焼土が広がる。この焼土層はSD2の石列よりも下で検出し、SD2の石列には焼痕は見られない。

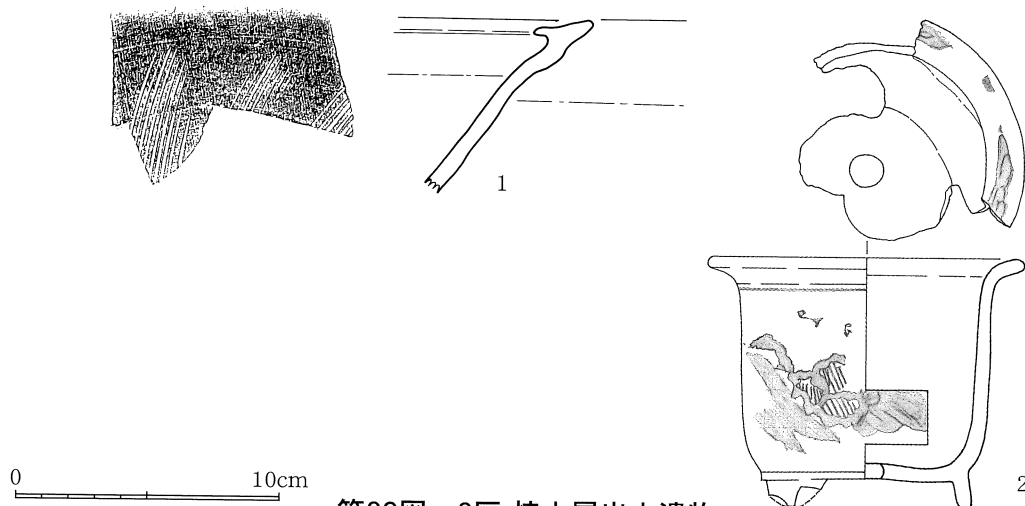
焼土を取り除くと、ピットを3基検出した。しかしこのピットには柱穴としての並びは見られない。



第29図 3区 焼土の範囲

◇焼土出土遺物（第30図）

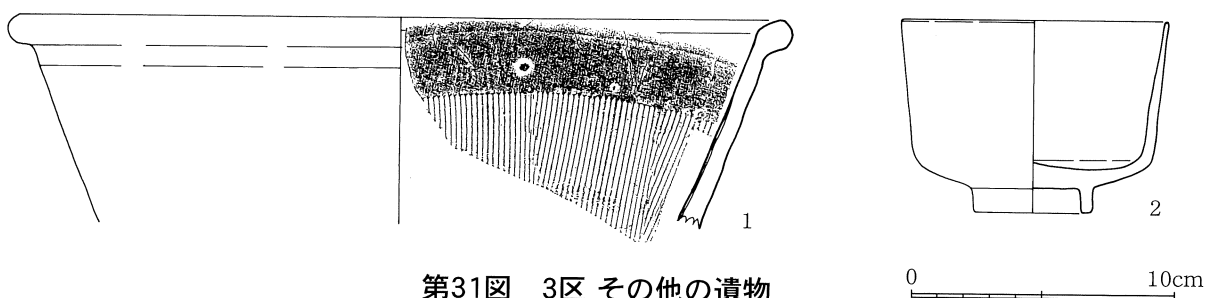
焼土層からは、肥前の播鉢口縁部など17世紀前半の遺物が見られる。



第30図 3区 焼土層出土遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	—	肥前	焼土層	17世紀前半	播鉢口縁の一部
2	磁器	(12.0)	8.2	9.8	肥前	焼土層	18世紀後半	植木鉢

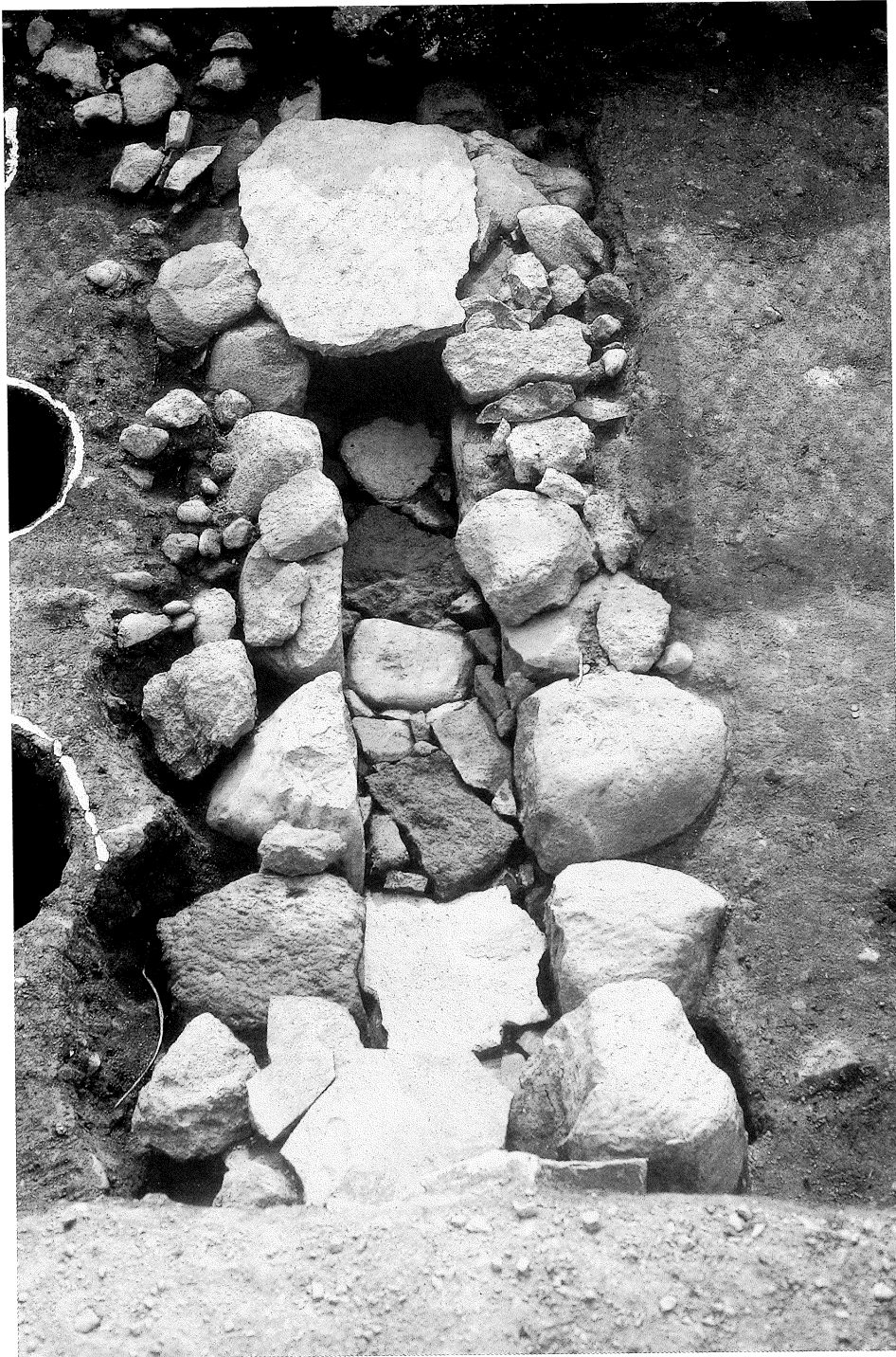
◇その他の遺物（第31図）



第31図 3区 その他の遺物



No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	—	—	3区一括	18世紀	播鉢口縁部
2	陶器	(10.9)	4.6	7.6	肥前	黄土層下	18世紀	

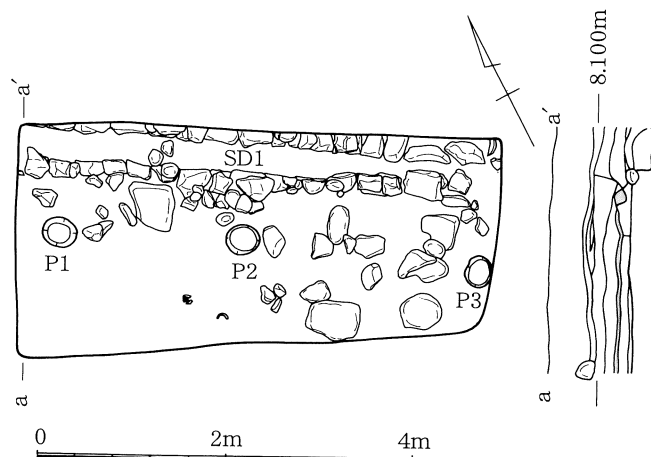


3区 SD2 検出状況 (北から)

## 4. 4区の遺構・遺物

### <概要>

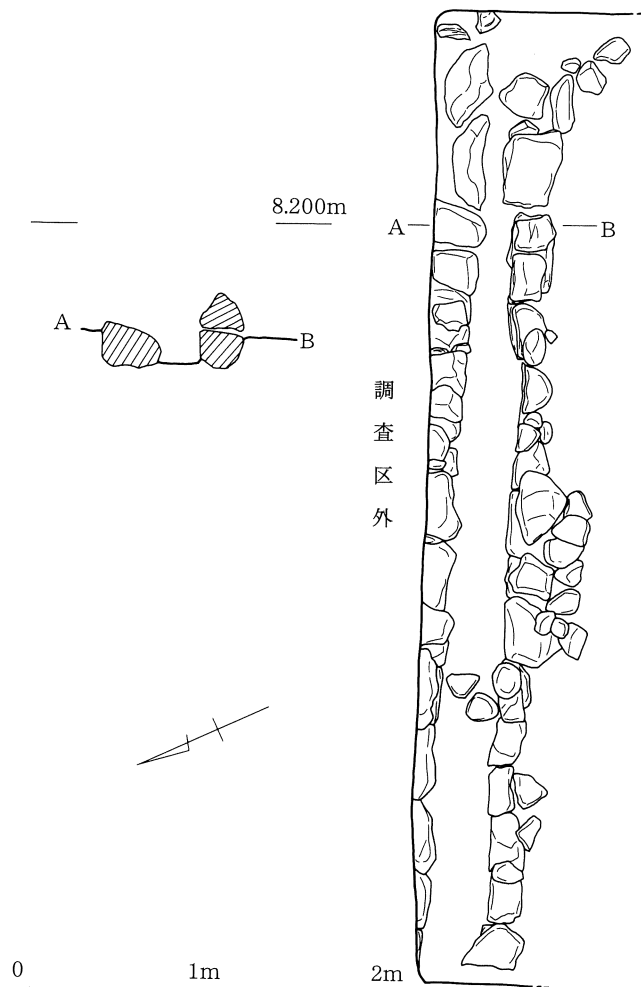
『紺屋町の坂』の東隣で長さ5.2m、幅2.5mの調査区である。町屋敷絵図では1、2、3区同様『佐伯屋小助』の敷地内に相当すると思われる。総数4基の遺構（溝状遺構1条、ピット3基）を確認した。（第32図）



第32図 4区 平面図と西壁土層面

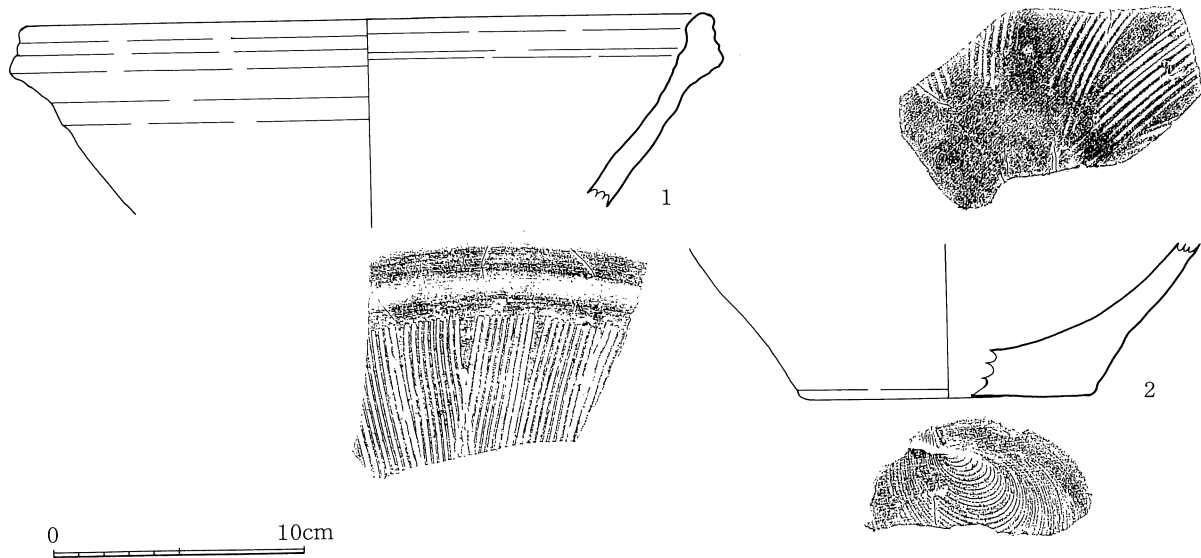
### ◆SD1（溝状遺構）（第33図）

調査区北で検出した長さ4.8m、幅0.7m、深さ0.2mの溝状遺構である。石は、20cm～40cm大の比較的大きめの自然石をならべている。東西方向に調査区内全体に伸びる遺構である。溝状遺構の主軸はN-57°-Wである。調査区全面を下げるとき、SD1に伴う最大二段の石列を確認した。しかしSD1は北の掘り方が調査区外に広がるため、石列はSD1の南でしか確認できない。近世の道路面に伴う側溝と考えられるが、道路面は検出できない。溝内部から播鉢片が出土した（第34図）。



第33図 4区 SD1平断面図

◇SD 1 出土遺物 (第34図)

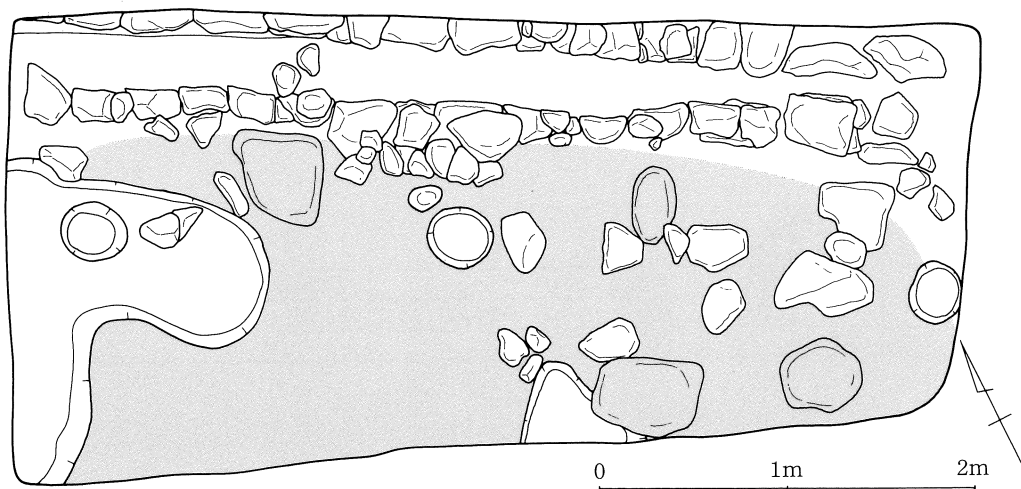


第34図 4区 SD1出土遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(27.0)	—	—	堺・明石/備前	SD 1 上層	18世紀	播鉢口縁部破片
2	陶器	—	—	(11.9)	肥前	SD 1 上層	17世紀前半	播鉢底部破片

◆焼土 (第35図)

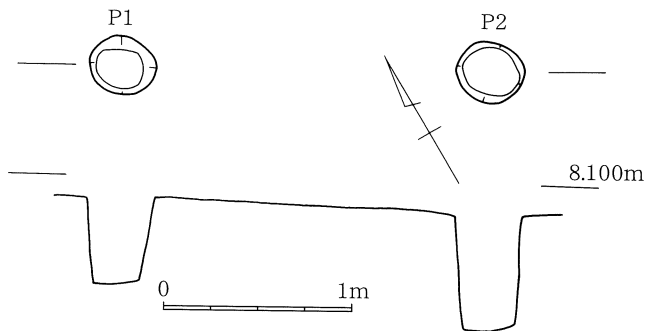
SD 1 よりも南ではほぼ全域に焼土が広がる。焼土検出レベルは7.9m前後で、数cm~20cmの厚さである。激しく焼けたと思われる、硬化しているところもある。焼石も点在する。しかし、SD 1 には焼石は見られない。SD 1 造作以前の火事の跡と思われる。この焼土から、関西系の茶入れが出土している (第38図)。



第35図 4区 焼土範囲

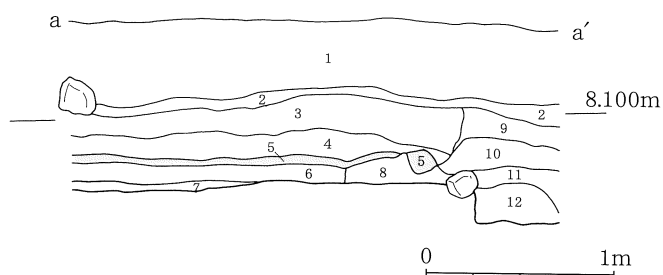
◆柱穴（第36図）

SD 1の南側で、SD 1とほぼ平行に並んだピットを3基検出した。ピットはSD 1の南に展開しているため、近世の道路面はSD 1よりも北にあると思われる。現道よりも近世の道路は北に振っていたと言える。P 1と2はSD 1と並行に2m間隔で並ぶ。さらにすべての柱穴から柱痕を確認した。



第36図 4区 柱穴平断面図

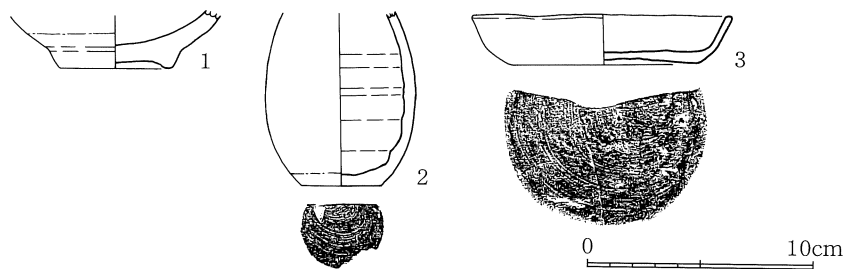
◆西壁土層図（第37図）



- 1. 表土 2. 黄土 締り強 3. 暗褐色土 炭混じり
- 4. 3層より炭含まず 5. 焼土 6. 暗褐色土 7. 黄土
- 8. 青灰色土と褐色土の混合 粘質 褐色土は砂質
- 9. 暗灰色土 粘質 もろい 10. 暗灰色土 砂質 ややもろい
- 11. 10層よりも明るい 砂質 12. 青灰色土 砂質

第37図 4区 西壁土層図

◇その他の遺物（第38図）



第38図 4区 その他の遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	(4.6)	福岡産	No. 6	17世紀前半	藁灰釉 上野高取
2	陶器	—	—	(3.2)	関西系	No. 5 (焼土層)	18世紀～19世紀?	茶入れ
3	土器	10.4	1.85	7.4	在地	No. 4	?	

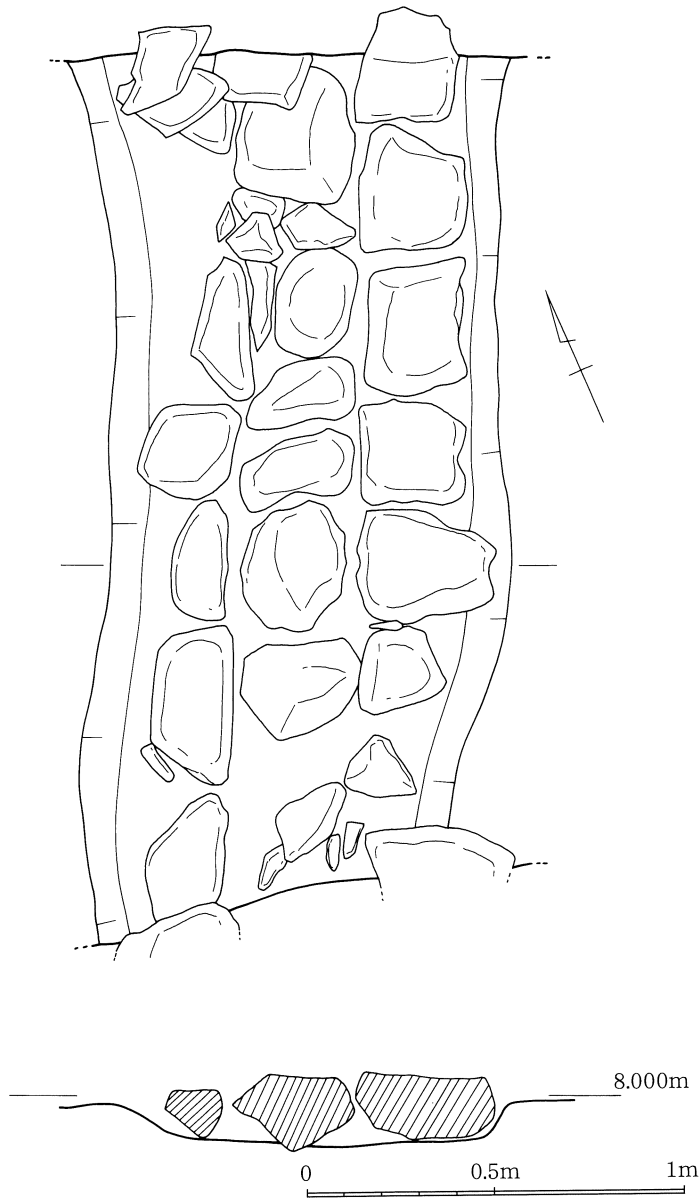
## 5. 5区の遺構・遺物

### <概要>

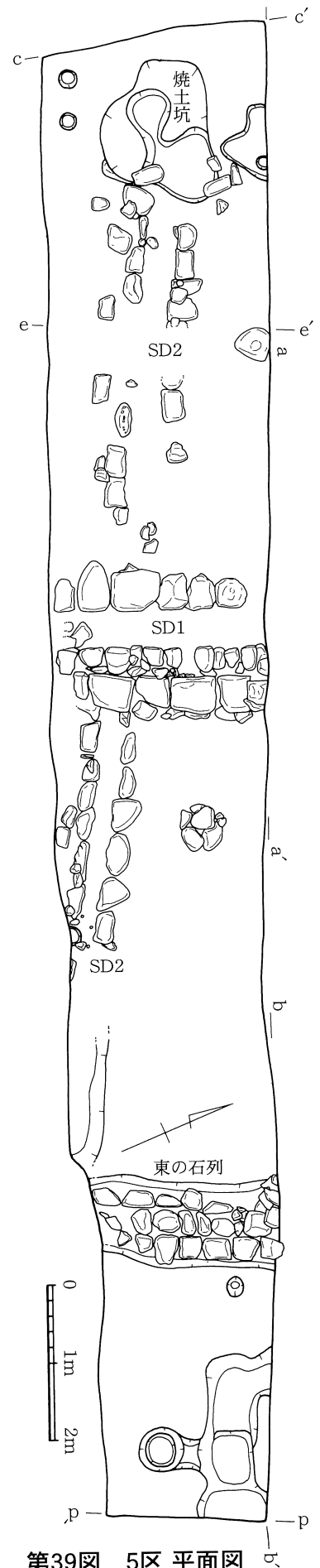
4区の東に隣接する東西9.7m、南北2.5mの調査区である。総数7基の遺構（溝状遺構2条、石組み1基、焼土坑1基、礎石2基、道路遺構1基）を確認した（第39図）。溝状遺構の重複から、溝状遺構は2面ある。

### ◆東の石列（第40図）

調査区の東部で南北へ伸びると思われる石列を検出した。北台から降りてくるようなゆるい勾配がある。道路遺構を掘り込むように作っていることから、町屋敷絵図の『須磨屋諸兵エ』と『□□□□屋』との区画溝と考えられる。時期を特定する遺物が見られないため、SD1とのつながりは断定できない。また、遺物は出土していない。



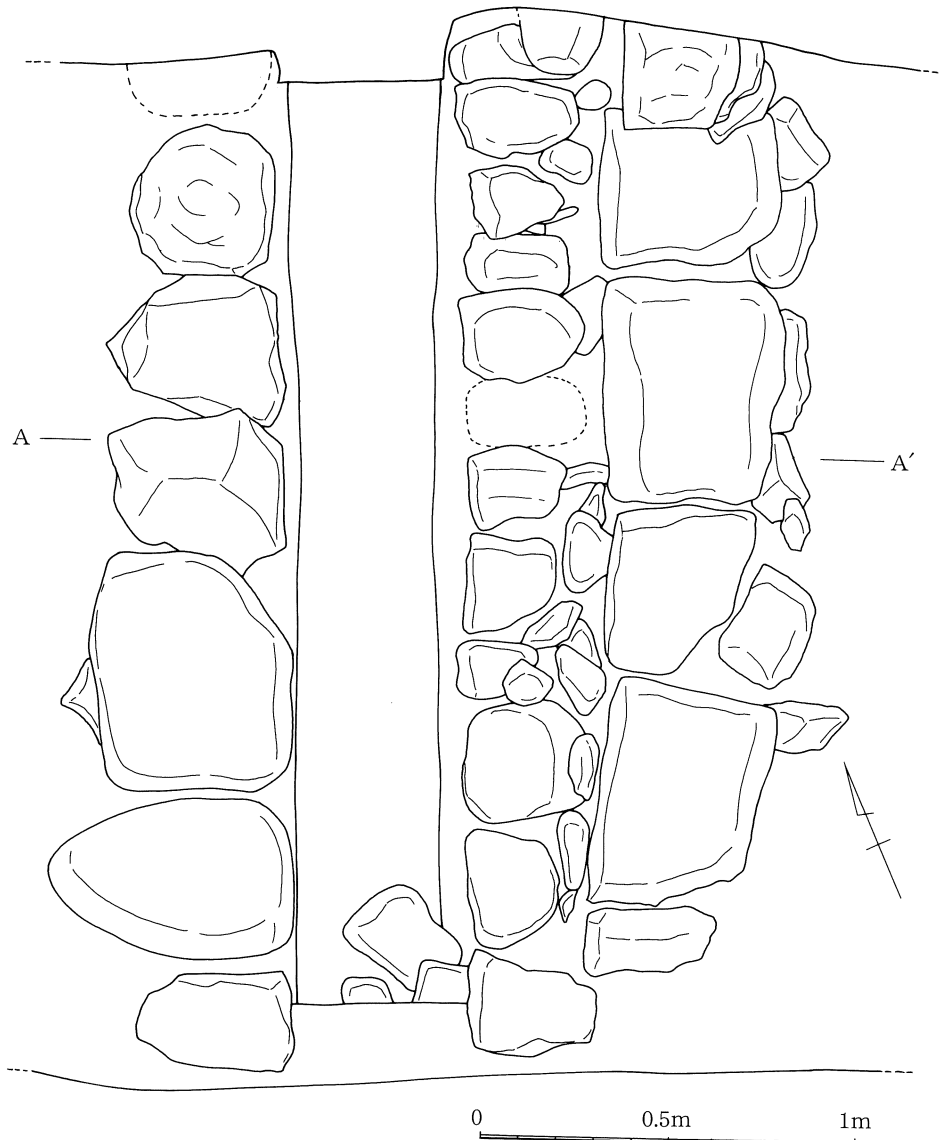
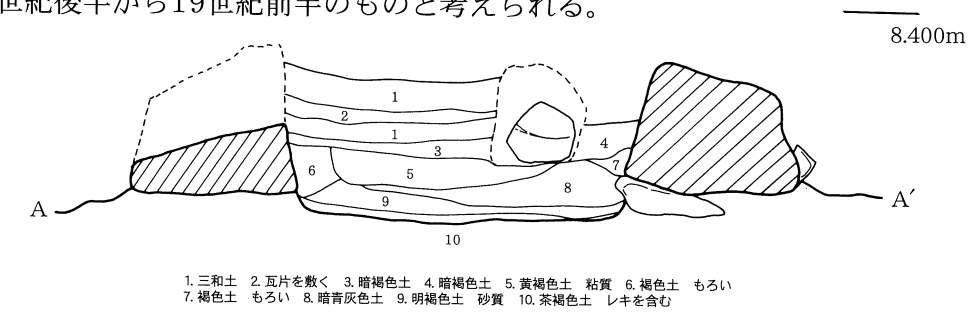
第40図 5区 東の石列平断面図



第39図 5区 平面図

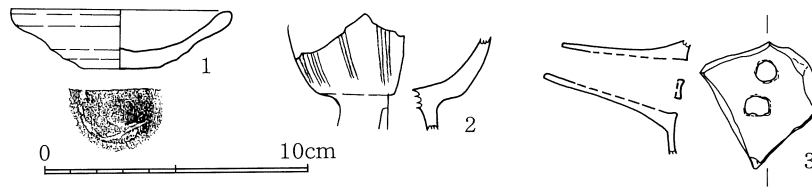
◆SD 1（溝状遺構）（第41図）

調査区のほぼ中央に位置するSD 1は、他の遺構よりも検出面が高く、レベル8.0m付近で石組みを検出した。南北に伸びる溝状遺構で、大きさ40cm以上の石を組み、溝内部は三和土や瓦片などで固く整地している。町屋敷絵図にあった区画として使用されたと考えられ、『佐伯屋小助』の敷地と『須磨屋諸兵エ』との区画溝とも考えられる。西側の石列とほぼ大きさが合致するのが東側の外の石列であり、初め区画溝として石列がつけられた後に、幅をせばめて三和土や瓦等で整地し、東側には小さな石を配置して新たな区画溝としたものと思われる。出土した遺物から、SD 1は18世紀後半から19世紀前半のものと考えられる。



第41図 5区 SD1平断面図と土層図

◇SD 1 出土遺物 (第42図)

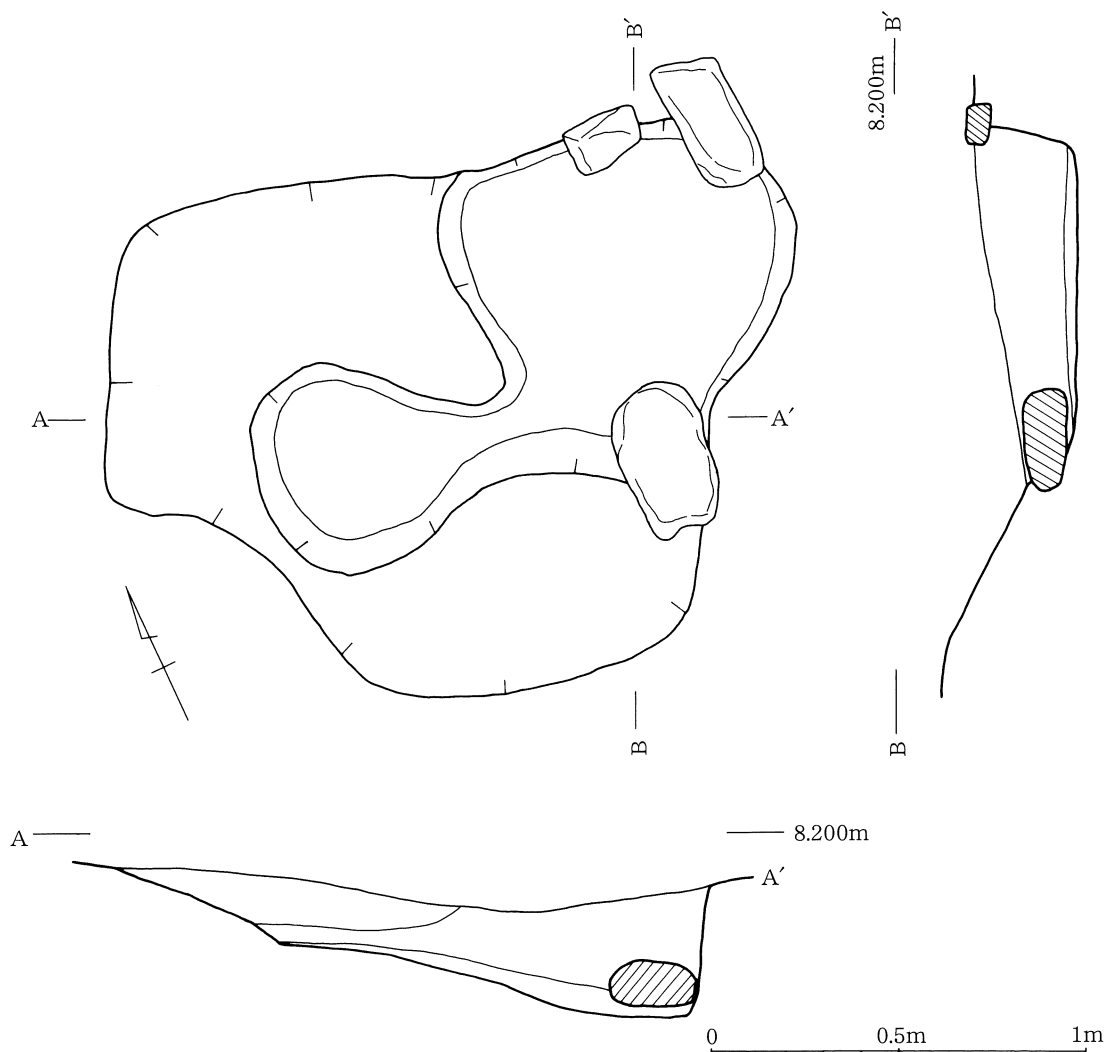


第42図 5区 SD1出土遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	8.7	2.3	3.5	在地	SD 1 石列直上	?	
2	磁器	—	—	—	肥前	SD 1	17世紀後半?	青磁
3	陶器	—	—	—	関西系	SD 1 石列上	18世紀後半~	土瓶の注ぎ口

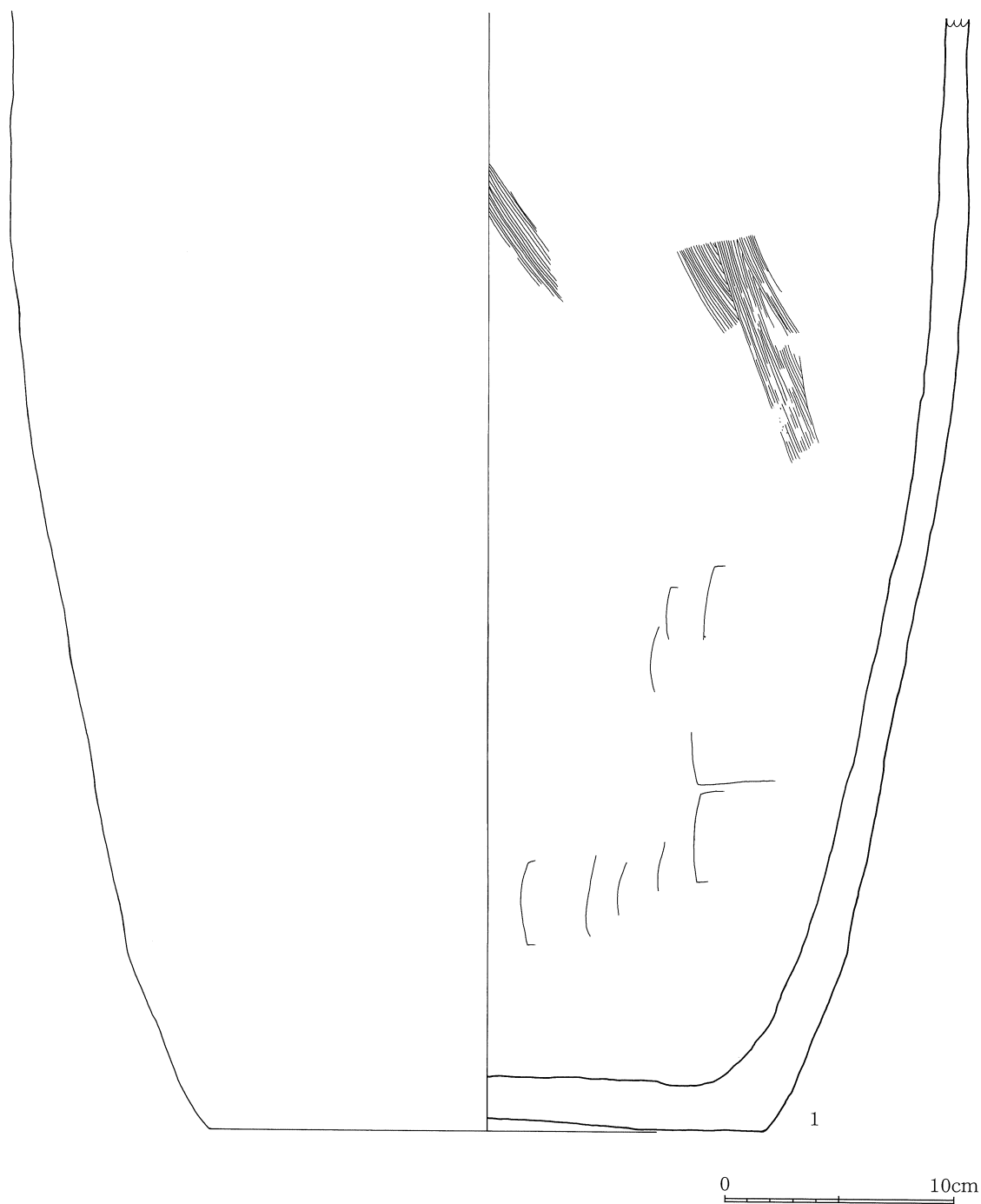
◆焼土坑 (第43図)

SD 2 を切る形で、調査区西で検出した東西約1.5m、短軸約1.5mの焼土坑である。深いところでは20cmの深さがある。遺物は比較的少ないが、ある時期の火災の跡と思われる。



第43図 5区 焼土坑平断面図

◇焼土坑出土遺物 (第44図)



第44図 5区 焼土坑出土遺物

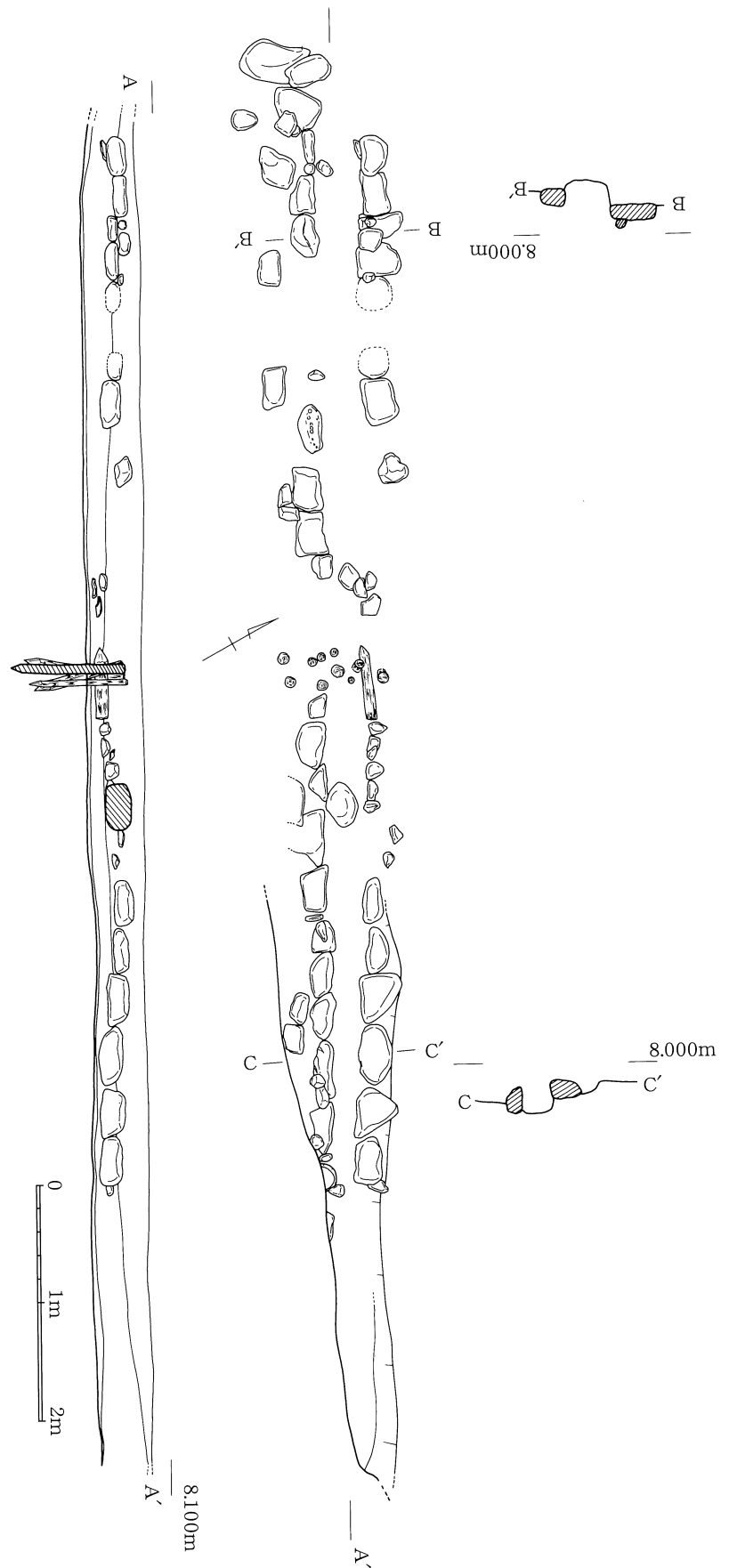
No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	(25.6)	備前	焼土坑	?	甕



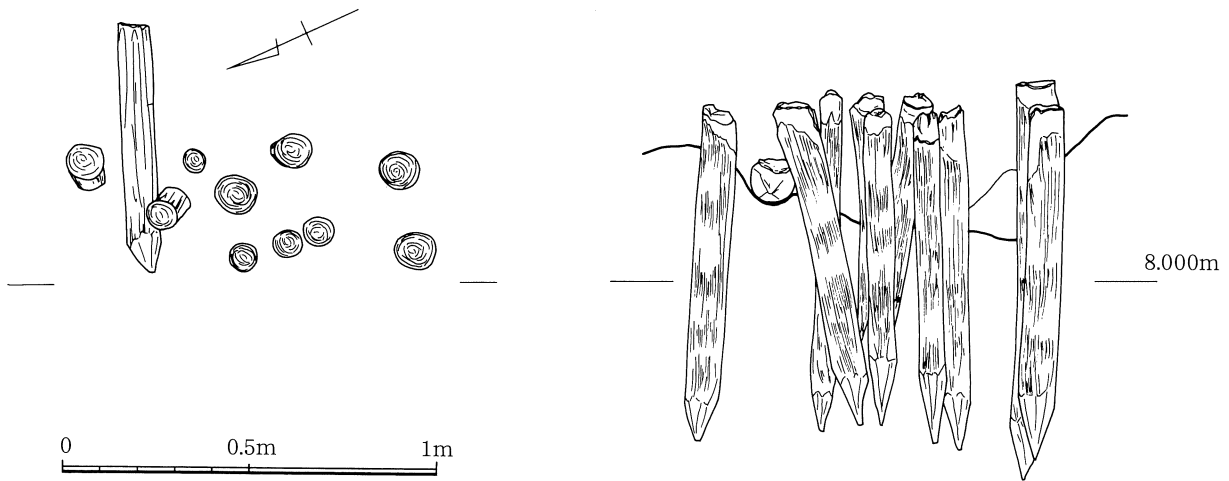
◆SD 2（溝状遺構）（第45図）

調査区を東西に横断するSD 2は、SD 1よりも20cmほど低いレベルで石列を確認した。調査区の西で焼土坑に切られるため、石列に多少の崩れがあるが、東側では石列が残っており、東に向かうほど現道に近づいていく。4区で検出したSD 1とつながり、4区のSD 1同様、近世の道路の南の側溝であると思われる。

また、SD 1の真下にあたる部分では、石列が破壊されていた。その部位には11本の杭を検出し、そのうち10本の杭は垂直に打たれ、残りの1本は横方向にして使用されていた（第46図）。おそらくSD 2が埋められた後SD 1を造作する際、SD 1に使用する大きな石を固定するために杭が使用されたと思われる。このことから、SD 2とSD 1の時期差がうかがえる。

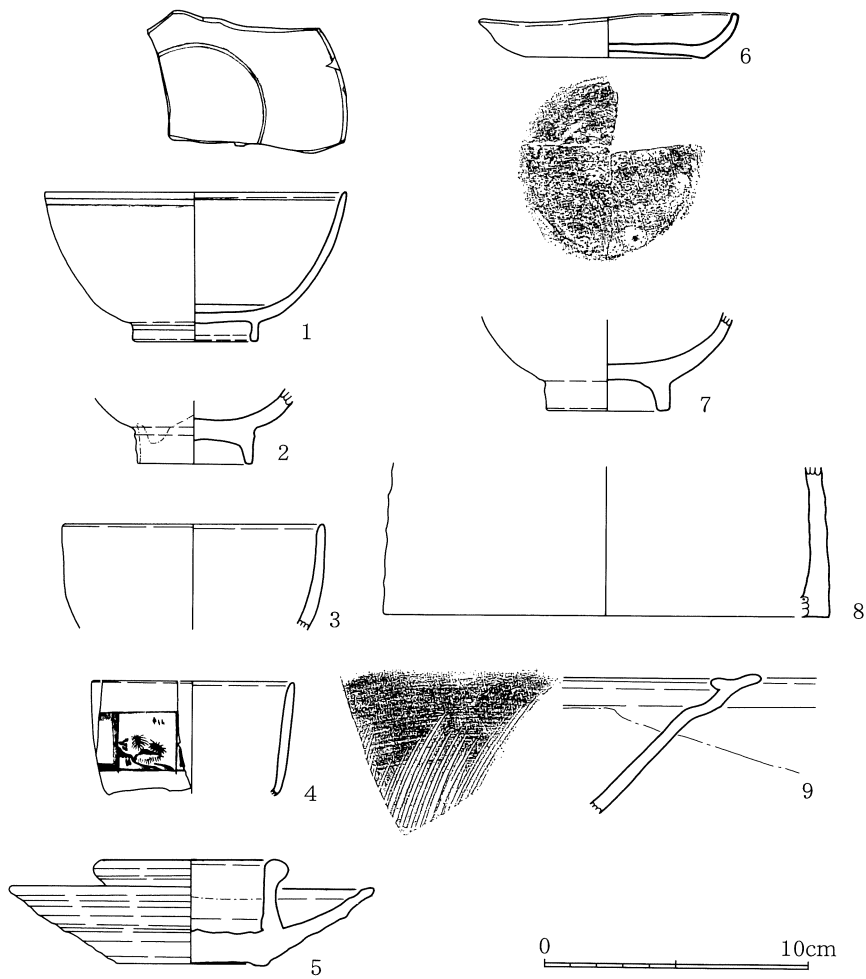


第45図 5区 SD2平面図

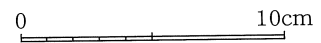
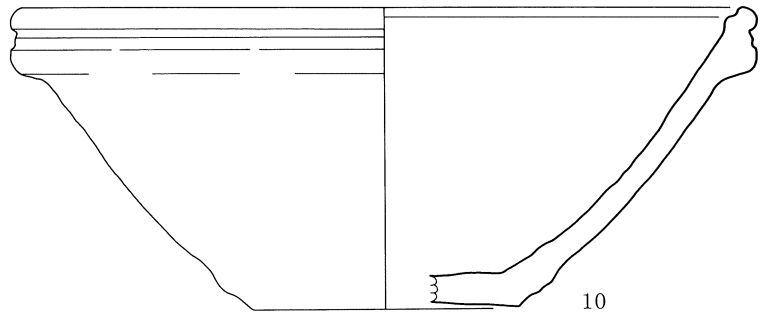


第46図 5区 SD1の下で検出した杭 平断面図

◇SD2出土遺物 (第47図)



第47-1図 5区 SD2出土遺物

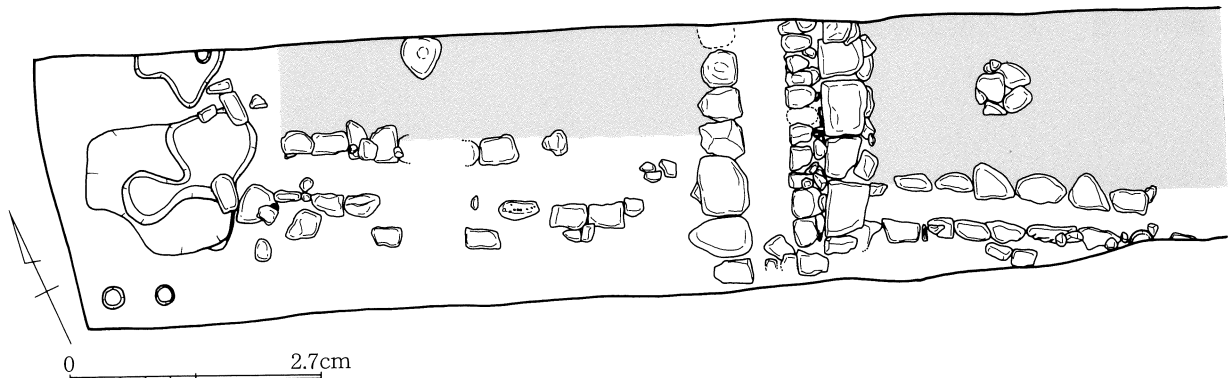


第47-2図 5区 SD2出土遺物

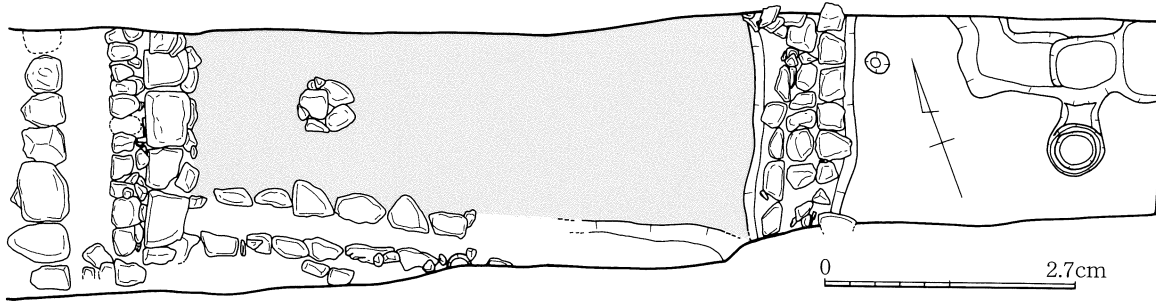
No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(12.0)	6.0	(4.3)	肥前	SD 2	17世紀後半	
2	磁器	(10.2)	—	—	関西系?	SD 2	17世紀~18世紀	
3	磁器	(4.5)	—	—	肥前	SD 2	1630~1650年	青磁
4	磁器	(7.9)	—	—	肥前	SD 2	18世紀	筒形碗
5	陶器	6.9	4.1	5.9	関西系	SD 2	18世紀	
6	土器	10.0	1.8	7.0	在地	SD 2	?	糸切り底
7	陶器	—	—	(4.7)	肥前	SD 2	17世紀後半	
8	陶器	—	—	(17.4)	関西系?	SD 2	18世紀~19世紀	
9	陶器	—	—	—	肥前	SD 2	17世紀前半	
10	陶器	(28.8)	11.9	(10.2)	堺・明石/備前	SD 2	18世紀	播鉢口縁から底部

◆道路遺構 (第48図)

SD 2の北で道路面を検出し、側溝であることを確認した。また、道路面が現道よりも北に振っていることも確認した。検出した道路面には、拳大よりもやや小さい石を固く敷き詰め、しっかりと造りの道路であったことがうかがえる。町屋敷絵図に描かれている道路面は、現道とほぼ同じとされるため、この道路面は、町屋敷絵図よりも古いものであると言える。また、SD 2の遺物から、この側溝は17世紀後半から18世紀前半に埋められたものと考えられる。

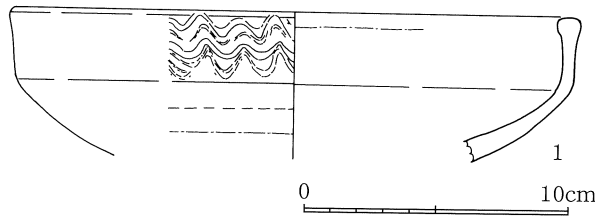


第48-1図 5区 道路遺構



第48-2図 5区 道路遺構

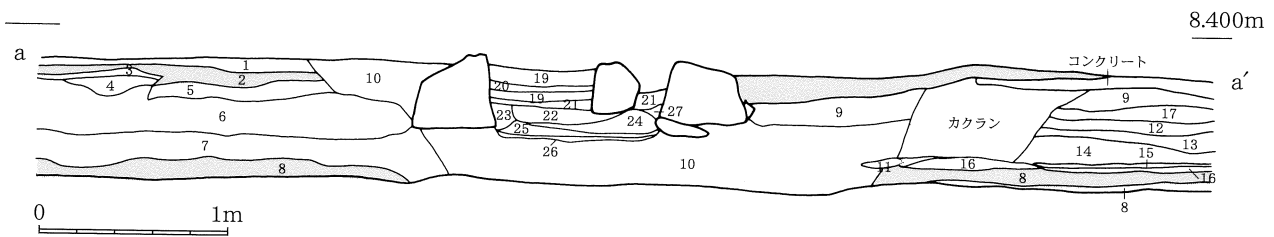
◇道路遺構出土遺物 (第49図)



第49図 5区 道路遺構出土遺物

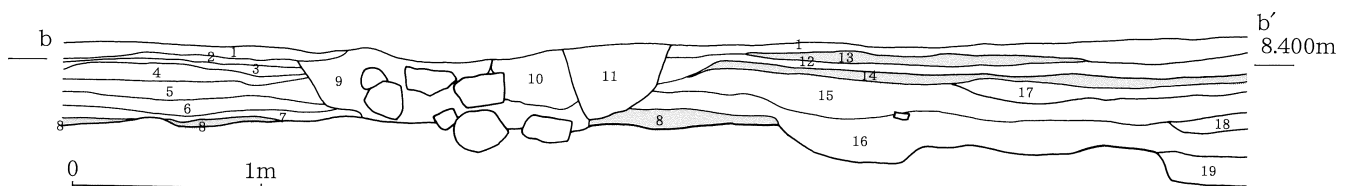
No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(22.2)	3.6	2.6	肥前 (唐津)	道路面直上	17世紀後半~18世紀後半	

◇土層図 (第50図)



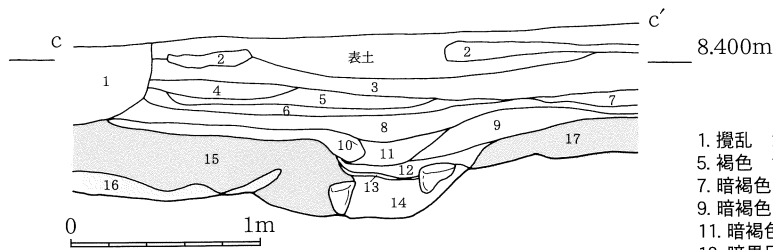
第50-1図 5区 北壁土層図①

- 1. 黒褐色 砂質 締り強 2. 焼土層 炭化物を多く含む 3. 褐色 砂質 締り強 4. 赤色土 砂質 締り強 5. 淡黄色 砂質 やや締り強
- 6. 茶褐色 黄土を多く含む ややもろい 7. 6層よりも黄土を含まない 8. 小石を多量に含む (道路面) 9. 褐色土 砂質 ややもろい
- 10. 灰褐色 黄土を少し含む 砂質 締り強 11. 灰褐色 砂質 ややもろい 12. 暗褐色 砂質 締り強 13. 12層よりもやや明るい
- 14. 茶褐色 砂質 締りやや強 15. 暗灰色 砂質 非常に 締り強 16. 灰褐色 締り非常に強 17. 淡黄色 砂質 締りやや強
- 18. 茶褐色 砂質 締り非常に強 小石を多く含む (道路面直下) 19. 三和土 20. 瓦片を数く 21. 暗褐色 締り強 22. 黄褐色 粘質
- 23. 褐色 締り弱 24. 暗青灰色 25. 明褐色 砂質 26. 茶褐色 レキを含む



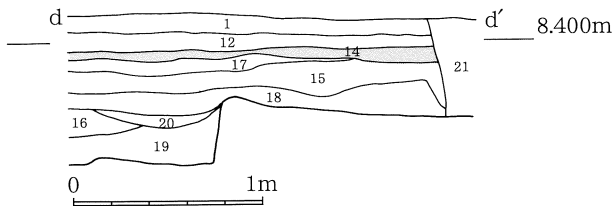
第50-2図 5区 北壁土層図②

- 1. 表土 2. 灰黄褐色 砂質 締り強 3. 黄土 砂質 非常にもろい 4. 灰茶褐色 締り強 5. 茶褐色 黄土・炭を含む 締り強
- 6. 茶褐色 締り強 7. 暗茶褐色 黄土を含む 締り強 8. 道路面 淡黄土 レキを多く含む 9. 暗灰褐色 砂層 ややもろい
- 10. 黒褐色 粘質 石列の埋土 11. 10層よりも褐色に近い 締り弱 12. 灰褐色 粘質 ややもろい 13. 焼土 褐色土の塊を含む
- 14. 焼土 灰褐色土をはさむ 15. 灰茶褐色 炭を少し含む ややもろい 16. 灰褐色 砂質 締り弱 遺物を含む 17. 暗黄褐色 締り強
- 18. 明茶褐色 砂質 非常にもろい 19. 灰褐色 砂質 非常にもろい



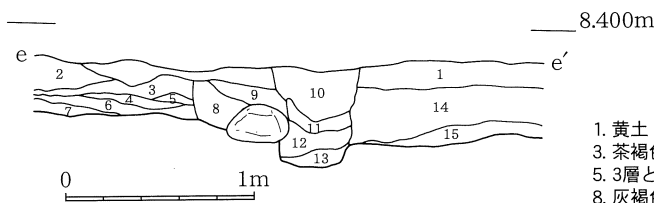
1. 攪乱 2. 瓦を多く含む 3. 褐色土 炭が少し混じる 4. 淡黄色 砂質
5. 褐色 黄褐色混じり レキを少し含む 6. 暗灰色 炭混じり
7. 暗褐色 炭を少し含む 8. 黄褐色 褐色土を含む レキを含む
9. 暗褐色 炭混じり 10. 褐色 黄褐色混じり
11. 暗褐色 褐色混じり 黄土粒を少し含む 12. 褐色 橙粒を含む
13. 暗黒灰色 14. 溝埋土 15. 暗褐色 炭・橙粒混じり 焼土
16. 15層の下層炭 硬化焼土 17. 道路面 (12~14層は溝の埋土)

第50-3図 5区 西壁土層図



1. 表土 12. 灰褐色土 粘質 ややもろい 14. 焼土 灰褐色土をはさむ
15. 灰茶褐色土 炭を少し含む ややもろい
16. 灰褐色土 砂質 締り弱 遺物を含む 17. 暗黄褐色土 締り強
18. 明茶褐色土 砂質非常にもろい 19. 灰褐色土 砂質 非常にもろい
20. 焼土 (黒色) 砂質 非常にもろい 21. 黒褐色土 非常にもろい (溝のあと)

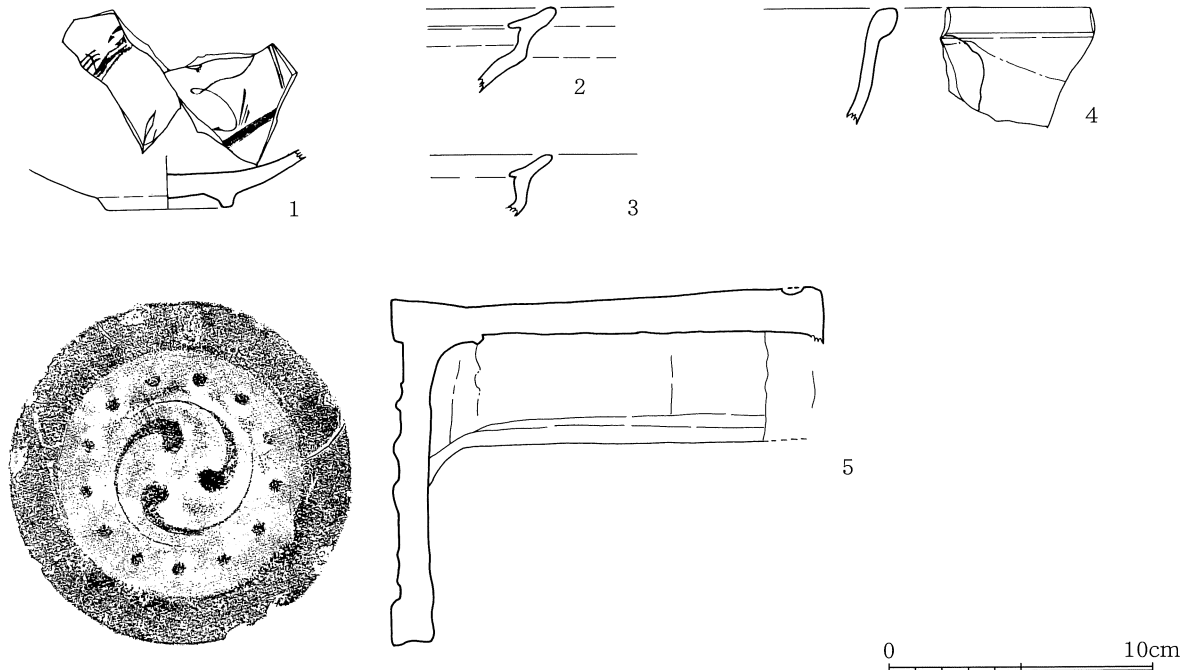
第50-4図 5区 東壁土層図



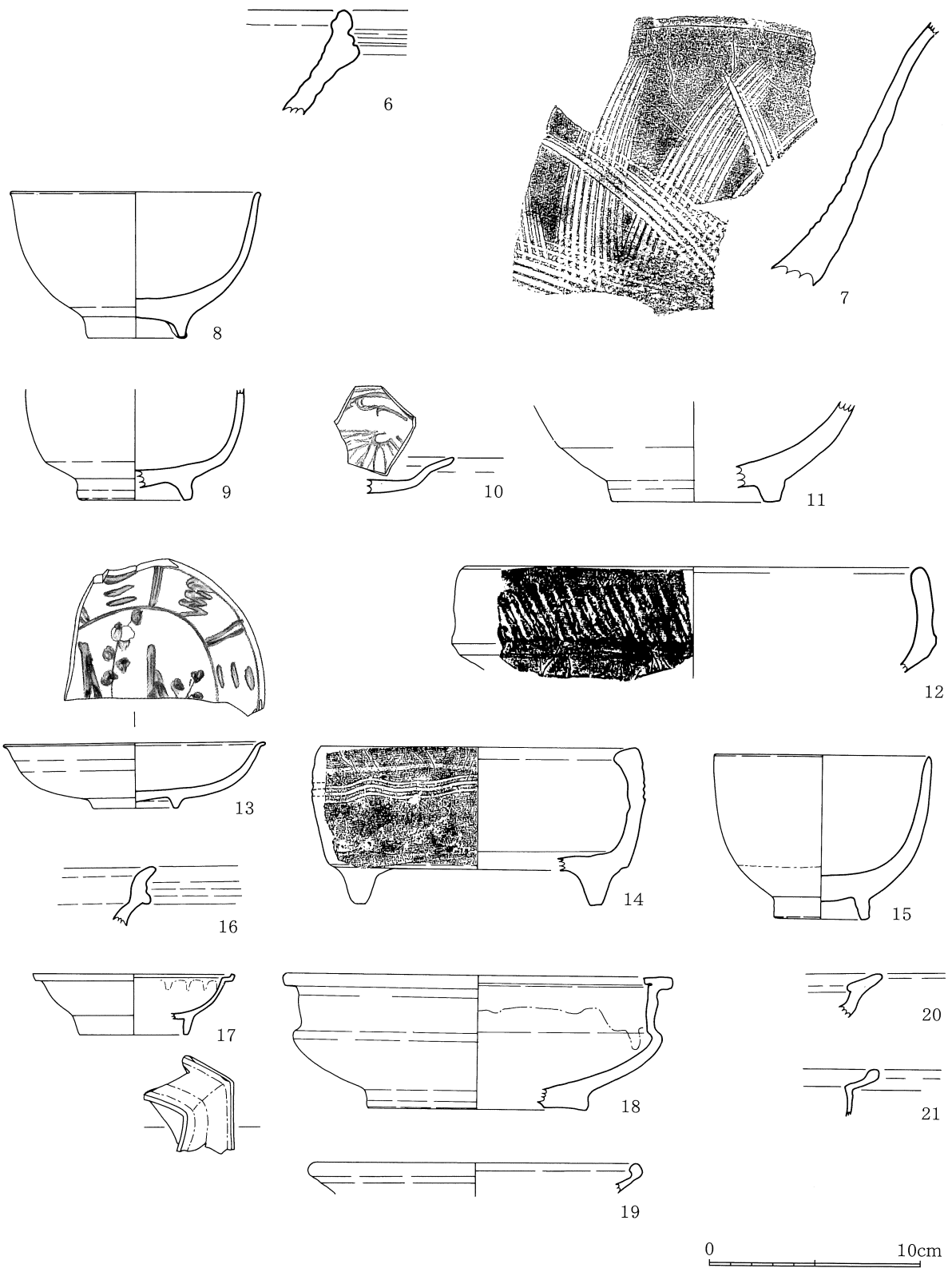
1. 黄土 締り強 (整地層) 2. 灰褐色 黄土の塊を含む 締り強
3. 茶褐色 砂質 ややもろい 4. 茶褐色 締り強 黒土を少し含む
5. 3層とほぼ同じ 締り強 6. 茶褐色 褐色土を含む 7. 茶褐色 砂質 締り強
8. 灰褐色 茶褐色を含む 砂質 締り弱 9. 灰色 黄土を含む 締り弱
10. 灰褐色 黄土を含む 締り強 11. 9層よりも濃い灰色 締り弱 砂質
12. 暗褐色 砂質 13. 灰色 粘質 ややもろい (11~13層はSD2の埋土)

第50-5図 5区 ベルト土層図

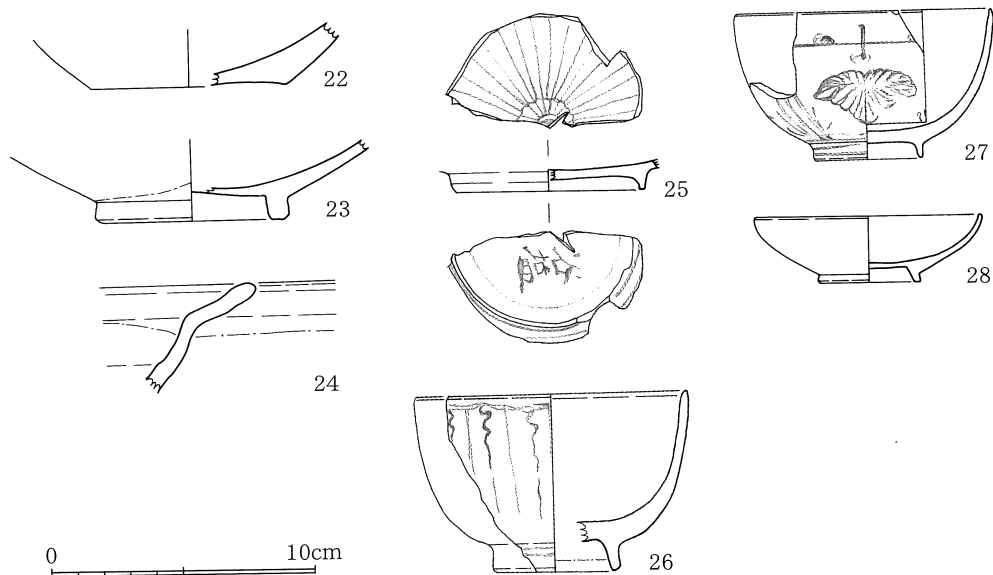
◇その他の遺物 (第51図)



第51-1図 5区 その他の遺物



第51-2図 5区 その他の遺物



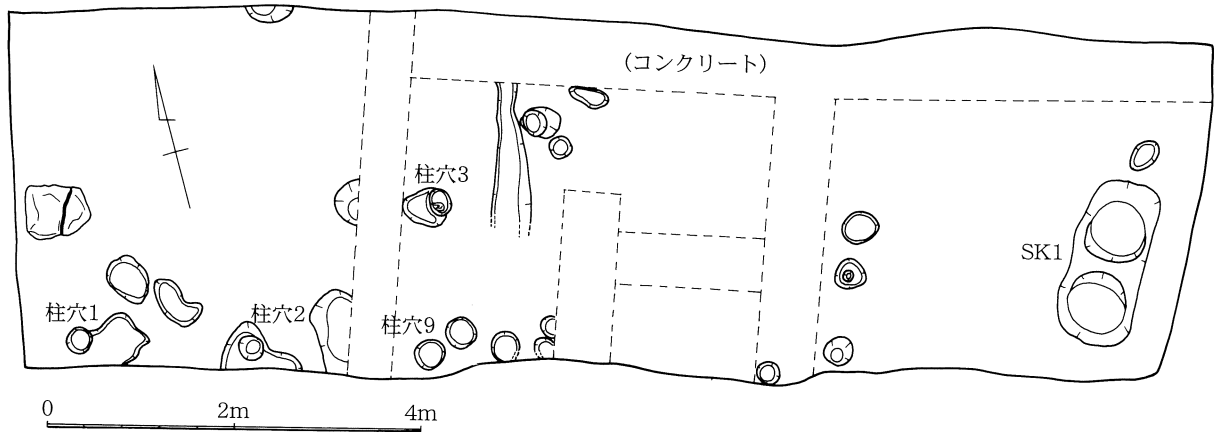
第51-3図 5区 その他の遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	—	—	(4.9)	肥前	東1層	18世紀後半	10区遺構検出 (No.10) と同一
2	陶器	—	—	—	?	東1層	?	片口鉢 口縁部
3	陶器	—	—	—	肥前	東1層	17世紀前半	播鉢 口縁部
4	陶器	—	—	—	?	東1層	?	口縁部
5	軒丸瓦	—	—	—	在地	東1層	?	瓦
6	陶器	—	—	—	堺・明石	東1層	18世紀	播鉢口縁部破片
7	陶器	—	—	—	肥前	東1層	17世紀前半	播鉢胴部破片
8	陶器	(12.3)	7.2	(4.9)	肥前	黄土層	1600~1630年	
9	陶器	—	—	(5.0)	?	黄土層	?	
10	磁器	—	—	—	肥前	黄土層	1630~1650年	口縁部破片
11	陶器	—	—	(8.3)	関西系	黄土層	18世紀後半	
12	土器	(22.7)	—	—	在地?	黄土下層	17世紀後半	焙烙
13	磁器	(12.9)	3.2	(4.2)	肥前	黄土下	1630~1650年	
14	陶器	15.8	7.2	12.4	?	焼土	?	
15	陶器	10.15	8.1	4.2	?	遺構検出	?	
16	陶器	—	—	—	?		17世紀~18世紀	播鉢 口縁部破片
17	陶器	(10.0)	3.4	(5.4)	関西系	遺構検出	18世紀後半	
18	陶器	(19.0)	6.0	(10.9)	関西系	攪乱	18世紀後半	
19	陶器	—	—	—	?	遺構検出	18世紀~19世紀	口縁部破片
20	陶器	(16.2)	—	—	?	遺構検出	18世紀~19世紀	口縁部破片
21	陶器	—	—	—	関西系	遺構検出	18世紀後半~19世紀	土鍋 口縁部破片
22	陶器	—	—	(7.75)	?	遺構検出	?	
23	陶器	—	—	(7.1)	関西系	遺構検出	18世紀後半	鉢
24	陶器	—	—	—	肥前	一括	17世紀後半~18世紀前半	口縁部破片
25	磁器	—	—	7.4	肥前	一括	18世紀末~19世紀初	
26	磁器	(10.6)	7.0	(4.7)	肥前	一括	17世紀後半	
27	磁器	(10.1)	5.3	4.2	肥前	遺構検出	18世紀後半	
28	陶器	—	—	—	関西系	遺構検出	18世紀後半	

## 6. 6区の遺構・遺物

歯科医院跡地で、コンクリートの基礎が残っている東西10m、南北3.5mの調査区である。岩鼻の坂の西隣にあたり、町屋敷絵図では『江戸屋松兵エ』か『上柳口』あたりに相当すると思われる。地表下30cmで総数14基の遺構（ピット4基、柱穴9基、土坑1基）を確認した（第52図）。

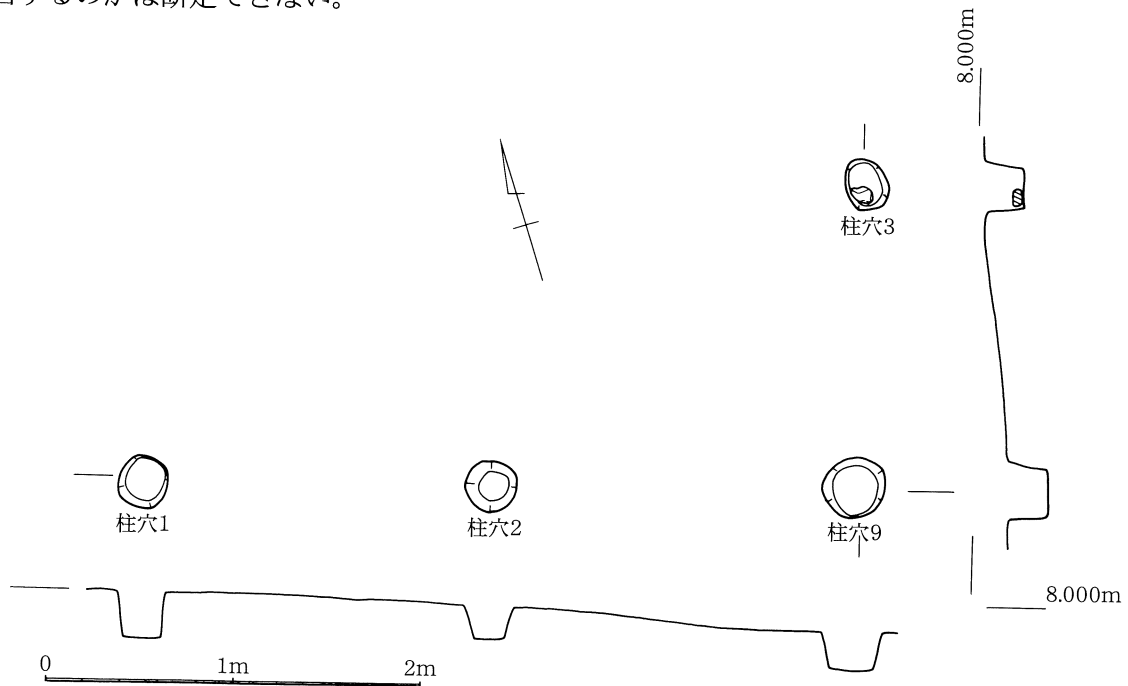
5区のSD2が現道に近づいていたことから、この調査区付近では現道と変わらない位置に道路遺構が展開すると思われる、側溝や道路遺構は見られない。



第52図 6区 平面図

### ◆柱穴（第53図）

柱穴1、2、9が現道とほぼ並行に並び、柱穴9で北に折れ、柱穴3につながる。その他対応する柱穴・ピットは見られない。時期を特定する遺物が見られないため、この柱穴が町屋敷絵図の時代に相当するのかは断定できない。

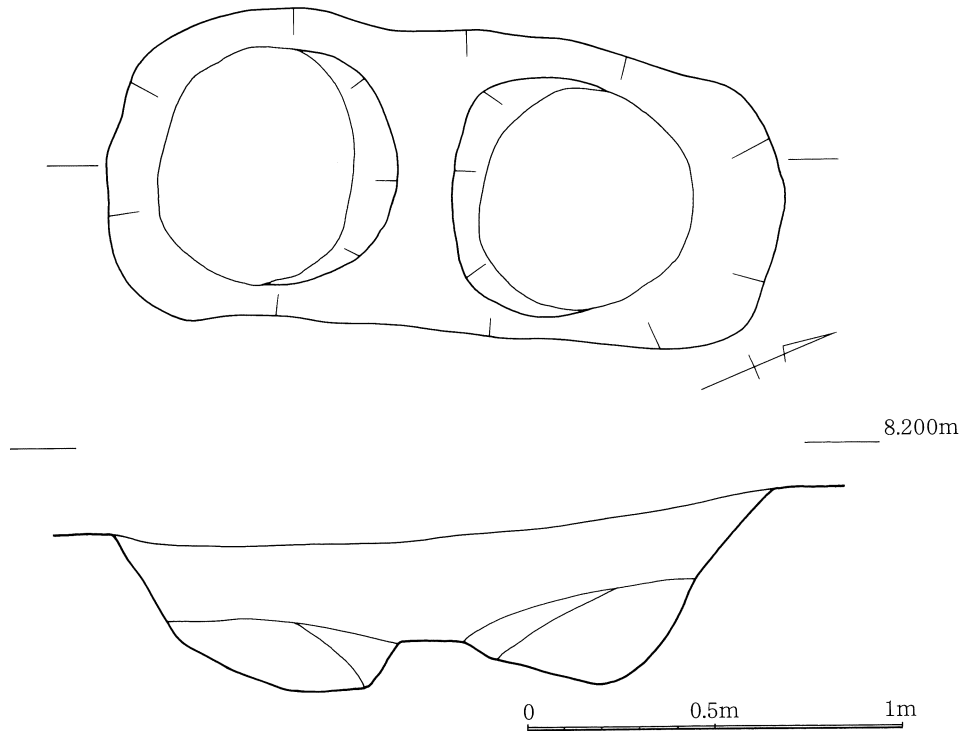


第53図 6区 柱穴1・2・9・3平面断面図



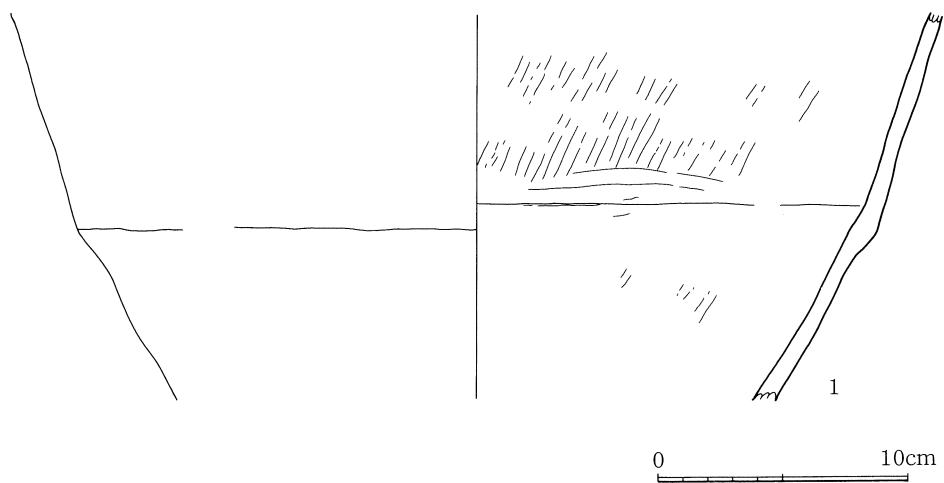
◆SK1 (土坑) (第54図)

調査区東で検出した。1つの大きな土坑の中に2つの掘り込みがあり、甕の破片が東側の穴から大量に出土した。便所跡である。時期を特定できるかは不明。

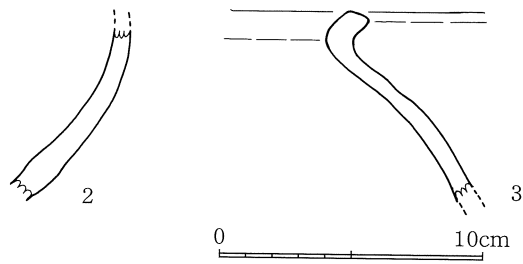


第54図 6区 SK1平断面図

◇SK1出土遺物 (第55図)



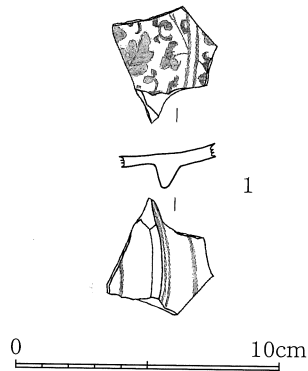
第55-1図 6区 SK1出土遺物



第55-2図 6区 SK1出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	土器	-	-	-	在地	SK 1	?	甕 復元最大径74.0cm
2	土器	-	-	-	在地	SK 1	?	甕
3	土器	-	-	-	在地	SK 1	?	甕

◇その他の遺物 (第56図)



第56図 6区 その他の遺物

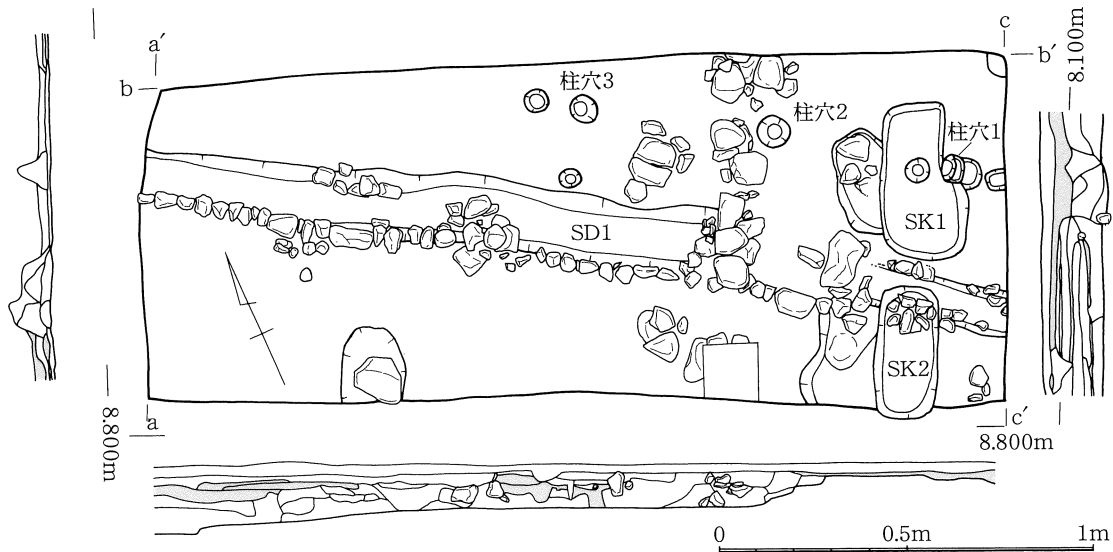
No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	-	-	-	肥前	6区一括	18世紀前半	



6区 完掘状況 (北から)

## 7. 7区の遺構・遺物

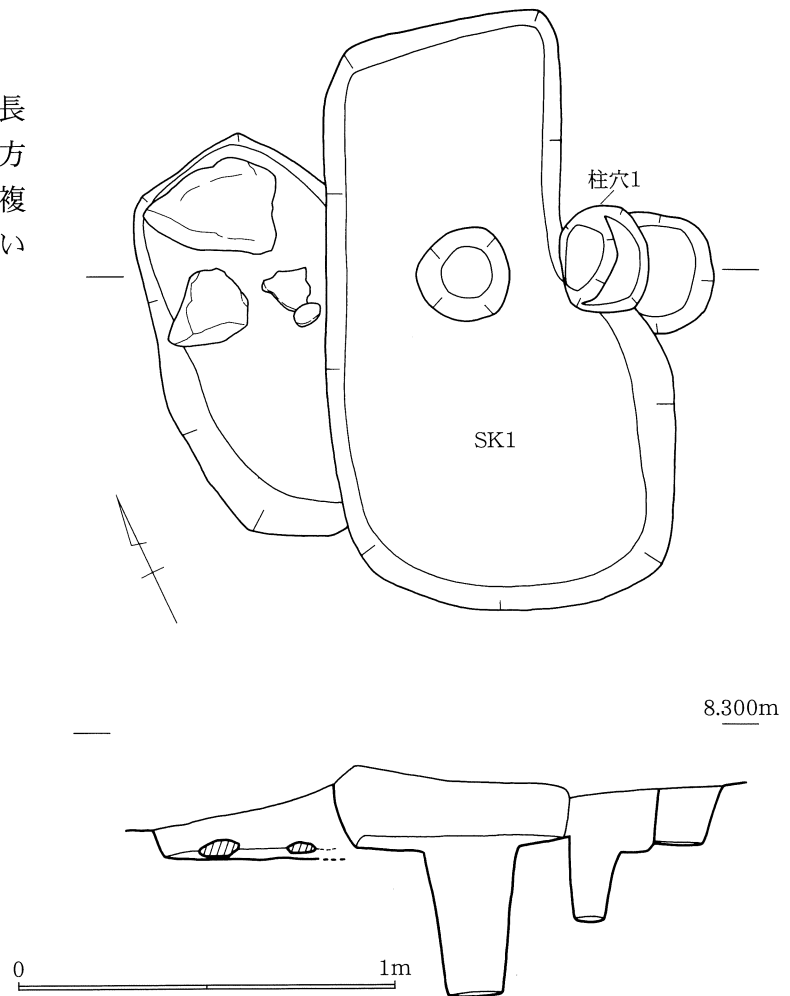
町屋敷絵図での『町役所』の東隣『佐野玄智 代岡野屋』に相当すると思われる、長さ9.4m、幅3.5mの調査区である。地表下20cmで7基の遺構（溝状遺構1条、ピット3基、土坑3基）を確認した。（第57図）



第57図 7区 平面図・北・東・西壁の土層図

### ◆SK1（土坑）（第58図）

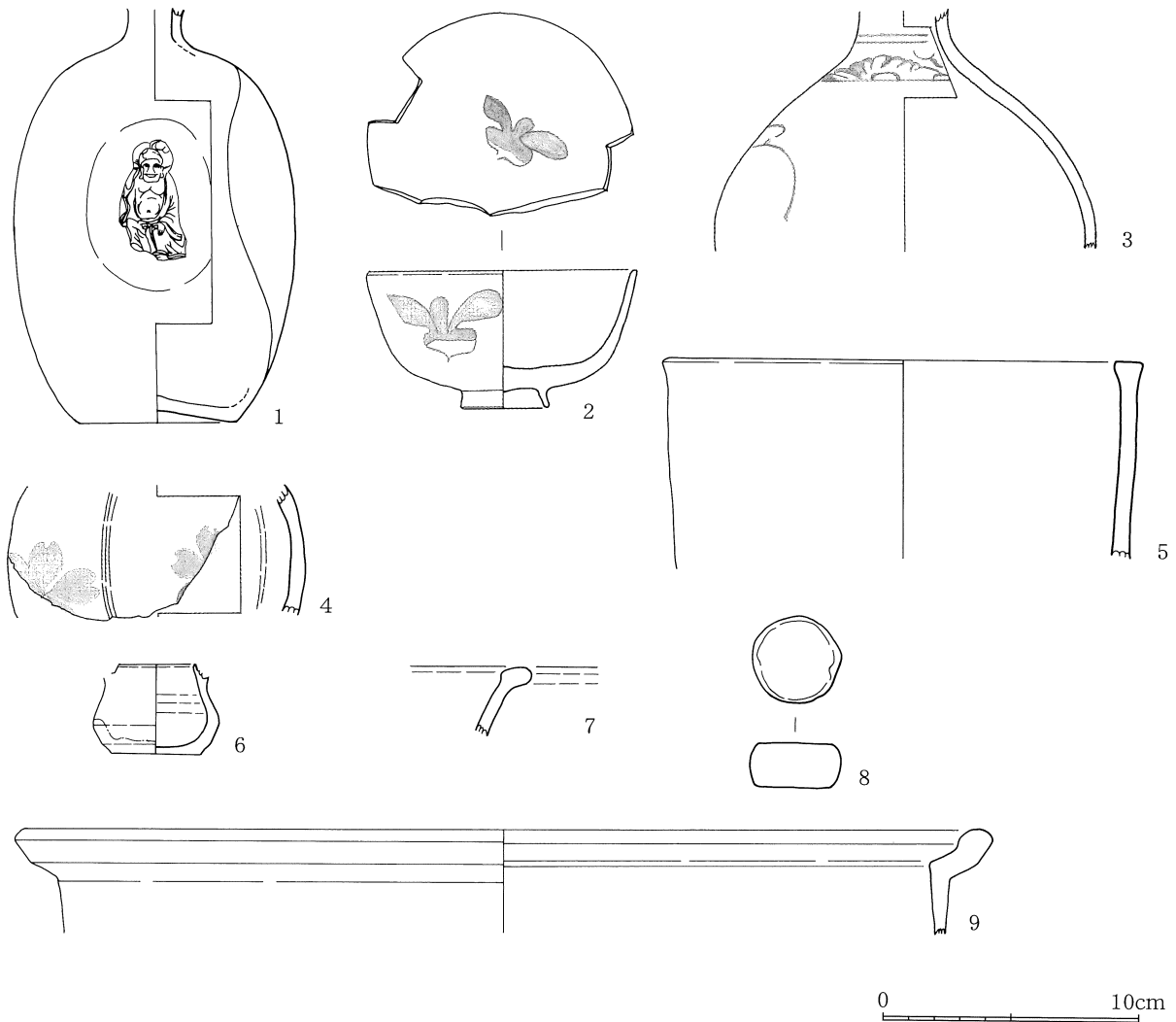
SD1の北、調査区の東で検出した長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.1mのほぼ方形をした土坑である。東で柱穴1と重複しており、西では他の土坑と重複している。底にピットを検出した。



第58図 SK1平断面図

◇SK 1 出土遺物 (第59図)

出土遺物の大半が18世紀後半のものである。このことから、SK 1は18世紀後半の土坑といえる。

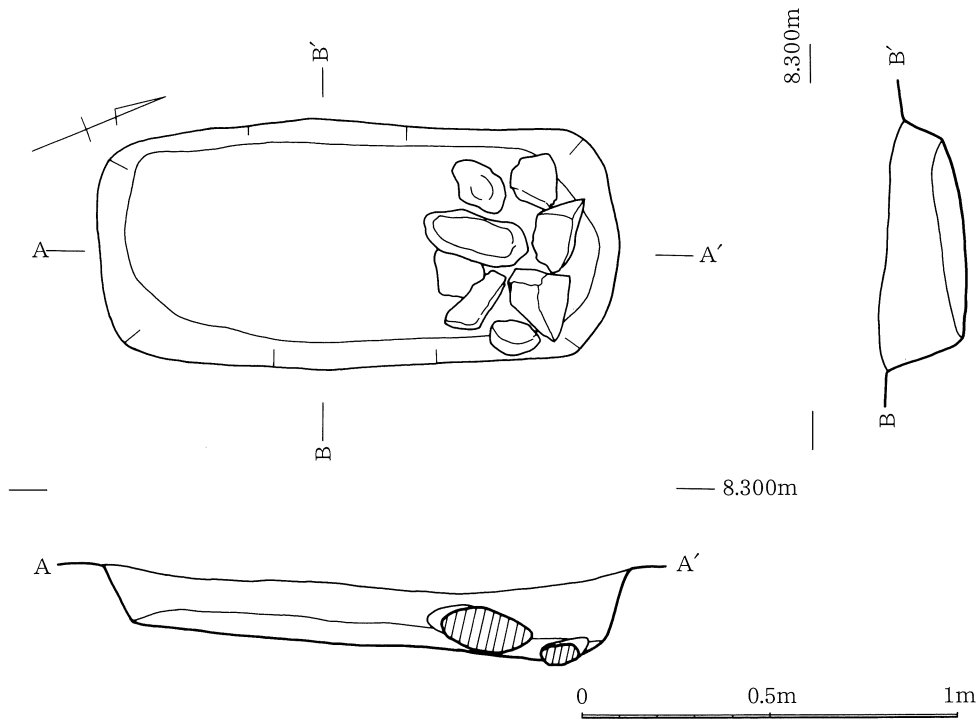


第59図 7区 SK1出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	4.5	備前	SK 1	19世紀後半	人形徳利
2	磁器	10.4	6.6	3.4	肥前	SK 1	18世紀後半	
3	磁器	—	—	—	肥前	SK 1	18世紀後半	
4	陶器	—	—	—	京都 (信楽)	SK 1	18世紀	
5	陶器	(19.5)	—	—	備前	SK 1	17世紀~18世紀	水差し?
6	陶器	3.1	3.6	3.5	関西系	SK 1	18世紀後半~	
7	陶器	—	—	—	関西系	SK 1	18世紀後半~	
8	土器	—	1.8	—	在地?	SK 1	?	
9	瓦質土器	39	—	—	在地?	SK 1	19世紀	火鉢か焜炉の口縁部

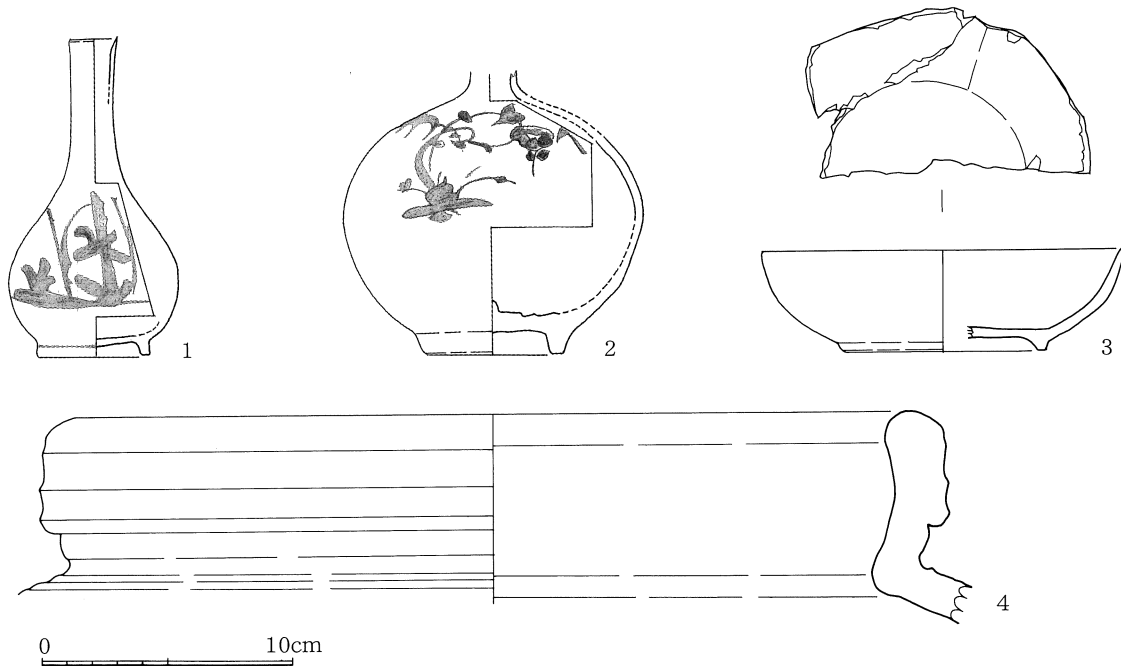
◆SK 2 (土坑) (第60図)

SD 1と重複しており、道路遺構に掘り込まれた長軸1.4m、短軸0.6m、深さ0.2mの方形の土坑である。SK 2中からは、鶴首瓶・寛永通宝などが出土した。

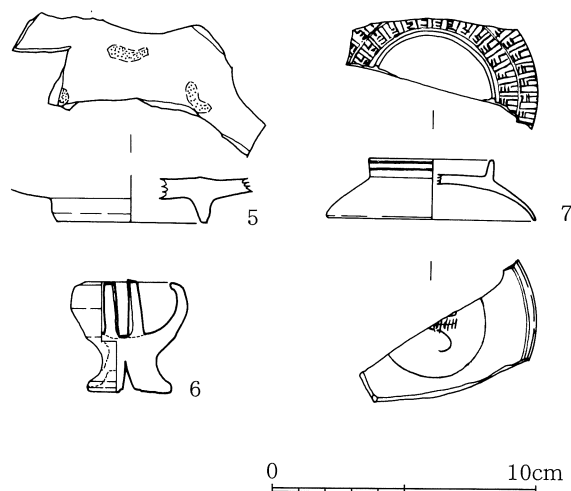


第60図 7区 SK2平断面図

◇SK 2 出土遺物 (第61図)



第61-1図 7区 SK2出土遺物



第61-2図 7区 SK2出土遺物

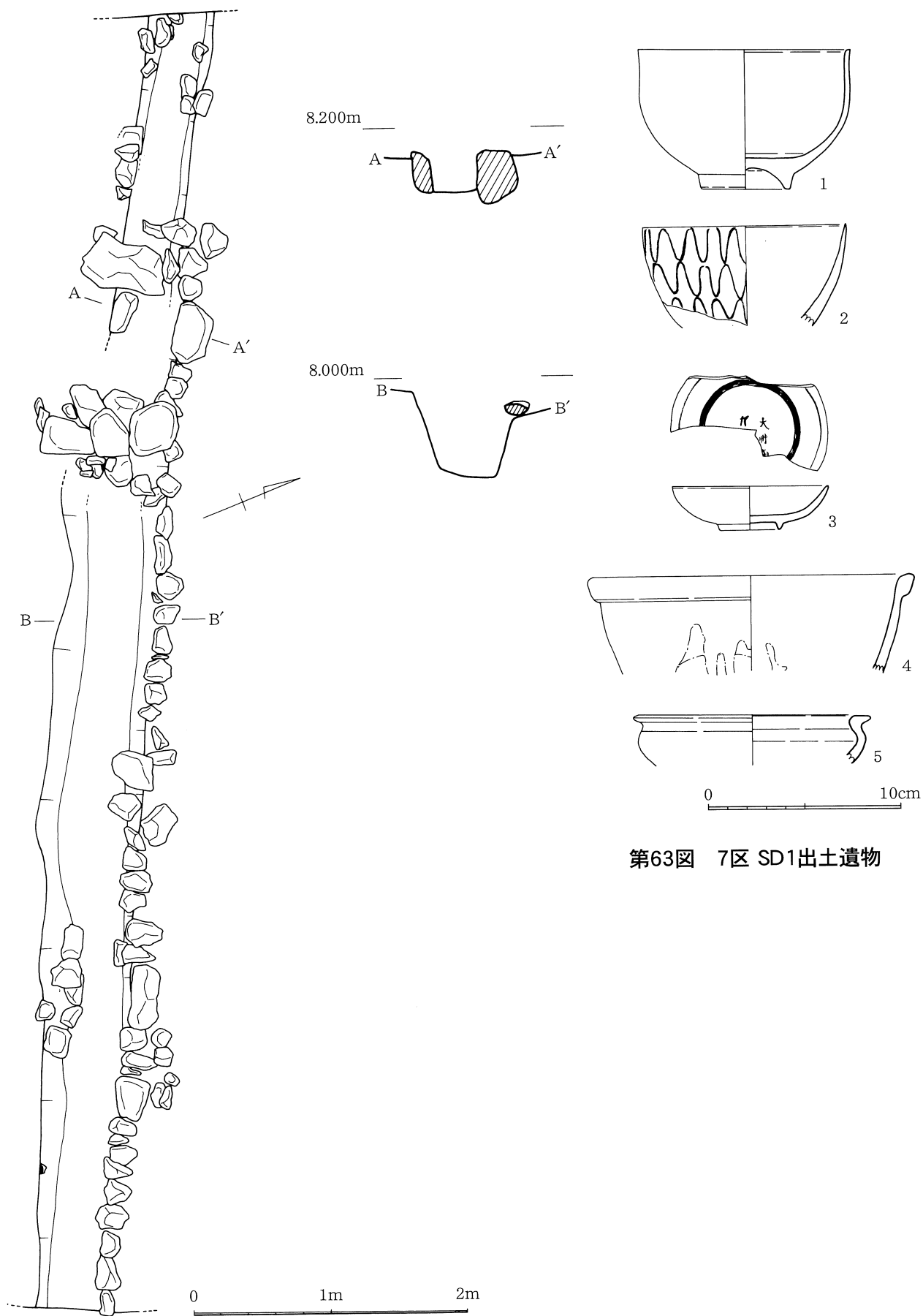
No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	1.9	12.55	5.4	肥前	SK 2	18世紀後半	鶴首瓶
2	磁器	—	—	5.4	肥前	SK 2	18世紀後半	
3	磁器	(14.3)	(4.05)	(8.0)	京都 (信楽)	SK 2	18世紀前半	
4	陶器	(33.4)			備前	SK 2	16世紀末～17世紀前半	大甕口縁部
5	陶器	—	—	(6.0)	肥前	SK 2	1600～1630年	内野山窯 砂目 11区SX1と同一個体か?
6	陶器	3.4	4.3	3.4	関西系	SK 2	19世紀後半	灯下具 (ひょうそく)
7	磁器	(8.4)	2.4	5.0	肥前	SK 2	1780～1810年	広東碗の蓋

◆SD 1 (溝状遺構) (第62図)

東西に伸びる長さ9m、幅0.8m、深さ0.2mの溝状遺構である。南側は比較的石列が残っているが、4区・5区の溝に比べると小さい石でつくられている。しかし、東端で土坑 (SK 2) や石列に切られ、掘り方が多少確認できるほどしか残っていない。SD 1の北では石列が壊され、掘り方しか確認できない。またSD 1中央あたりでは不明土坑に壊され、一部掘り方が確認しにくい。

このSD 1は、4区・5区で確認された溝状遺構とほぼ並行にはしっており、4、5区のSDが道路遺構の南側溝であるのに対し、7区のSD 1は北側溝にあたると思われる。SD 1の南に道路遺構と思われる固い土層があることから確認できる (第66図)。道路遺構は平面からも多少確認できるが、後世の攪乱で道路面として残る部分が少ない。

◇SD 1 出土遺物 (第63図)



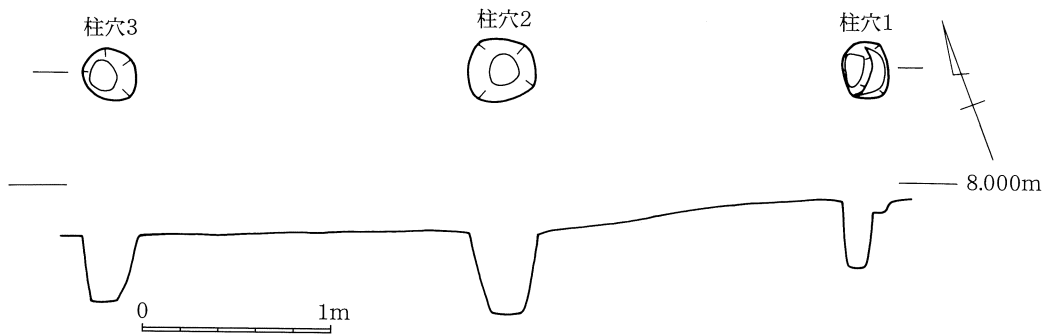
第62図 7区 SD1平断面図

第63図 7区 SD1出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(11.6)	7.5	4.8	肥前	S D 1	17世紀後半	
2	磁器	11.0	—	—	肥前	S D 1	1640~1660	
3	磁器	(8.25)	2.2	(3.25)	肥前	S D 1	18世紀後半	大明成化年製
4	陶器	(17.2)	—	—	関西系	S D 1	18世紀~19世紀	
5	陶器	12.9	—	—	福岡産	S D 1	18世紀?	7区SK1と接合

### ◆柱穴 (第64図)

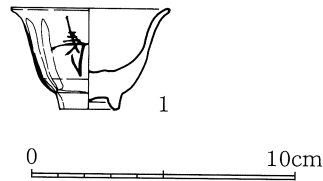
S D 1の北で柱穴を3基検出。そのうち2基はS D 1と並行に並んでいるため、S D 1に伴う柱穴といえる。



第64図 7区 柱穴平面断面図

### ◇柱穴出土遺物 (第65図)

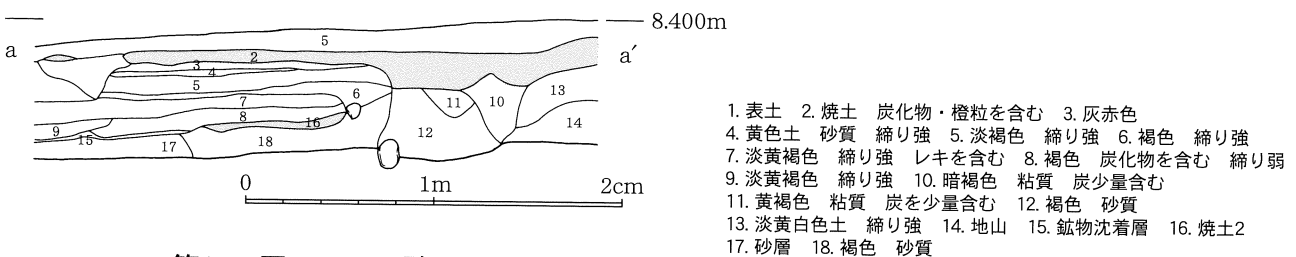
柱穴2の底から出土した初期伊万里の小杯である



第65図 7区 柱穴出土遺物

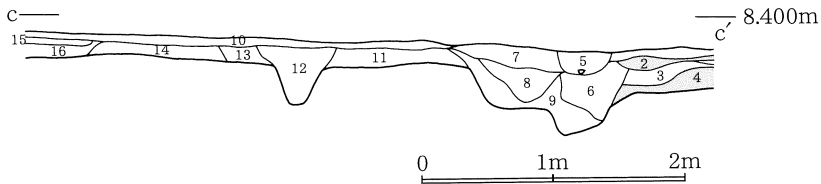
No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	6.2	3.95	2.4	肥前	柱穴2	1630~1650	初期伊万里小杯

### ◇土層図 (第66図)



第66-1図 7区 西壁土層図





第66-2図 7区 東壁土層図

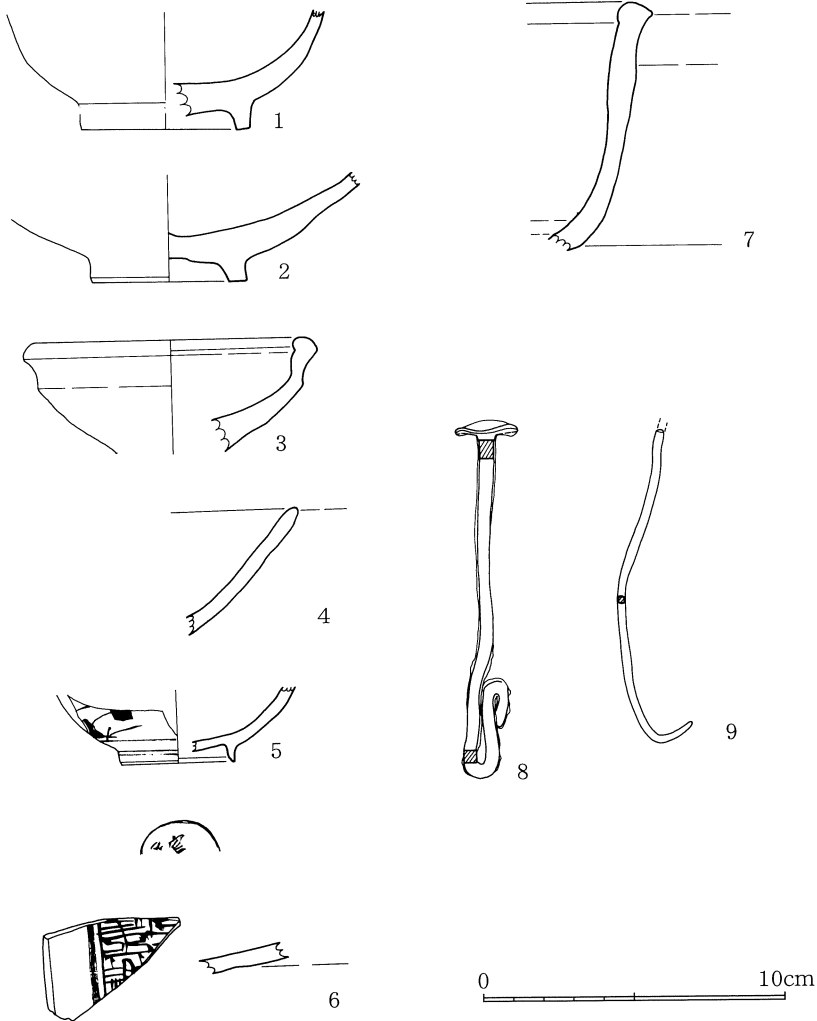
7区東壁

- 1. 灰褐色 ややもろい 2. 焼土 3. 暗灰褐色 1層よりも締り強 4. 茶褐色 道路面 締り強 5. 淡黄色 砂混じり 締り強
- 6. 砂質 ややもろい 底部に赤土を少し含む (溝の埋土) 7. 黄褐色 焼土・炭を含む 締り強 8. 暗灰褐色 締り弱 攪乱 現代の物含む
- 9. 8層より明るい 締り強 10. 茶褐色 砂質 ややもろい 11. 淡黄色 砂質 締り強 12. 暗茶褐色 砂質 ややもろい 炭・黄土を含む
- 13. 暗茶褐色 砂質 締り弱 14. 黄土 (地山) 15. 茶褐色 砂質 ややもろい 16. 暗灰褐色 締り弱 焼土を含む

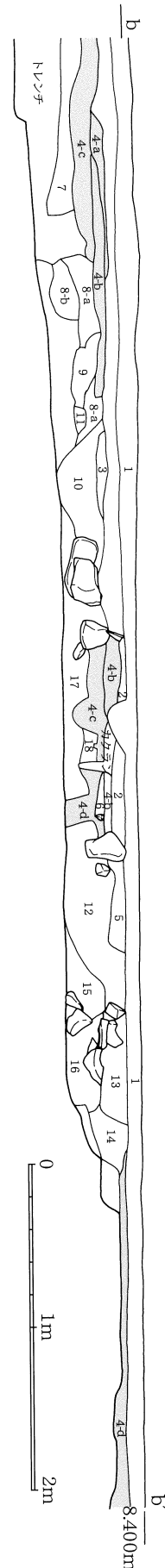
7区北壁

- 1. コンクリート 2. 淡褐色 褐色土混じり 3. 淡褐色土 4-a. 暗褐色焼土 橙を含まない 4-b. 黒褐色 炭混じり 4-c. 暗褐色焼土 橙鬼・炭を含む
- 4-d. 黒灰色 橙・炭を半分ほど含む 5. 褐色 白色 (しっくい) を含む 6. 黄褐色 7. 淡黄褐色 8-a. 褐色 炭・橙粒を少量含む
- 8-b. 暗褐色 炭混じり 8-c. 茶褐色 炭・橙粒を含む 9. 淡黄褐色 10. 暗褐色 炭を含む 11. 淡黄褐色 12. 暗茶褐色 瓦を含む 13. 灰褐色
- 14. 暗茶褐色 橙粒を含む 15. 茶褐色 締り強 16. 暗褐色 締り弱 17. 茶褐色 黄土粒混じり (地山か) 18. 淡黄褐色

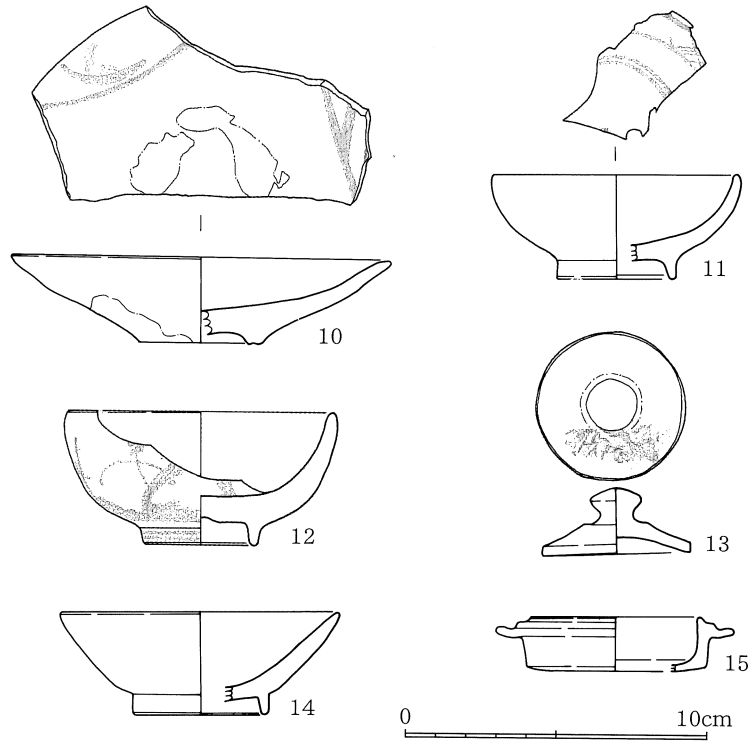
◇その他の遺物 (第67図)



第67-1図 7区 その他の遺物



第66-3図 7区 北壁土層図



第67-2図 7区その他の遺物

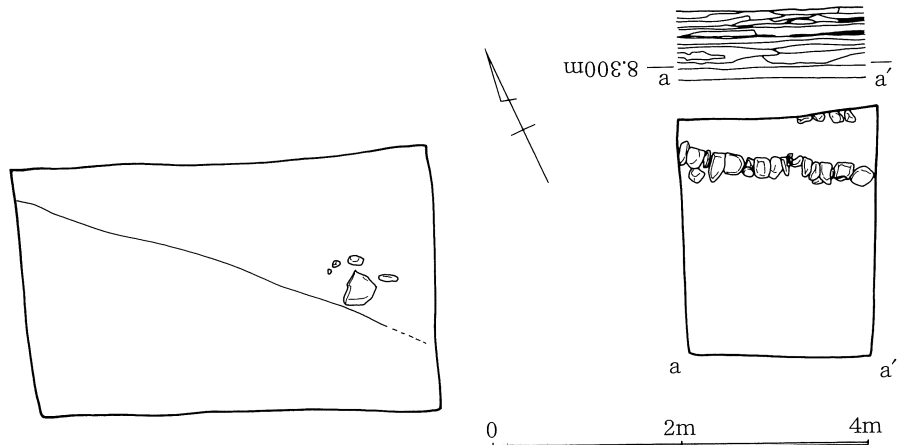
No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	(6.7)	肥前	焼土 1	1690~1740年	
2	陶器	—	—	6.2	肥前	焼土 1	1600~1630年	砂目 藁灰釉
3	陶器	(10.7)	—	—	肥前	焼土 1	?	
4	陶器	—	—	—	肥前	焼土 1	18世紀前半	口縁部破片
5	磁器	—	—	4.5	肥前	焼土	18世紀前半	
6	磁器	—	—	—	中国	一括	16世紀後半~17世紀初	呉須赤絵
7	土器	—	—	—	在地	焼土	?	口縁部破片
8	銅製品	—	—	—	—	遺構検出	—	
9	銅製品	—	—	—	—	焼土	—	
10	陶器	(12.6)	2.95	(4.2)	肥前	S K 3	1600~1630年	砂目
11	磁器	(8.1)	3.6	(3.85)	肥前		18世紀後半	青磁染付け
12	磁器	(8.9)	4.56	3.8	肥前	表探	18世紀後半	
13	磁器	5.0	2.2	—	?	西壁	現代?	蓋
14	磁器	(9.9)	3.5	(4.3)	?	表探	現代?	
15	陶器	(5.6)	1.85	(4.8)	関西系	一括	18世紀後半~	土瓶の蓋

## 8. 8区の遺構・遺物

### <概要>

本調査区は5区と7区に挟まれており、町屋敷絵図では『町役所』に相当する。

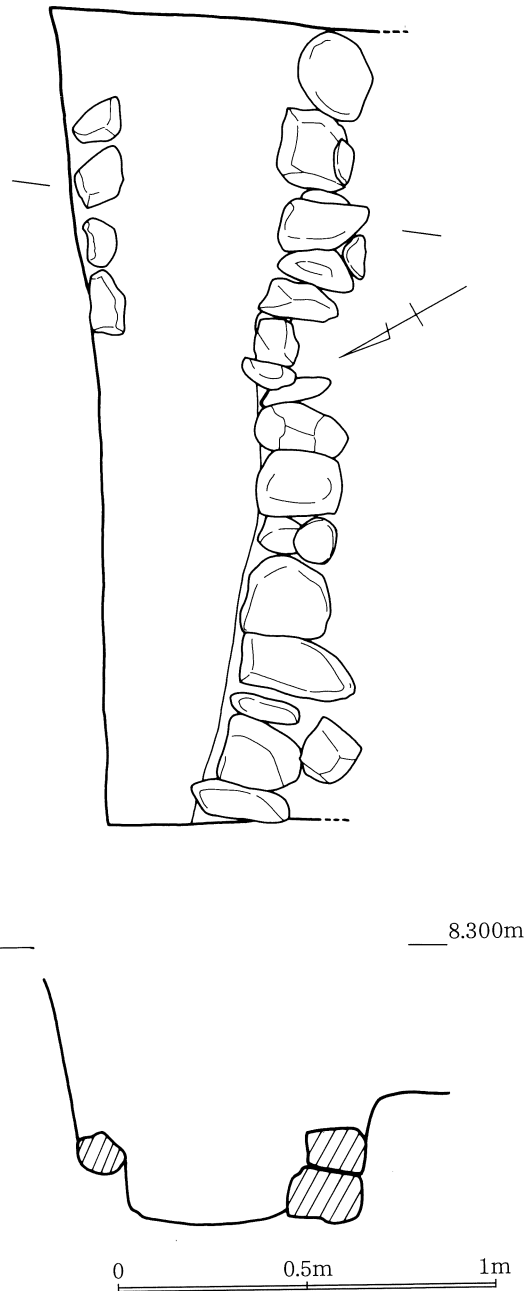
北に隣接する家屋の住人の出入り口を確保するため、東西2ヶ所にわけて調査した。ここでは溝状遺構1条、道路遺構を確認した。(第68図)



第68図 8区 平面図と南壁土層図

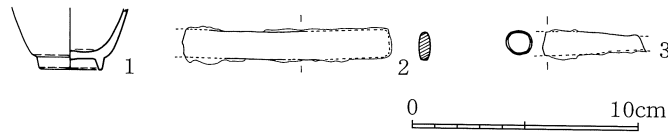
### ◆SD1 (溝状遺構) (第69図)

東調査区の北で検出した長さ1m、幅0.6m、深さ0.4mの溝状遺構である。4区と同様に、北の掘り方は調査区外になるため、石列は南のみ検出した。このSD1は、7区のSD1とつながっており、7区同様道路遺構の北の側溝になると思われる。SD1の南から、砂礫の入った固い道路遺構を検出したことから確認できる。



第69図 8区 SD1平断面図

◇SD 1 出土遺物 (第70図)

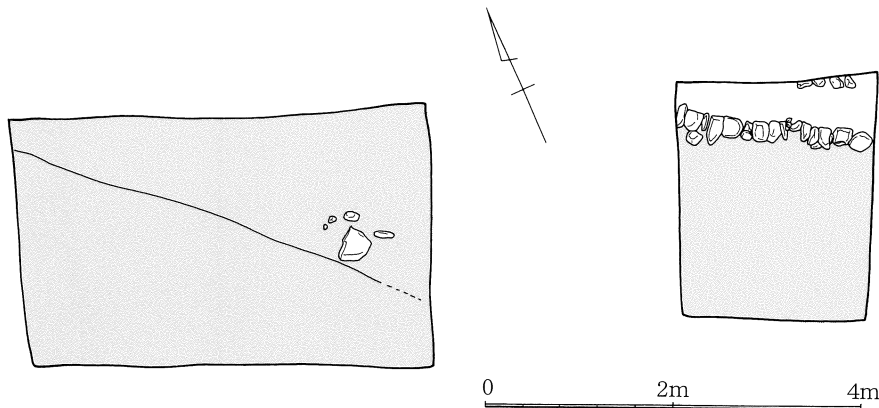


第70図 8区 SD1出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	-	-	2.9	肥前	SD 1	?	
2	銅製品	-	-	-	-	SD 1	-	キセル
3	銅製品	-	-	-	-	SD 1	-	小柄

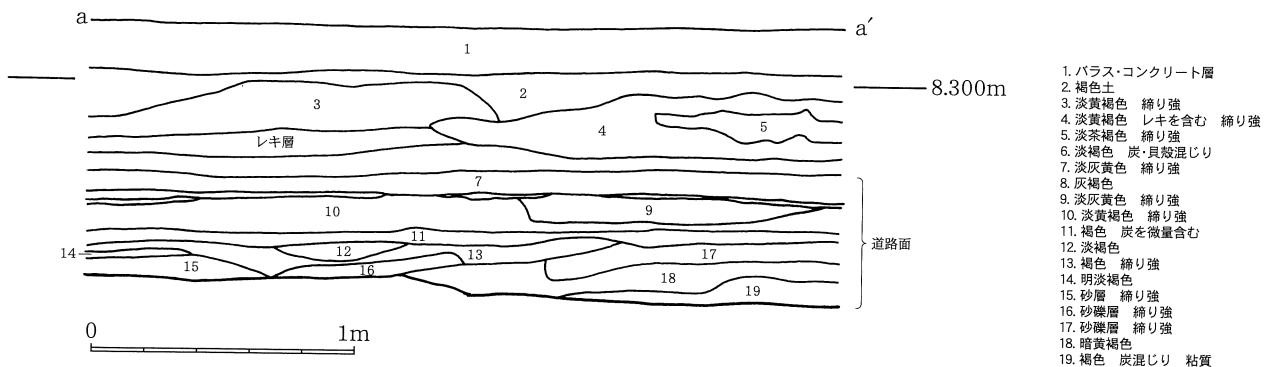
◆道路遺構 (第71図)

SD 1は西調査区では検出できなかった。しかし西調査区では、東調査区の道路遺構と同様の、砂礫混じりで固い道路遺構がほぼ全面に広がっていることが確認された。東調査区では北側溝が、隣の5区では南側溝が検出されていることから、西調査区はちょうど道路遺構の路面部分であると思われる。遺物は出土していない。



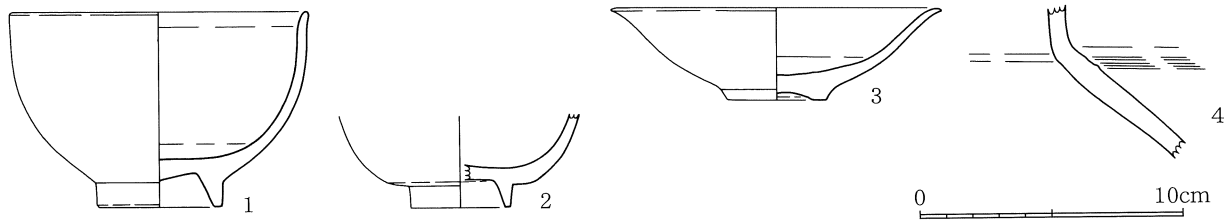
第71図 8区 道路遺構

◆土層図 (第72図)



第72図 8区 南壁土層図

◇その他の遺物（第73図）

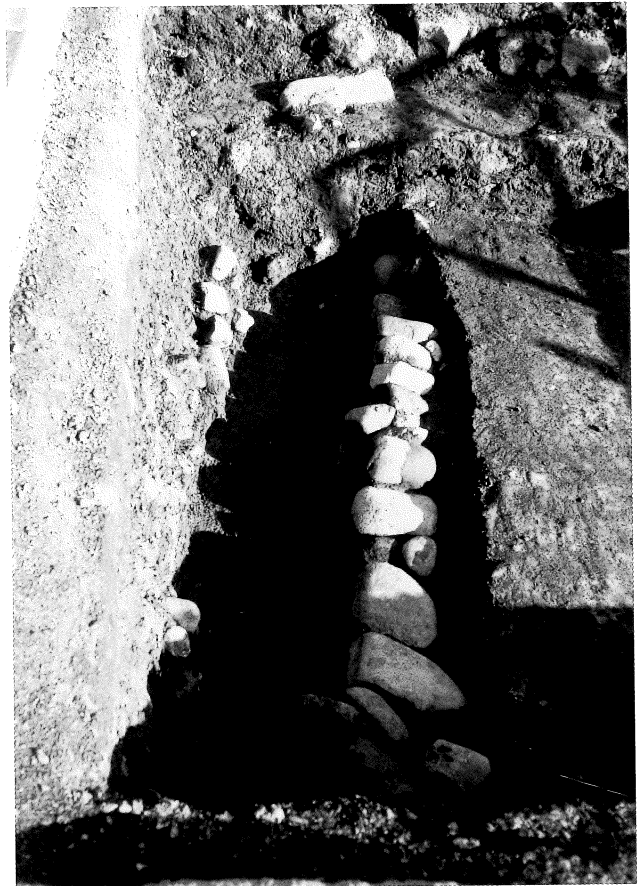


第73図 8区 その他の遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(11.8)	4.9	(4.9)	肥前	表採	17世紀後半	
2	磁器	—	—	(4.0)	肥前	表採	?	
3	陶器	(13.2)	3.6	3.95	肥前	一括	1600~1630年	砂目
4	陶器	—	—	—	京都 (信楽)	表採	17世紀	茶壺



8区西 道路遺構（東から）

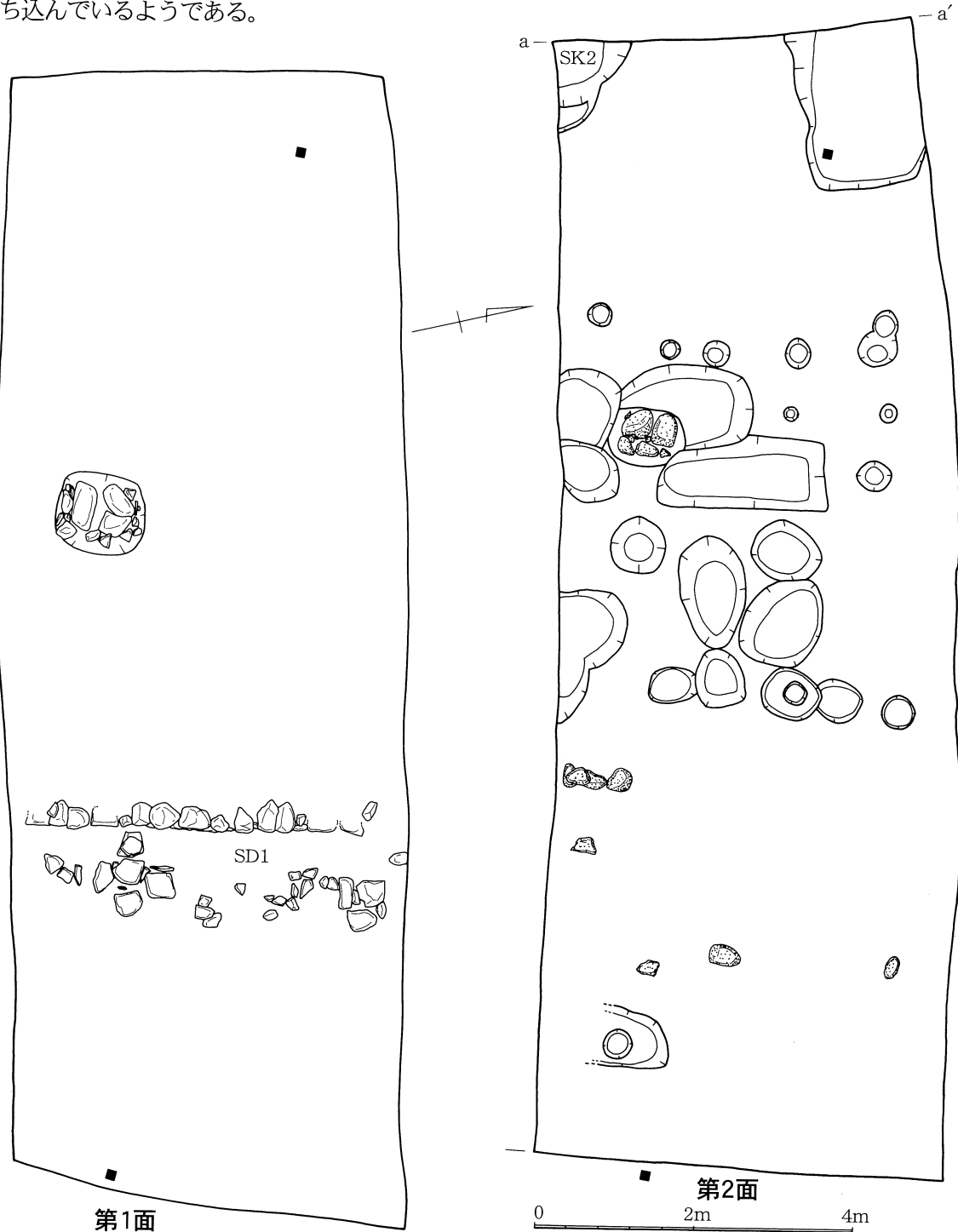


8区東 SD1 検出状況（東から）

## 9. 9区の遺構と遺物

### <概要>

この調査区から、現道を挟んで南に位置することになる。町屋敷絵図では『大黒屋彦兵エ』か『豊前屋金助』に相当する東西15m、南北5mの調査区である。9区ではレベル7.3m付近で検出した面を第1面、レベル6.5m付近で検出した面を第2面と、2回に分けて検出した。第1面では遺構2基（礎石らしき石1基、区画溝1条）を確認した（第74図）。第2面では遺構19基（土坑18基、焼土坑1基）を確認した（第74図）。調査区の西では、地山まで約10cm程度。しかし、東では地山は検出できず、地山は西から東へ、北から南へ落ち込んでいるようである。

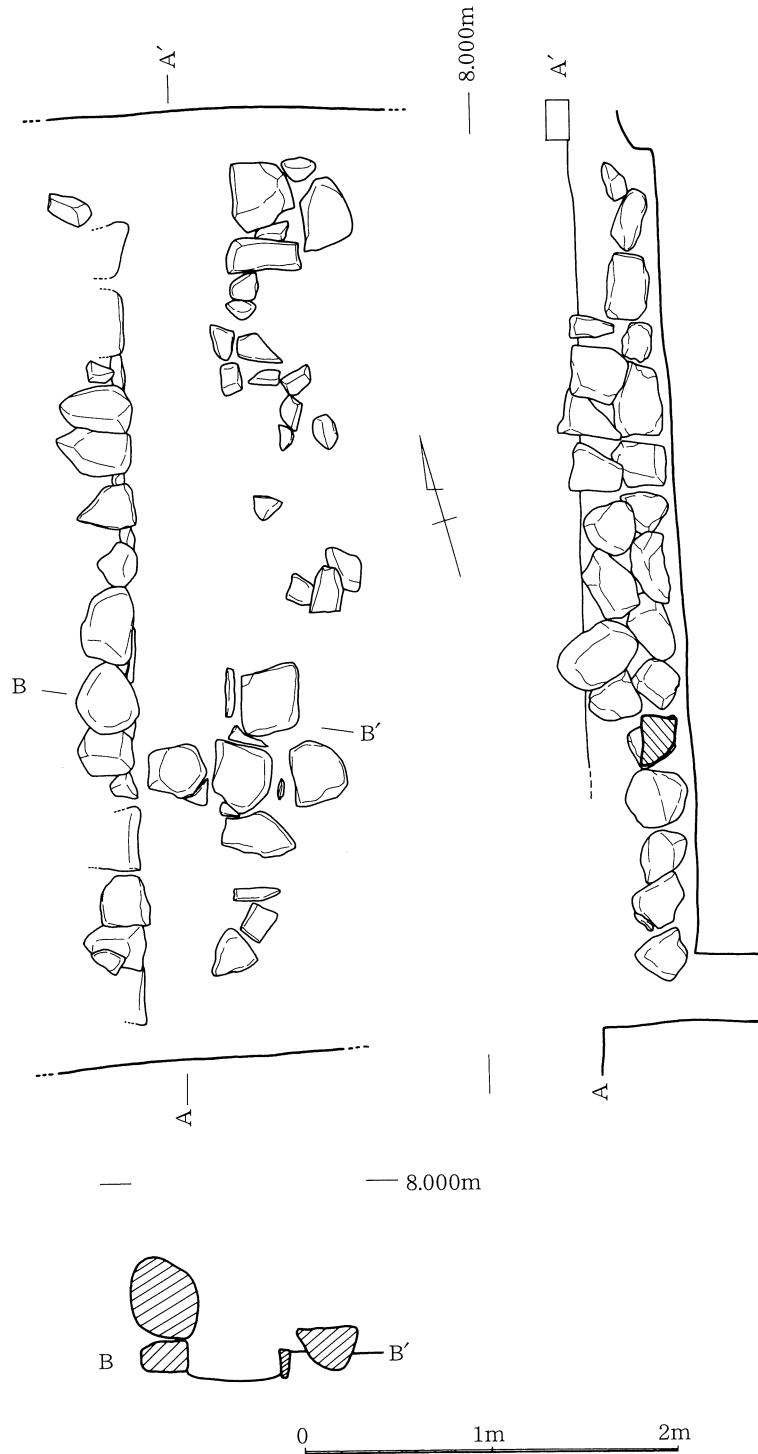


第74図 9区 第1面と第2面の平面図

《第1面》

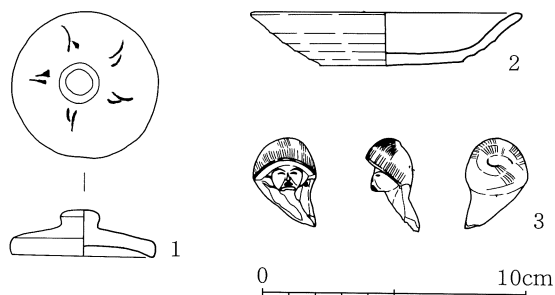
◆SD1 (区画溝) (第75図)

調査区のほぼ中央に南北に伸びる石列を検出した。長さ4.4m、幅1m、深さ0.6mの溝状遺構である。この石列を境に東側は、西側よりも40cmほど低くなっている。西の石列は2段にわたって検出できたが、東の石列はほとんどが破壊されている。



第75図 9区 SD1平断面図

◇SD 1 出土遺物 (第76図)



第76図 9区 SD1出土遺物

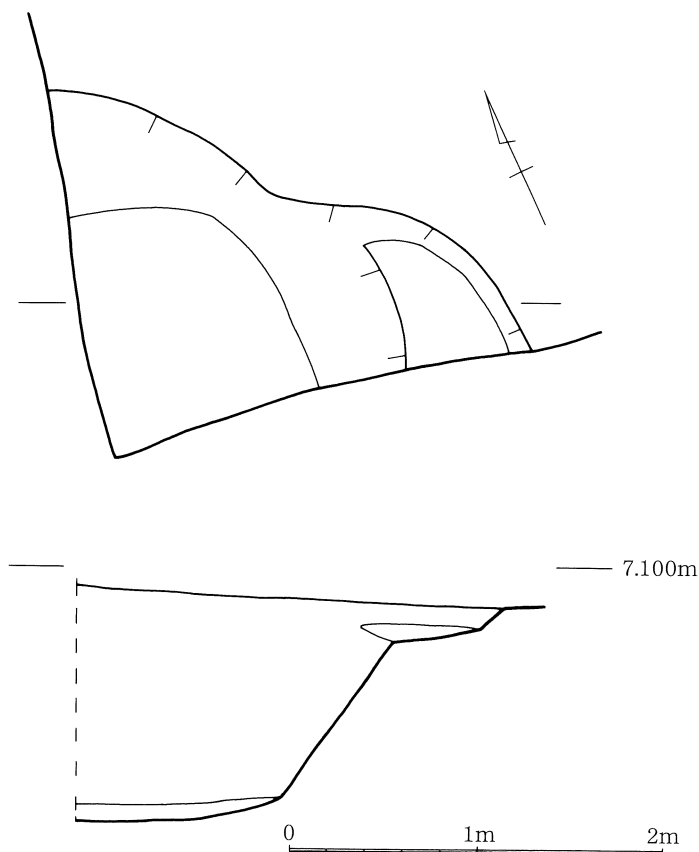
No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	1.5	1.85	5.6	関西系?	SD 1	18世紀後半~19世紀	蓋
2	土器	10.6	2.15	5.6	在地	SD 1	?	ろくろ成形
3	土器	—	—	—	関西系?	SD 1	18世紀~19世紀	人形頭部 施釉

《2面》

2面では詳細な時期が確定できない用途不明な土坑を17基、焼土坑を1基検出した。

◆SK 2 (焼土坑) (第77図)

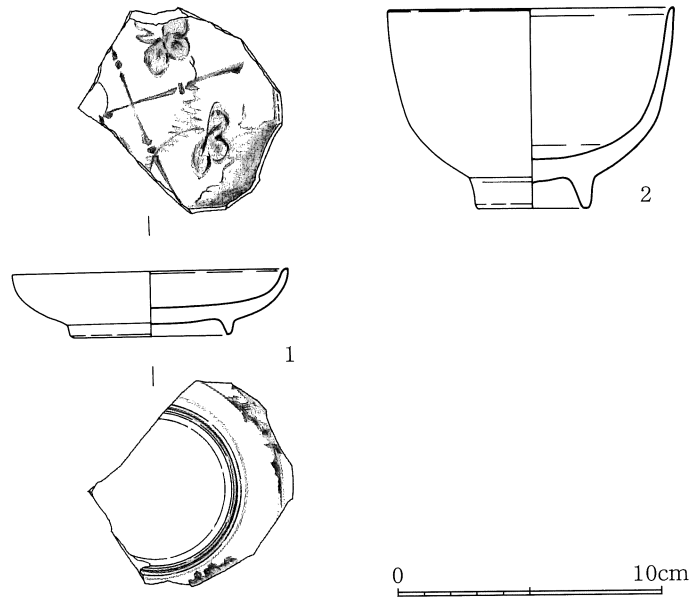
南西の隅で検出した。地山を掘り込んでおり、深さは50cmほど。焼けた瓦などが多数出土した。土層断面(第79図)から、レベル7.2m付近に焼土層が広がり、SK 2はこの焼土層に伴う土坑と考えられる。



第77図 9区 2面 SK2 (焼土坑) 平断面図



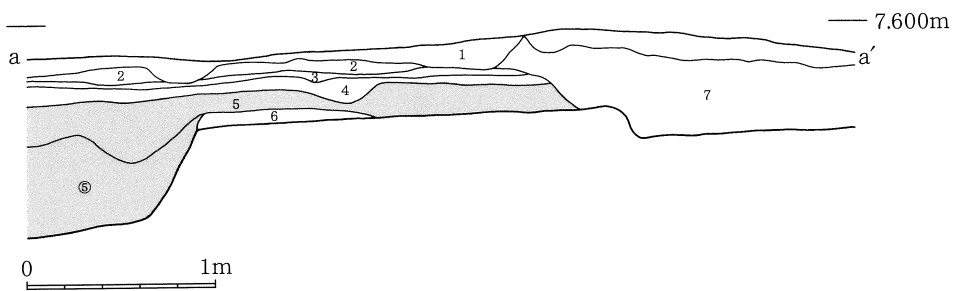
◇ SK 2 出土遺物 (第78図)



第78図 9区 SK2出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(11.0)	2.55	(6.1)	肥前	第1 焼土層	18世紀後半	
2	磁器	(11.3)	7.9	(4.4)	肥前	トレンチ内焼土層	1630~1650年	青磁

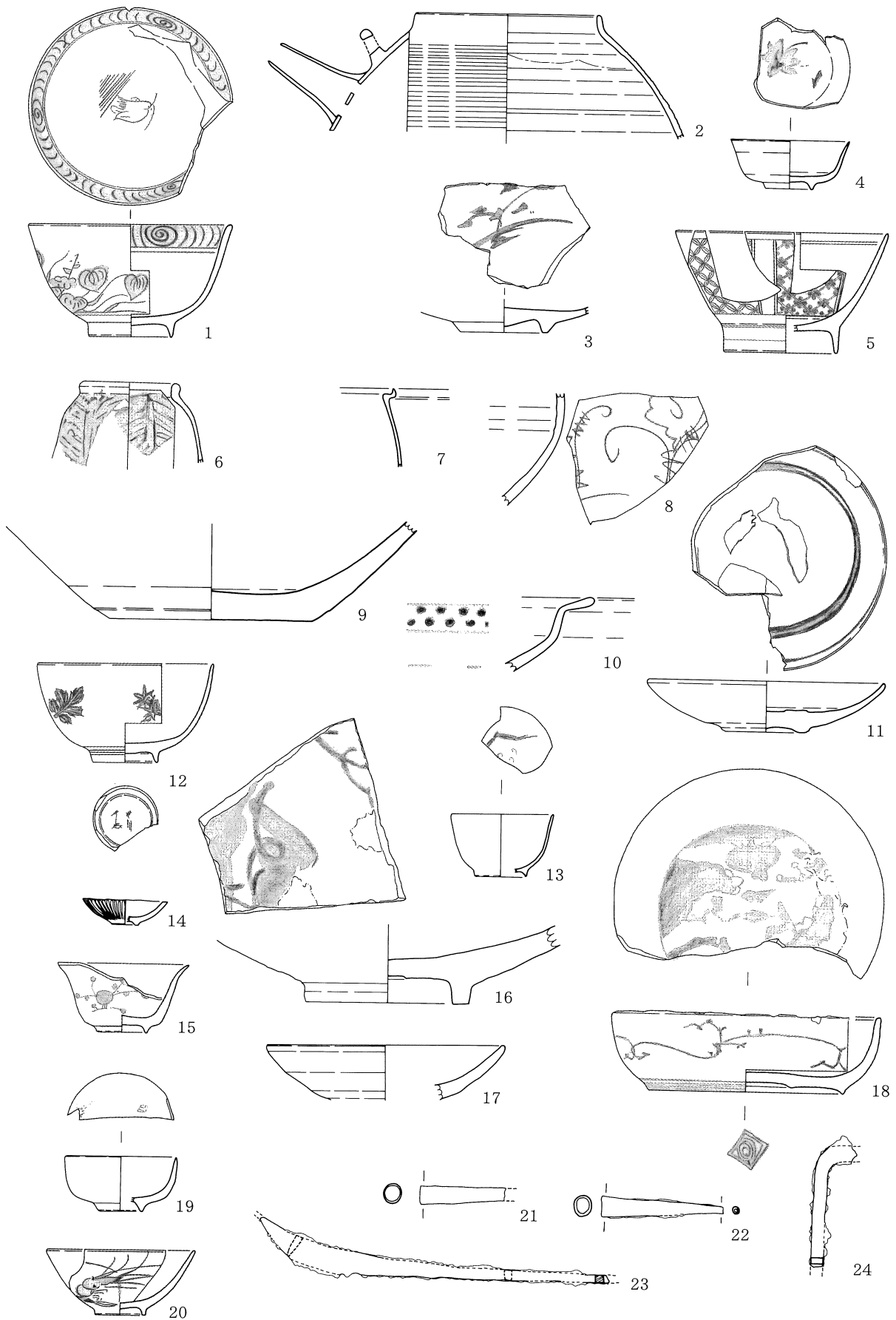
◆ 西壁土層図 (第79図)



1. 明褐色 表土 締り無し 2. 黄褐色 整地層 締り強 焼土及び炭化物含む 3. 灰褐色 整地層 砂質 焼土ブロック (3.4cm) を含む  
 4. 黄褐色 整地層 2層より黄色が強 焼土ブロック (2cm) 炭化物含 5. 焼土層 焼土ブロック (4.5cm) を多量に含  
 6. 黄色 整地層 暗褐色ブロック (3cm) を含 締り強 ⑤. 黒褐色 焼土層 土坑埋土 炭化物・焼土ブロックを少量含  
 7. 土坑の埋土 焼土・炭化物含 締り無し

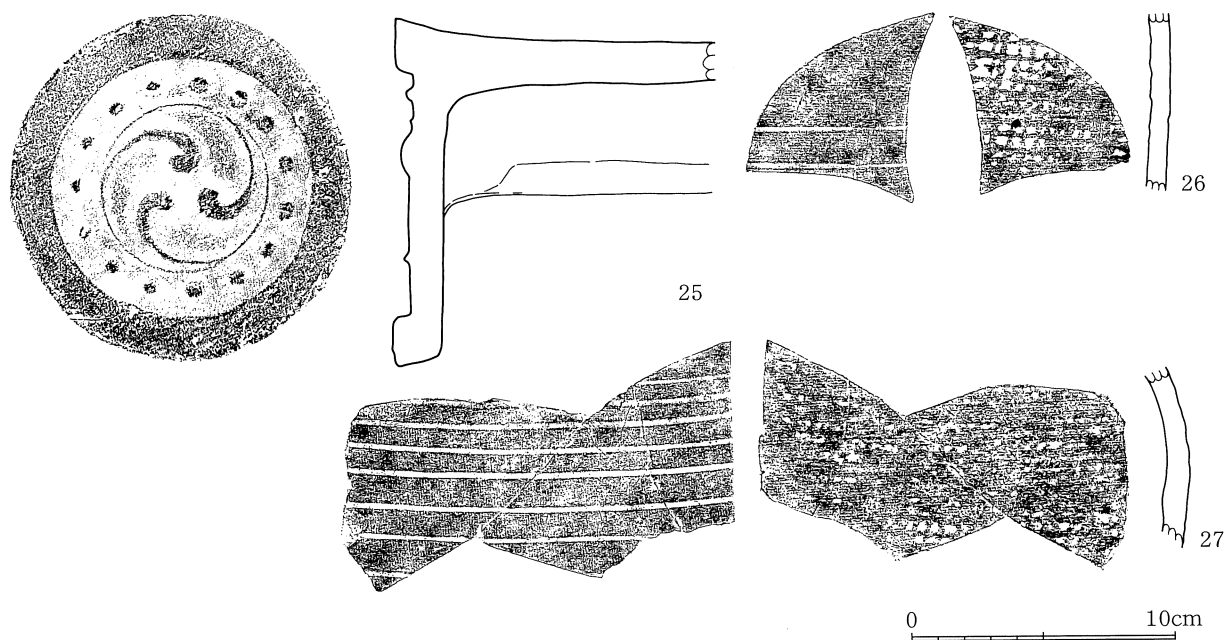
第79図 9区 西壁土層図

◆その他の遺物（第80図）



第80-1図 9区 その他の遺物

0 10cm



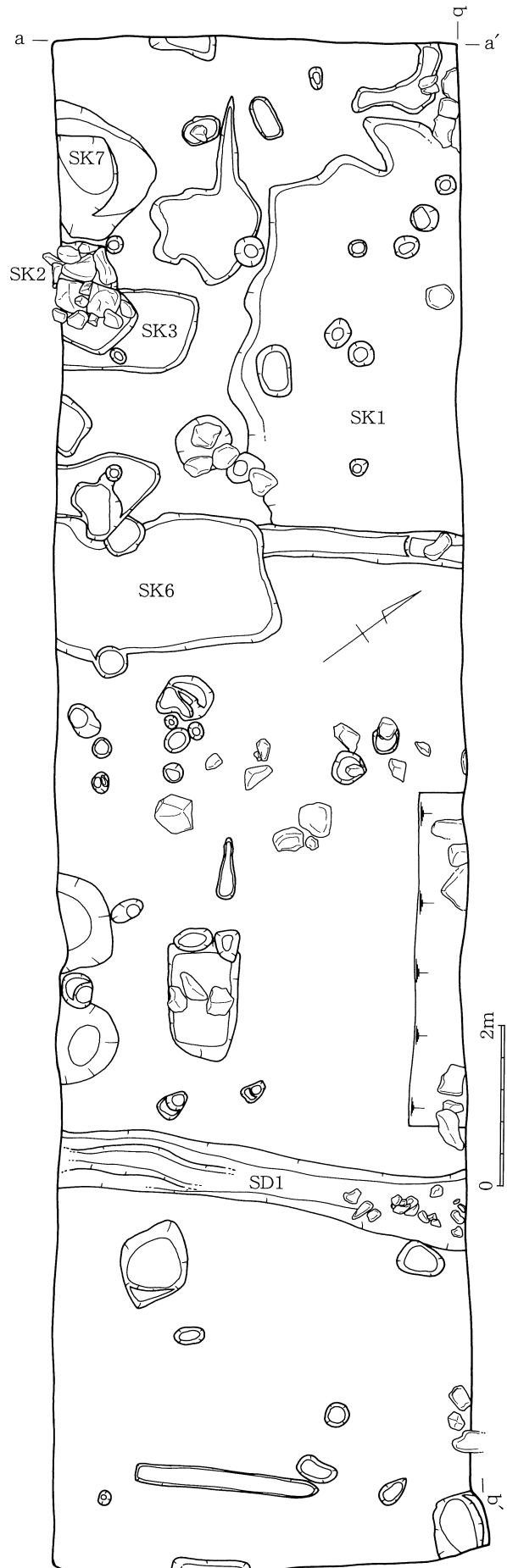
第80-2図 9区 その他の遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	11.0	46.0	4.4	肥前	西1層	1810~1860年	端反碗
2	陶器	10.0	—	—	関西系	SK10	18世紀後半~19世紀	土瓶
3	磁器	—	—	(4.8)	肥前		17世紀~18世紀	
4	磁器	(6.4)	2.6	2.6	瀬戸美濃/関西系	西1層	1830~1860年	被熱により胎土不明瞭
5	磁器	(11.4)	6.45	(6.0)	肥前	1層	1780~1810年	広東碗
6	陶器	(5.0)	—	—	関西系?	1層一括	18世紀後半~19世紀	
7	陶器	—	—	—	関西系	西1層	18世紀後半~19世紀	行平鍋口縁部破片
8	磁器	—	—	—	肥前	焼土2	17世紀~18世紀	
9	陶器	—	—	10.9	?		?	鉢
10	磁器	—	—	—	肥前	焼土2	1630~1650年	口縁部破片
11	陶器	(12.7)	2.7	4.3	肥前	1層一括	1610~1630年	皿
12	磁器	9.5	5.35	3.55	肥前	南トレンチ中層	17世紀末~18世紀前半	大明年製 こんにやく印判
13	磁器	(5.0)	3.4	(2.8)	肥前	表採	1830~1860年	薄手酒杯
14	磁器	(4.5)	1.3	(1.4)	肥前	整地層2層	18世紀後半~19世紀	白磁
15	磁器	(7.01)	3.7	2.6	肥前	南トレンチ中層	18世紀?	
16	陶器	—	—	(8.8)	関西系	東整地層2層	18世紀後半	
17	陶器	(12.55)	—	—	肥前	黄土中	17世紀前半	
18	磁器	14.4	4.1	10.9	肥前	表採	18世紀後半	渦福
19	磁器	6.0	3.7	2.25	瀬戸美濃/関西系	南トレンチ中層	1830~1860年	薄手酒杯
20	磁器	(7.5)	3.9	(2.7)	肥前	整地層2層	18世紀後半	小杯
21	銅製品	—	—	—	—	南トレンチ焼土内	—	キセル
22	銅製品	—	—	—	—	南トレンチ中層	—	キセルの吸い口
23	鉄器	—	—	—	—	1層	—	
24	鉄器	—	—	—	—	1層	—	かすがい?
25	軒丸瓦	—	—	—	在地	南トレンチ上層	?	瓦
26	陶器	—	—	—	肥前	南トレンチ焼土内	?	No.28と同一
27	陶器	—	—	—	肥前	南トレンチ焼土内	?	No.27と同一

## 10. 10区の遺構・遺物

### <概要>

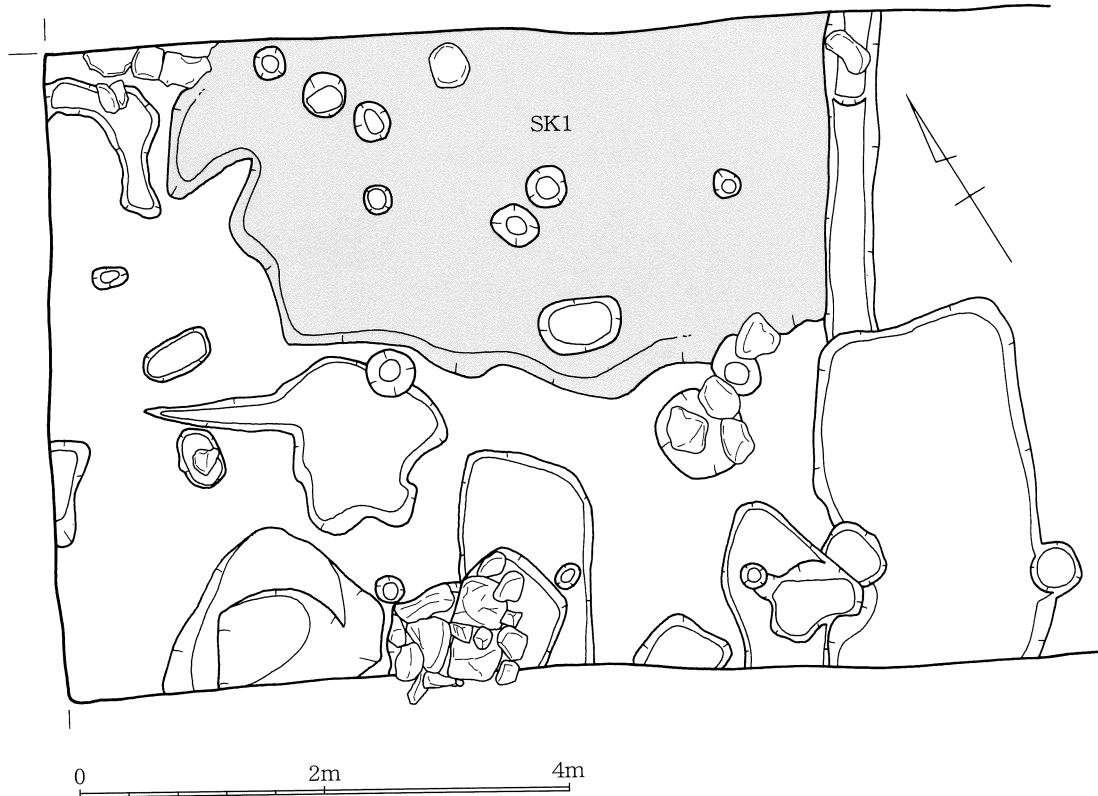
9区同様現道よりも南、東西16.5m、南北5mの調査区である。町屋敷絵図では『野上屋俊助』か『富士屋仁兵衛』付近に相当すると思われる。総数17基の遺構（土坑8基、ピット8基、溝状遺構1条）を確認した（第81図）。北側の土層断面（第87図）から、レベル8.5m付近に規則正しく石が並んでいるのが見てとれる。この石列は、現道に伴う側溝の名残ではないかと考えられる。調査区南のSK6は、現代の攪乱である。



第81図 10区 平面図

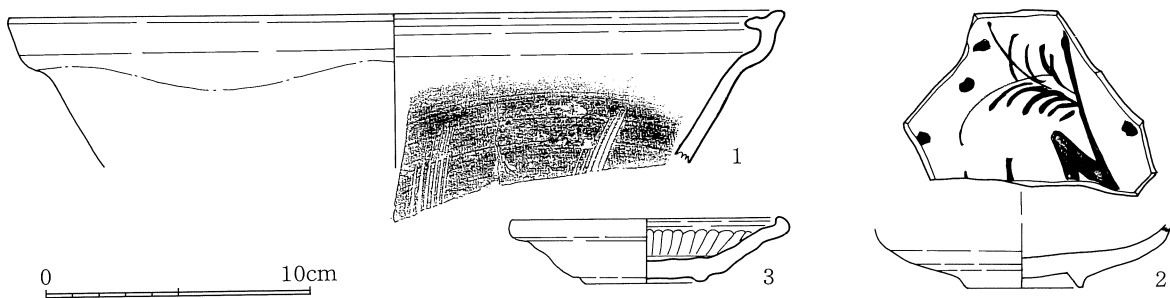
◆SK 1 (焼土坑) (第82図)

調査区北に広がるSK 1は焼土坑であり、広範囲に広がっている。厚さは10cm前後。焼土自体は調査区北側に全面的に広がっているが、10cm近く掘り込んでいるのはSK 1の範囲のみ(長さ約4m、幅約3m)である。ここから瀬戸美濃産の折縁ソギ皿(1590~1610)が出土しており、17世紀前半の火災の跡の可能性もある。



第82図 10区 SK1 (焼土坑)

◇SK 1 出土遺物 (第83図)

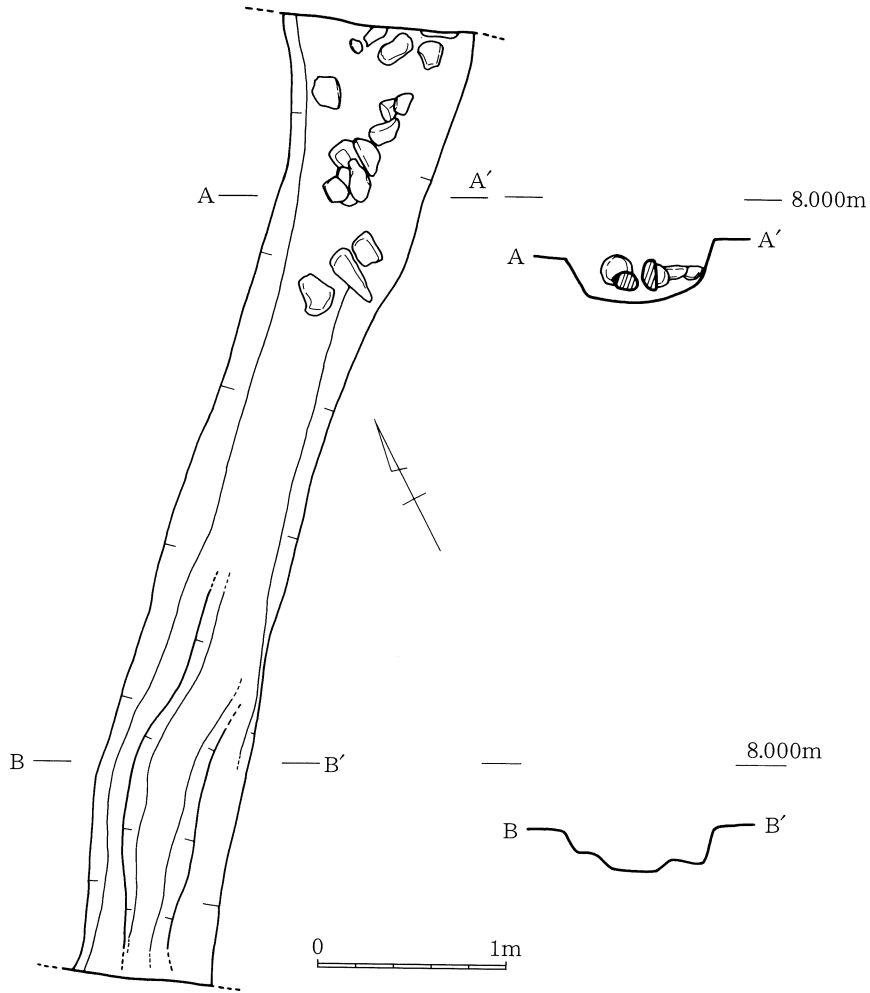


第83図 10区 SK1出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(30.2)	—	—	肥前	SK 1	17世紀前半	擂鉢口縁部
2	磁器	—	—	4.7	肥前	SK 1	1630~1650年	
3	陶器	10.6	1.5	4.8	瀬戸美濃	SK 1	1590~1610年	折縁ソギ皿

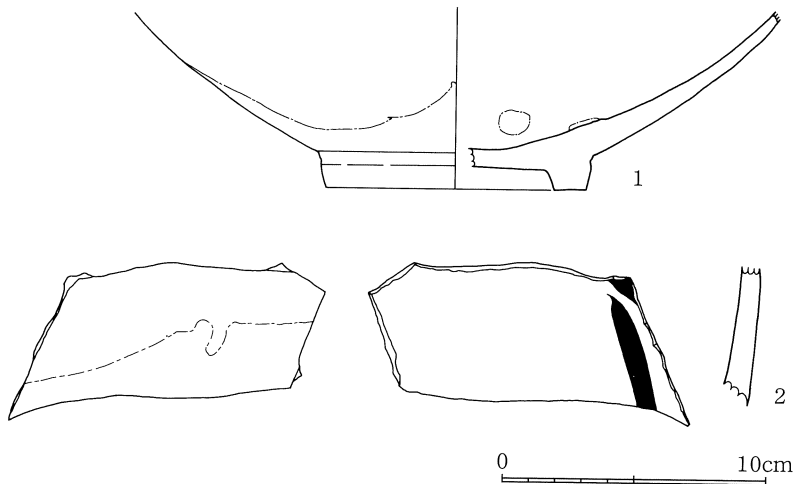
◆SD 1 (溝状遺構) (第84図)

調査区のやや東で、南北に伸びる長さ約5m、幅0.8m、深さ0.2mの溝状遺構を検出した。北では石列の名残とも思われる石を検出した。南では、掘り方が2段にわたって検出され、溝の掘りなおしの跡も考えられる。この溝状遺構は現道と直交しておらず、4・5・7・8区で確認した道路遺構と直交すると思われる。

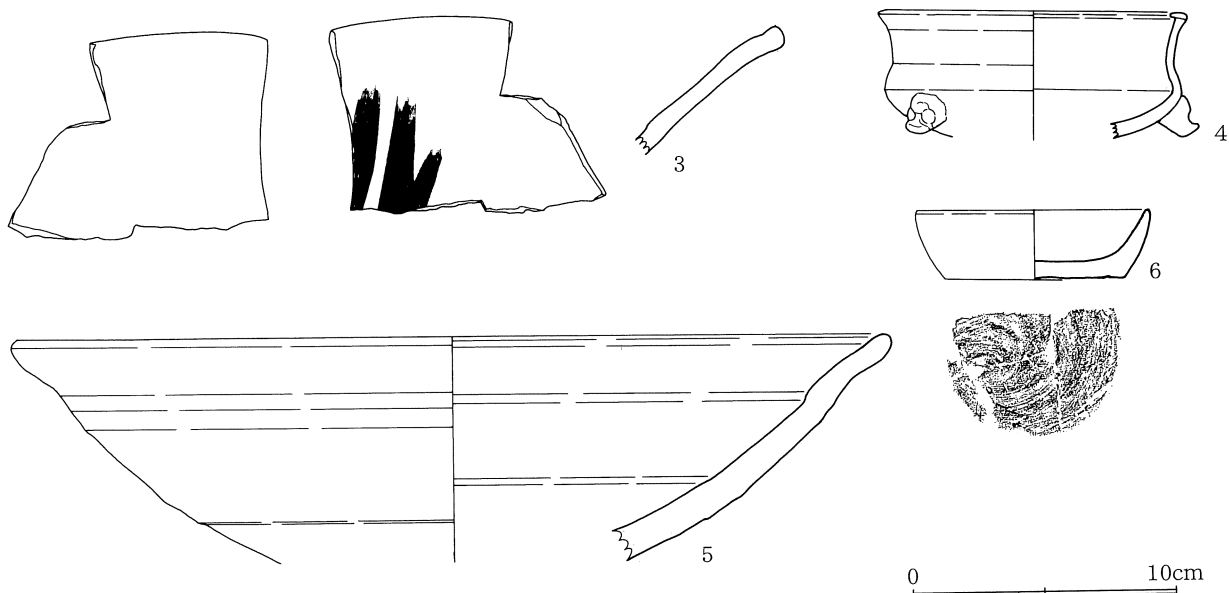


第84図 10区 SD1平面断面図

◇SD 1 出土遺物 (第85図)



第85-1図 10区 SD1出土遺物

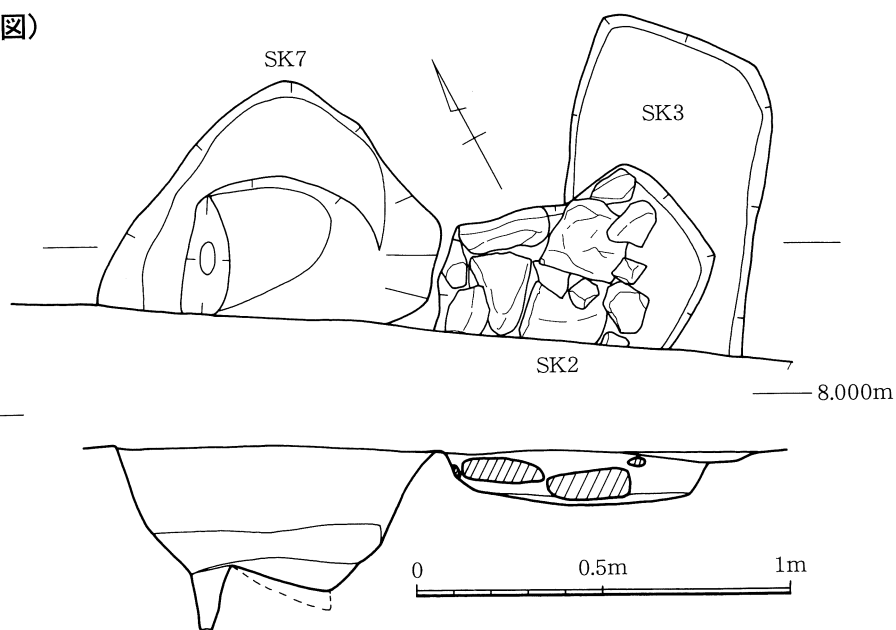


第85-2図 10区 SD1出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	(10.3)	肥前	SD 1	17世紀後半～18世紀前半	砂目
2	陶器	—	—	—	肥前	SD 1	1600～1630年	No. 3 と同一 絵唐津 砂目
3	陶器	—	—	—	肥前	SD 1	1600～1630年	No. 2 と同一 絵唐津 砂目
4	磁器	(12.6)	—	—	肥前	SD 1	18世紀	青磁 香炉
5	陶器	(34.5)	—	—	肥前	SD 1	17世紀	鉢
6	土器	(9.2)	2.75	(7.15)	在地	SD 1	?	杯

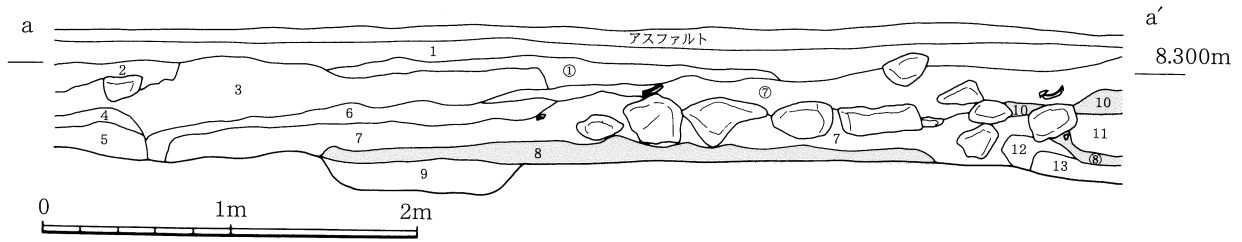
◆SK 2・3・7 (土坑) (第86図)

調査区の南端で検出した。それぞれSK 7は東西0.8m、南北0.6m、深さ0.4m、SK 2は東西0.7m、南北0.4m、深さ0.1m、SK 3は南北0.9m、東西0.5m、深さ4cmである。SK 7の東にSK 2が隣接しており、SK 2はSK 3と重複している。SK 2には多量の石が投げ込まれており、廃棄土坑と考えられる。SK 7には常時水が溜まっており、井戸の可能性ある。遺物は出土していない。



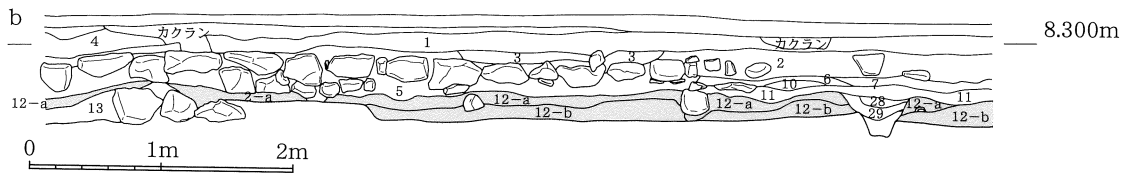
第86図 10区 SK2・3・7平断面図

◆土層図 (第87図)

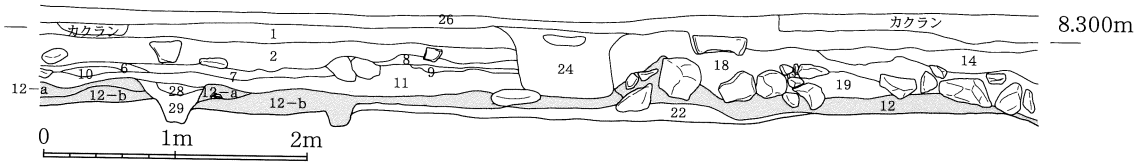


第87-1図 10区 西壁土層図

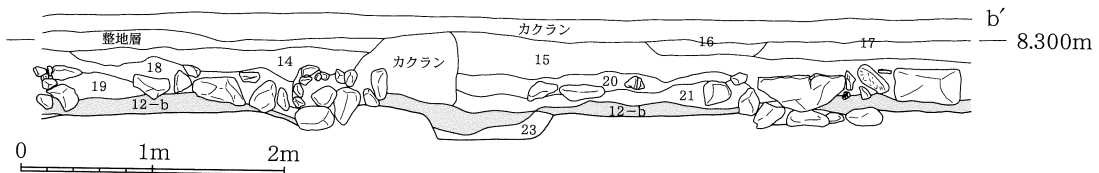
1. 褐色 炭混じり 締り強 現代の遺物混入 ①. 褐色 炭・黄土ブロック・ガラス片などを含む 2. 灰褐色 炭・黄土ブロック混じり ややもろい  
 3. 黒褐色 炭混じり 締り強 4. 茶褐色 黄土ブロック含む 砂質 もろい 5. 褐色 淡黄土ブロック含む 締り弱 6. 褐色 砂質 ややもろい 粘質の黄土ブロック多量に混入  
 7. 暗褐色 焼土・炭を含む ややもろい 遺物含む ⑦. 茶褐色 ややもろい 少量の炭と瓦を含む 8. 7層よりも黒い暗褐色 炭を多く含む ⑧. 8層よりも明るい暗褐色  
 9. 赤褐色 上部に黄土ブロックを少し含む 10. 褐色 焼土を多く含む 11. 褐色 炭を少し含む 砂質 ややもろい 12. 明褐色 炭を少し含む 黄土が全体に混入 締り強  
 13. 12層より炭・黄土が少ない



第87-2図 10区 北壁土層図①



第87-3図 10区 北壁土層図②

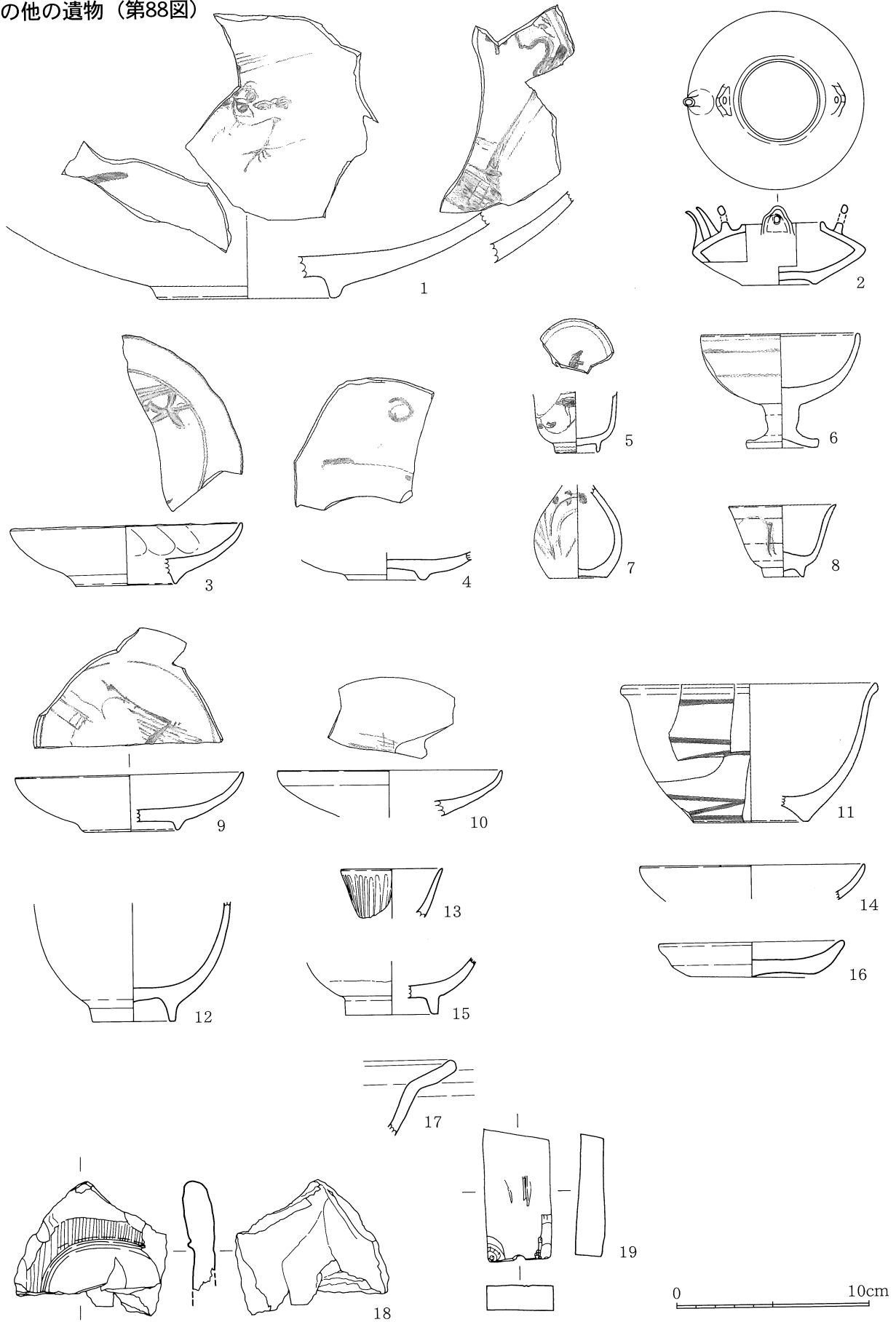


第87-4図 10区 北壁土層図③

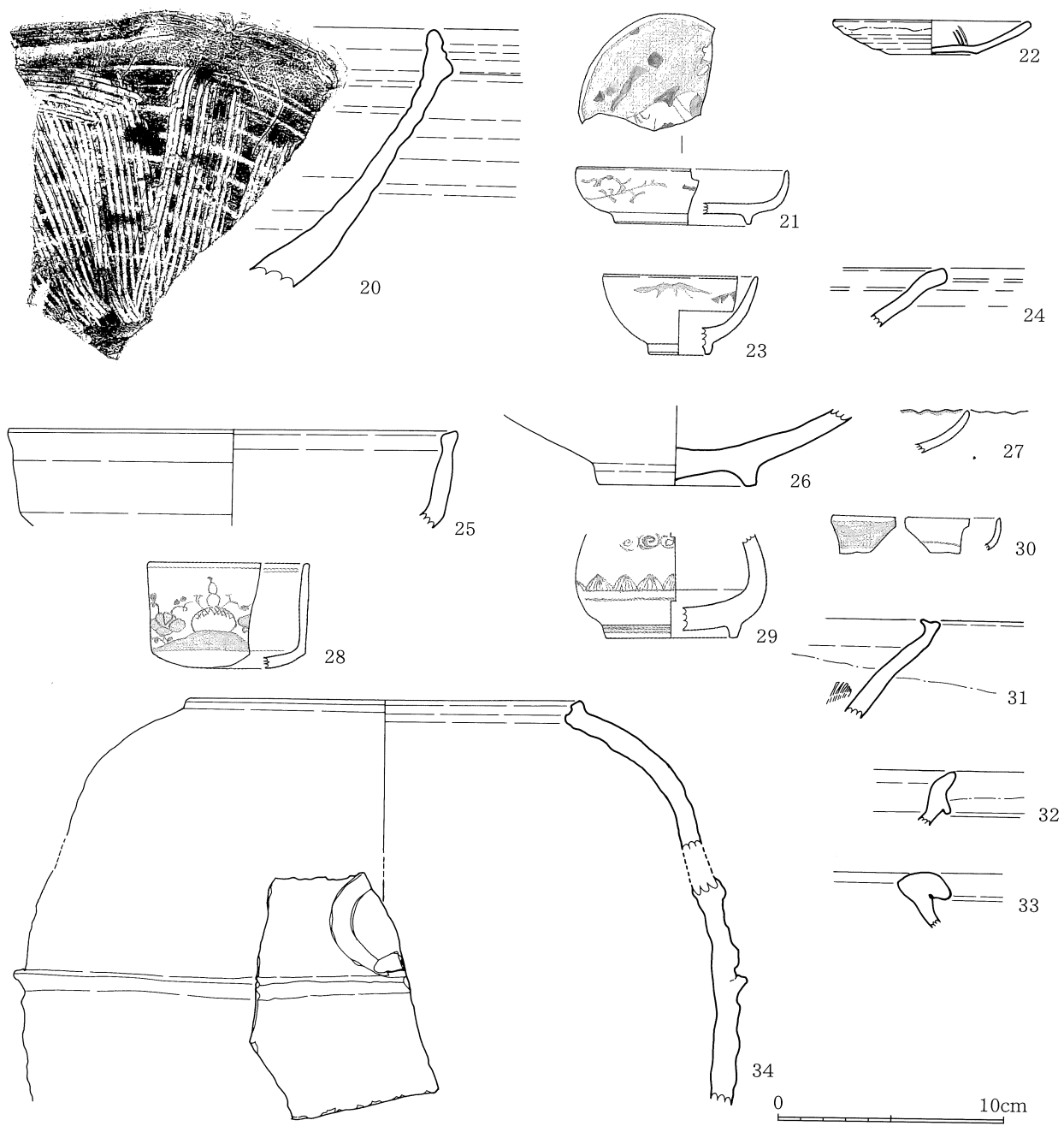
1. 褐色・明黄褐色混じり 2. 淡褐色 炭粒含む 3. 褐灰色 4. 灰褐色 5. 暗灰褐色 粘質 炭混じり 6. 灰色 7. 暗褐色 粘質 8. 暗灰褐色 9. 淡灰褐色 10. 暗灰色  
 11. 茶褐色 砂質 12-a. 焼土 暗橙粒・灰を多く含む 焼けがはげしい 12-b. 焼土 橙粒多い 13. 黄褐色 褐色混じり 14. 褐色 締り弱 15. 茶褐色  
 16. 黄茶褐色 レキ混じり 17. 褐色 締り強 18. 締り強 19. 茶褐色・明黄褐色混じり 20. 褐色 黄土混じり 21. 暗茶褐色 22. 黒褐色 23. 褐色 砂質 24. 区画溝  
 25. 黄土 26. アスファルト・バラスト 27. 整地層 28. 明褐色 淡黄灰褐色混じり 29. 茶褐色



◆その他の遺物 (第88図)



第88-1図 10区 その他の遺物



第88-2図 10区 その他の遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	—	—	(9.5)	肥前	遺構検出	1630~1650年	
2	陶器	4.4	4.3	4.1	関西系	遺構検出	19世紀~	土瓶
3	磁器	(12.1)	3.2	(5.0)	肥前	遺構検出	1630~1650年	S K 4 と同一
4	磁器	—	—	(2.2)	肥前	S X 1	1630~1650年	
5	磁器	—	—	(4.2)	中国?	遺構検出	17世紀	
6	磁器	8.45	6.2	3.9	肥前	遺構検出	18世紀後半	
7	磁器	—	—	(3.1)	肥前	遺構検出	18世紀	
8	磁器	(5.8)	3.2	3.85	肥前	遺構検出	1630~1650年	
9	陶器	12.3	3.1	(5.1)	肥前	遺構検出	1630~1650年	No.12と同一個体
10	磁器	(12.15)	—	—	肥前	遺構検出	18世紀後半	5区東1層 (No.1) と同一
11	磁器	(13.7)	7.4	(6.35)	肥前	遺構検出	17世紀~18世紀?	
12	磁器	—	—	(4.5)	肥前	遺構検出	1630~1650年	青磁
13	陶器	(5.4)	—	—	肥前	遺構検出	1630~1650年	小杯
14	陶器	(12.25)	—	—	肥前	遺構検出	1630~1650年	No.9と同一個体
15	陶器	—	—	(5.0)	福岡産	遺構検出	17世紀~18世紀	
16	土器	10.0	1.9	7.1	在地	遺構検出	?	
17	陶器	—	—	—	肥前	遺構検出	1600~1630年	溝縁皿口縁部破片
18	硯	—	—	—	赤間	遺構検出	?	
19	砥石	—	—	—	?	南壁下層	?	
20	陶器	—	—	—	備前	遺構検出	17世紀前半	播鉢口縁部破片
21	磁器	9.6	2.55	(6.0)	肥前	一括	18世紀前半 (1728?)	
22	陶器	9.0	1.55	4.1	関西系	一括	18世紀後半~19世紀前半	
23	磁器	7.1	3.65	(2.8)	肥前	一括	18世紀後半	
24	陶器	—	—	—	肥前	一括	1600~1630年	溝縁皿 口縁部破片
25	陶器	(20.6)	—	—	肥前	遺構検出	18世紀	
26	陶器	—	—	(7.3)	肥前	遺構検出	17世紀前半	砂目
27	磁器	—	—	—	肥前	遺構検出	1630~1650年	No.3と同一 口縁部破片
28	磁器	(7.0)	4.8	(3.4)	肥前	S K 9	18世紀末~19世紀初	筒形碗
29	磁器	—	—	(6.2)	肥前	遺構検出	17世紀~18世紀	
30	磁器	—	—	—	肥前	一括	18世紀前半 (1728?)	No.32と同一 口縁部破片
31	陶器	—	—	—	肥前	南壁	17世紀前半	播鉢 口縁部破片
32	陶器	—	—	—	?	遺構検出	17世紀~18世紀	口縁部破片
33	陶器	—	—	—	関西系?	遺構検出	18世紀後半~19世紀	口縁部破片
34	陶器	(17.7)	—	—	備前	遺構検出	16世紀末~17世紀前半	水屋甕

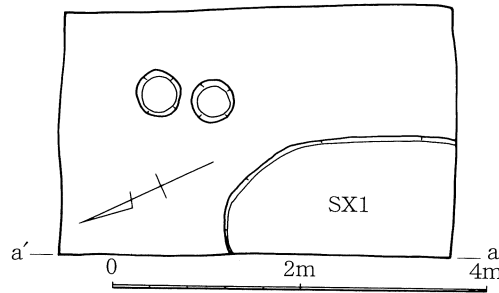


10区 完掘状況 (西から)

# 1 1. 11区の遺構・遺物

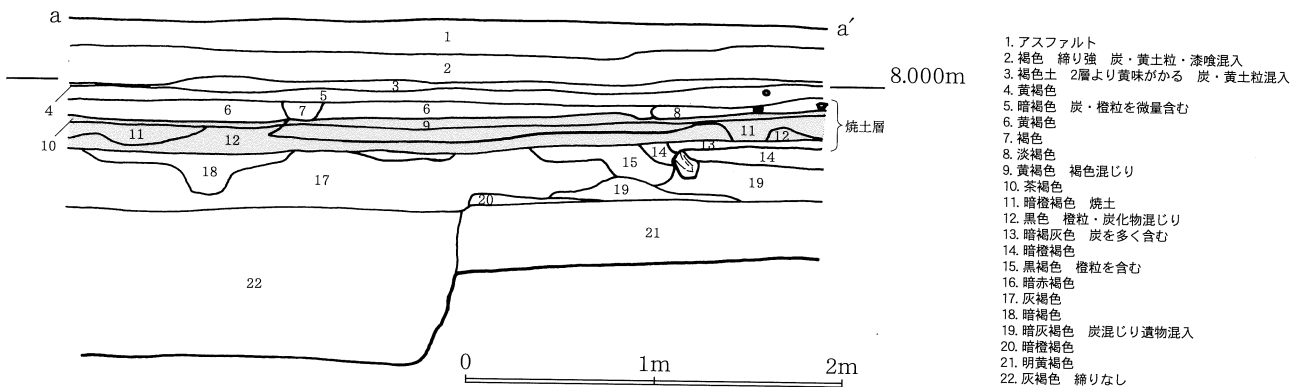
## <概要>

飴屋の坂の西に隣接する南北4m、東西2.5mの調査区である。町屋敷絵図では番屋に相当すると思われる。1基の不明土坑を確認した（第89図）。地山はレベル7.1m付近で検出。北から南へ、東から西へゆるやかに落ちている。地山直上には遺物の含まれていない黄土層があり、この層から不明土坑（S X 1）が地山を切って掘り込まれている。



第89図 11区 平面図

## ◆東壁土層図（第90図）

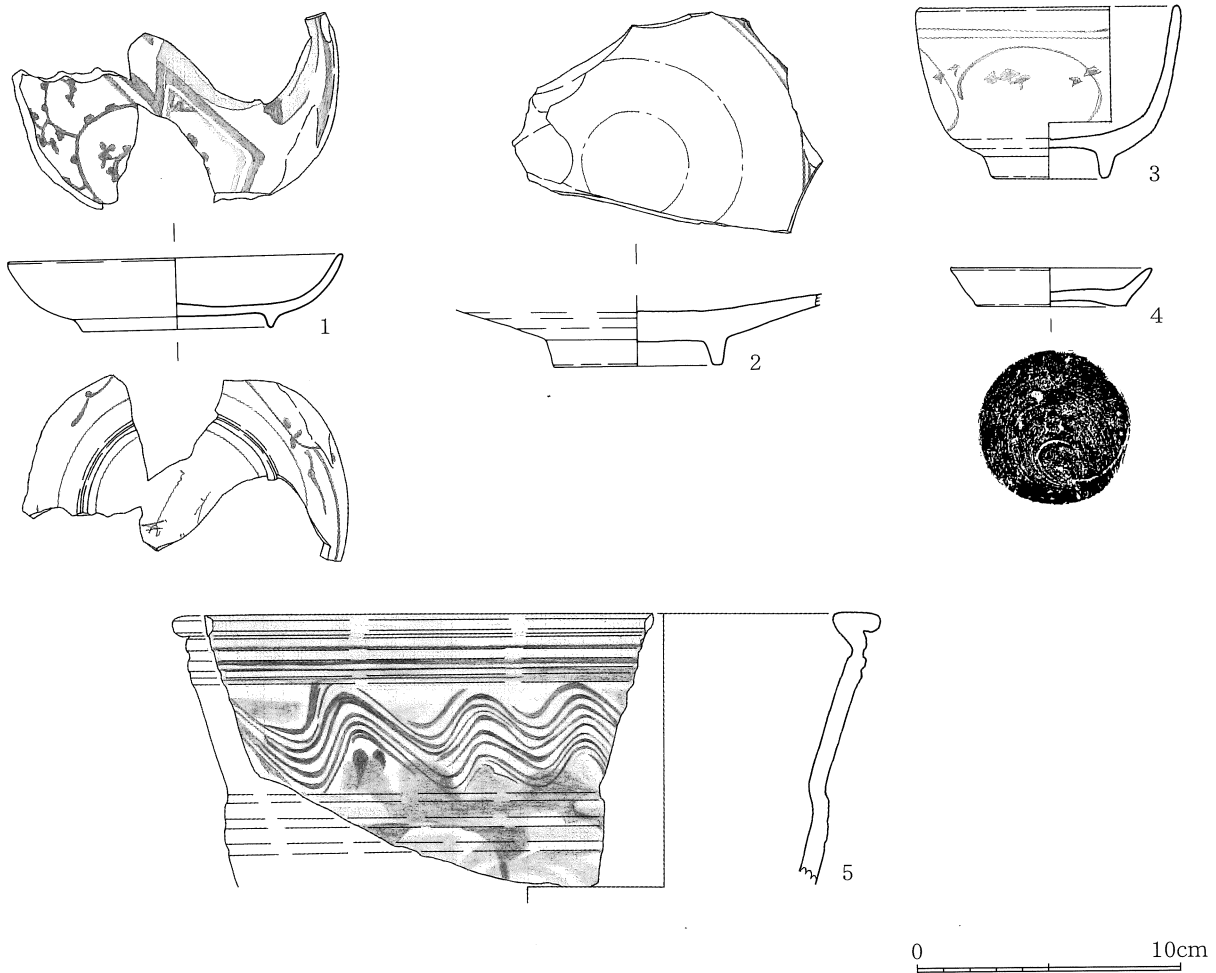


第90図 11区 東壁土層図

## ◆焼土

レベル7.7m付近で、調査区全面に焼土が広がる。厚さは10cm前後。焼土中から軒棧瓦の残骸など多数出土した。これによると、瓦は18世紀後半以降のものである。町屋でこれだけ大量の瓦が使われていることは少なく、町屋敷絵図では番屋に相当する可能性があったことから、この焼土は番屋の火災の跡である可能性がある。

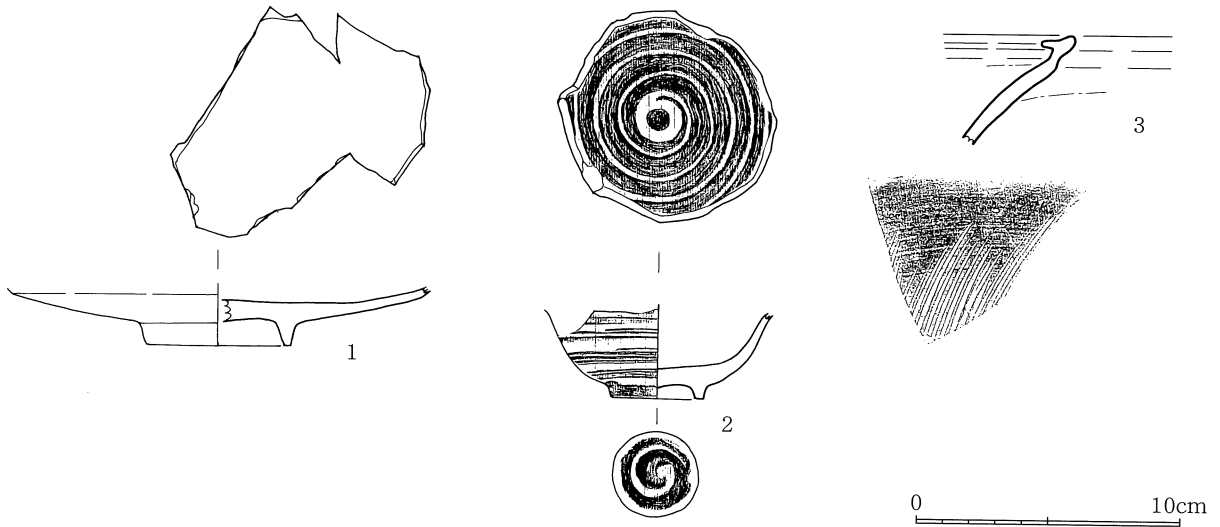
◇焼土層出土遺物（第91図）



第91図 11区 焼土層出土遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(13.4)	2.8	7.6	肥前	焼土層	18世紀前半	大明年製
2	磁器	—	—	6.6	肥前	焼土層	18世紀後半	
3	陶器	10.2	6.7	4.4	肥前	焼土層	18世紀前半	陶胎染付
4	土器	7.8	1.5	6.0	在地	焼土層	17世紀後半～18世紀前半	スス付着 灯明皿か
5	陶器	(27.6)	—	—	肥前	焼土層	?	

◆その他の遺物（第92図）



第92図 11区 その他の遺物

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	(5.8)	肥前	S X 1	1600~1630	内野山窯 砂目
2	陶器	—	—	3.6	肥前	3層 (土層図)	17世紀末~18世紀前半	刷毛目碗 (現川系)
3	陶器	—	—	—	肥前	3層 (土層図)	17世紀前半	播鉢 口縁部破片

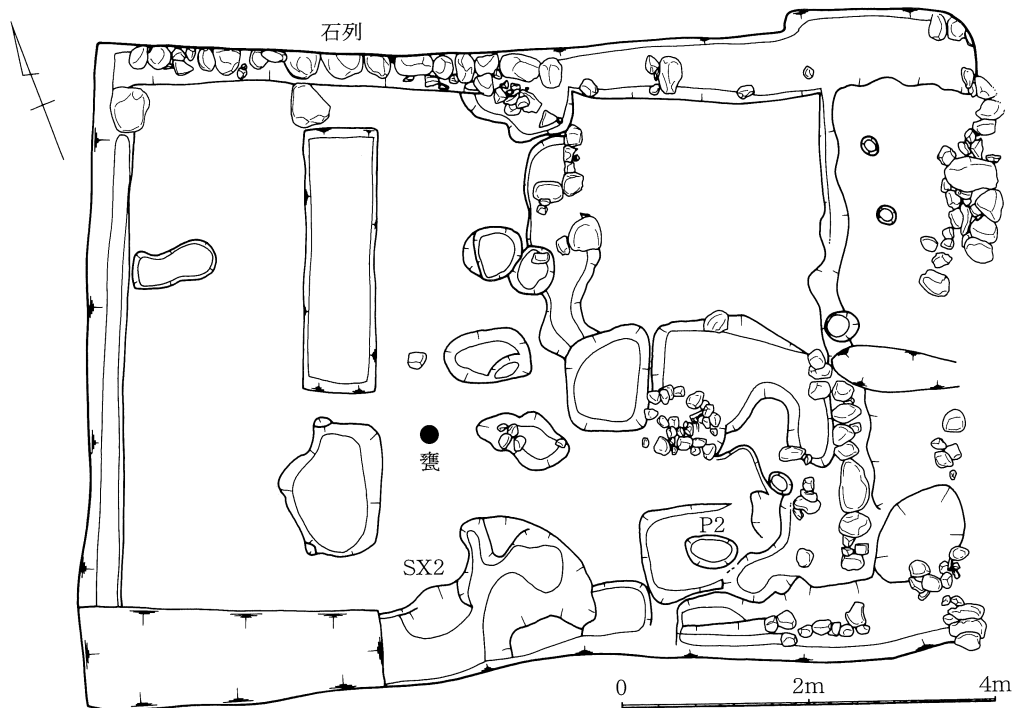


11区 完掘状況（東から）

## 12. 12区の遺構・遺物

### <概要>

町屋敷絵図では、『高田屋善兵エ』か『帯屋崎蔵』付近と思われる東西9m、南北6mの調査区である。地表下20cmで総数11基の遺構（石列2基、土坑2基、ピット3基、不明土坑4基）が確認された（第93図）。

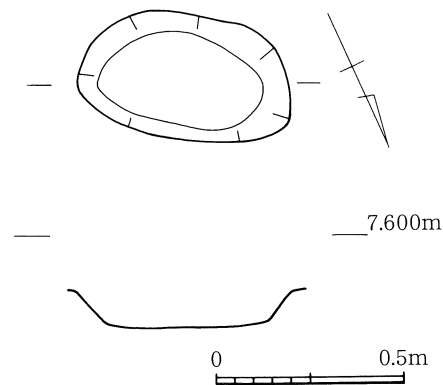
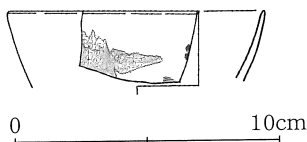


第93図 12区 平面図

### ◆ P 2（土坑）（第94図）

S X 2 の東で検出。深さ10cm程度。

### ◇ P 2 出土遺物（第95図）



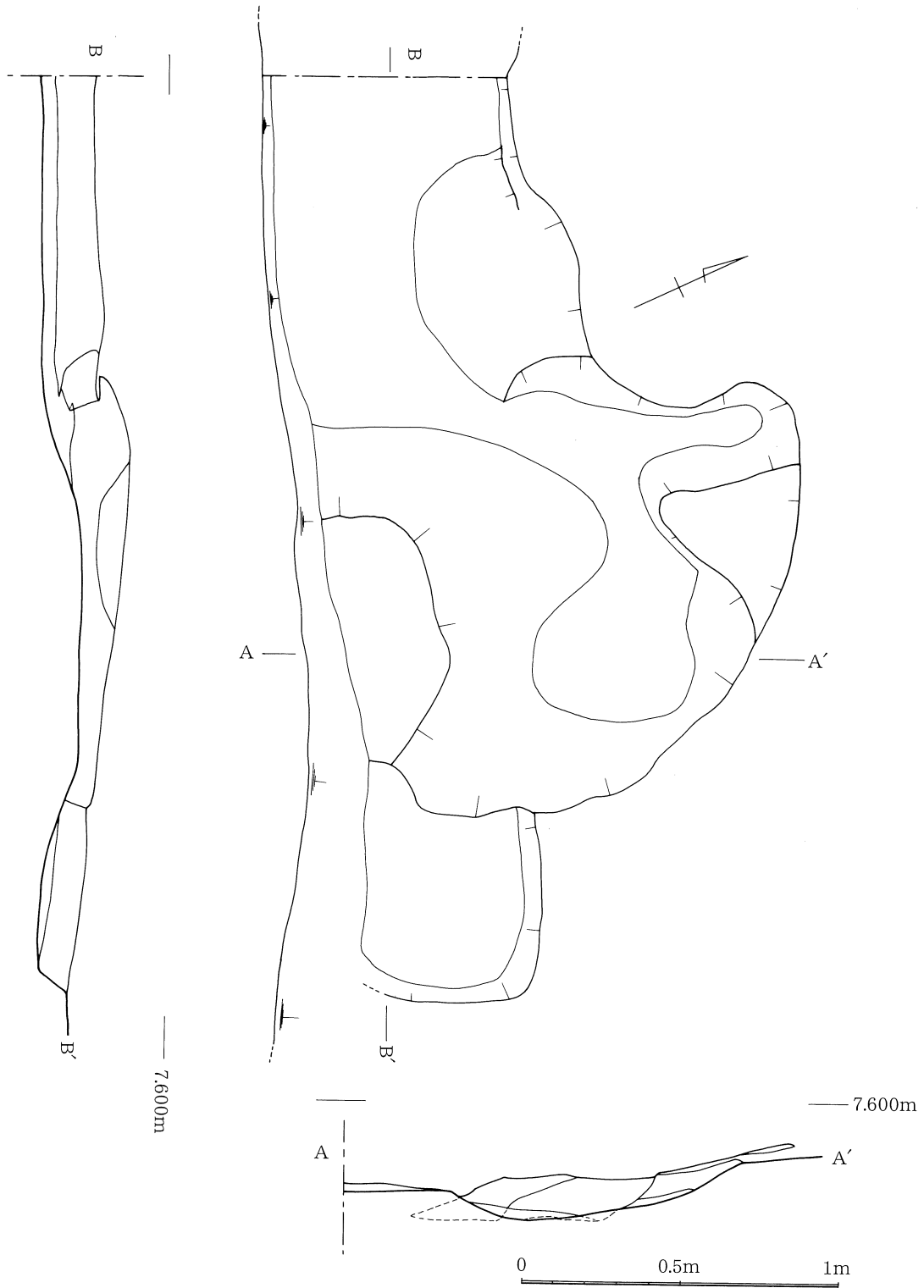
第95図 12区 P2出土遺物

第94図 12区 P2平断面図

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(10.2)	—	—	肥前	P 2	1690~1740年	こんにやく印判

◆ SX 2 (用途不明土坑) (第96図)

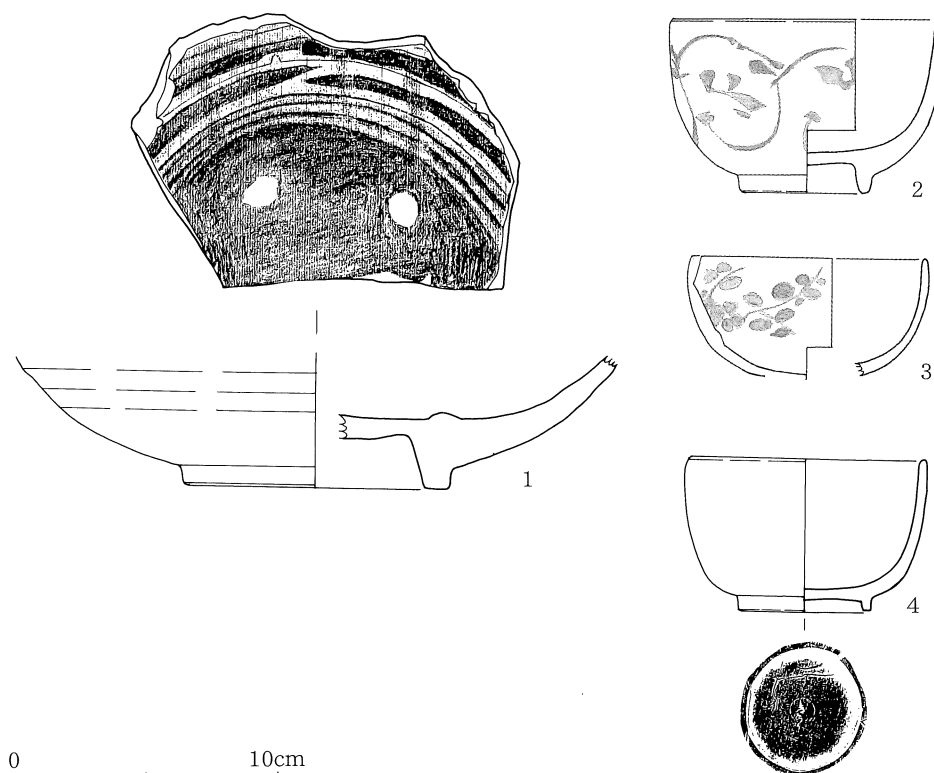
調査区南で検出した。重複が激しいためか、明確な掘り方は確認出来ない。



第96図 SX2 (用途不明土坑) 平断面図



◇ S X 2 出土遺物 (第97図)

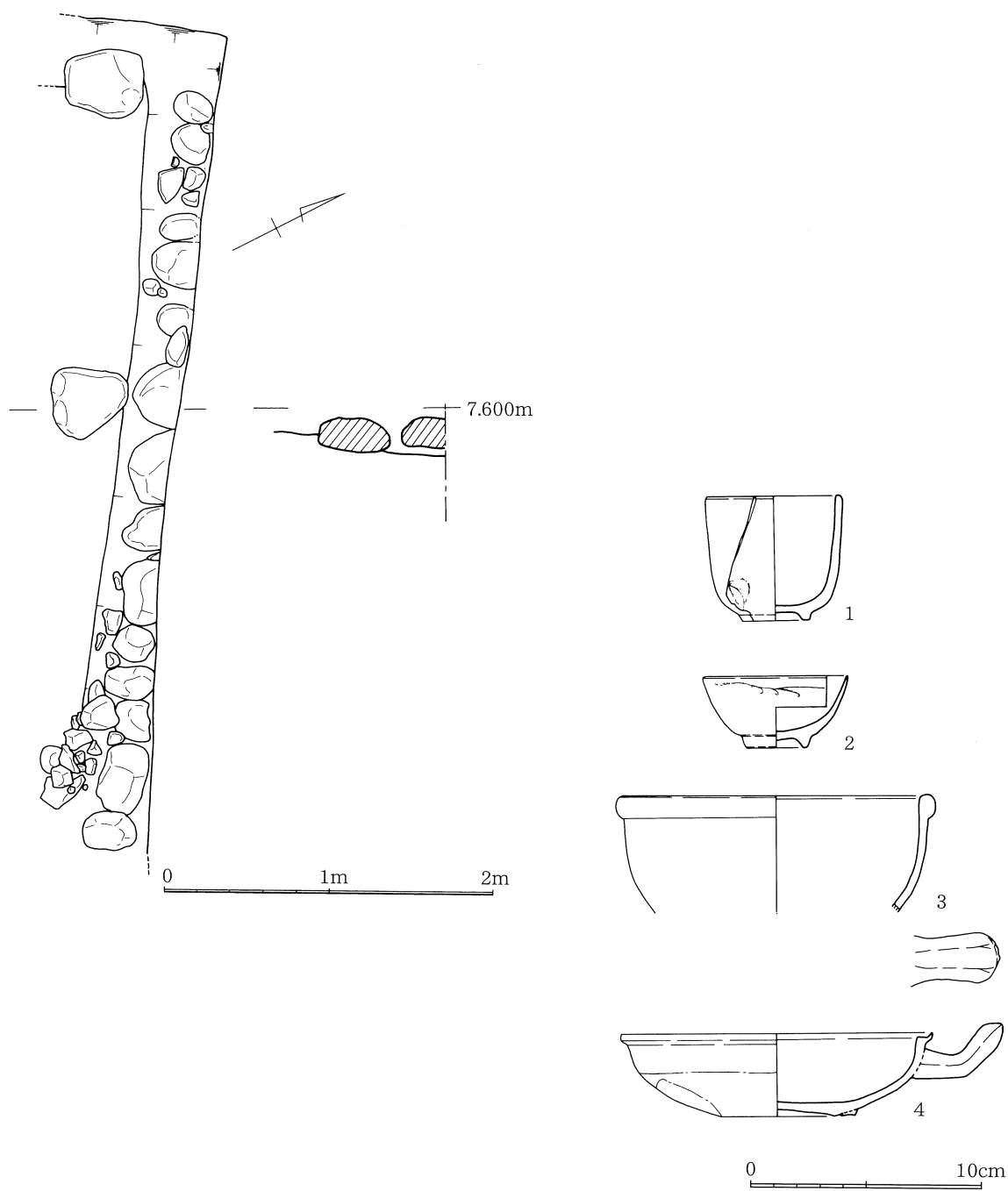


第97図 12区 SX2出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	—	—	(10.4)	肥前	S X 2	17世紀後半	
2	陶器	(10.6)	6.9	4.8	肥前	S X 2	18世紀前半	陶胎染付
3	磁器	(9.2)	—	—	京都・信楽	S X 2	18世紀	碗
4	陶器	(9.4)	6.0	5.2	肥前	S X 2	17世紀後半～18世紀初	京焼風陶器 「清水」の刻印

◆石列 (第98図)

調査区北端 (現道との境) で、近世以降の道路の側溝と思われる石列を検出した。東に向かうほど壊されていて検出できない。



◇石列出土遺物（第99図）

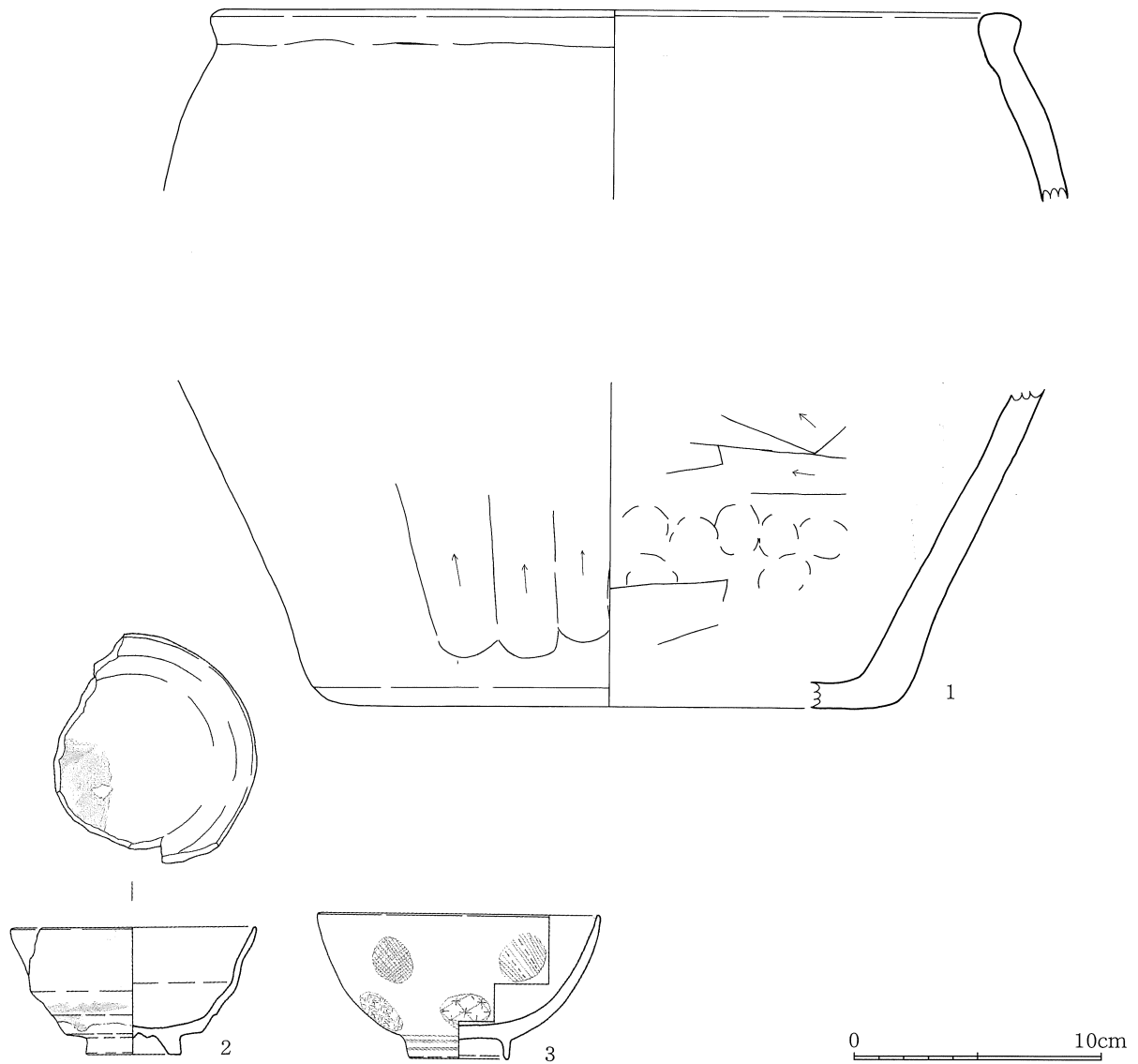
第99図 12区 石列出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(6.0)	5.6	3.0	肥前	石列	18世紀後半～19世紀前半	
2	磁器	(6.6)	3.2	2.7	肥前	石列	18世紀後半～19世紀前半	
3	陶器	(14.0)	—	—	関西系	石列中	18世紀後半	
4	陶器	(14.2)	3.8	5.2	関西系	石列	18世紀後半～19世紀	鍋

◆甕（第93図）

調査区ほぼ中央で検出。表土剥ぎ時点ですでに露出していた。甕内部からも遺物が見つかり、甕に納入したものを埋めたものとも思われるが、掘り方は検出できなかった。

◇甕出土遺物 (第100図)

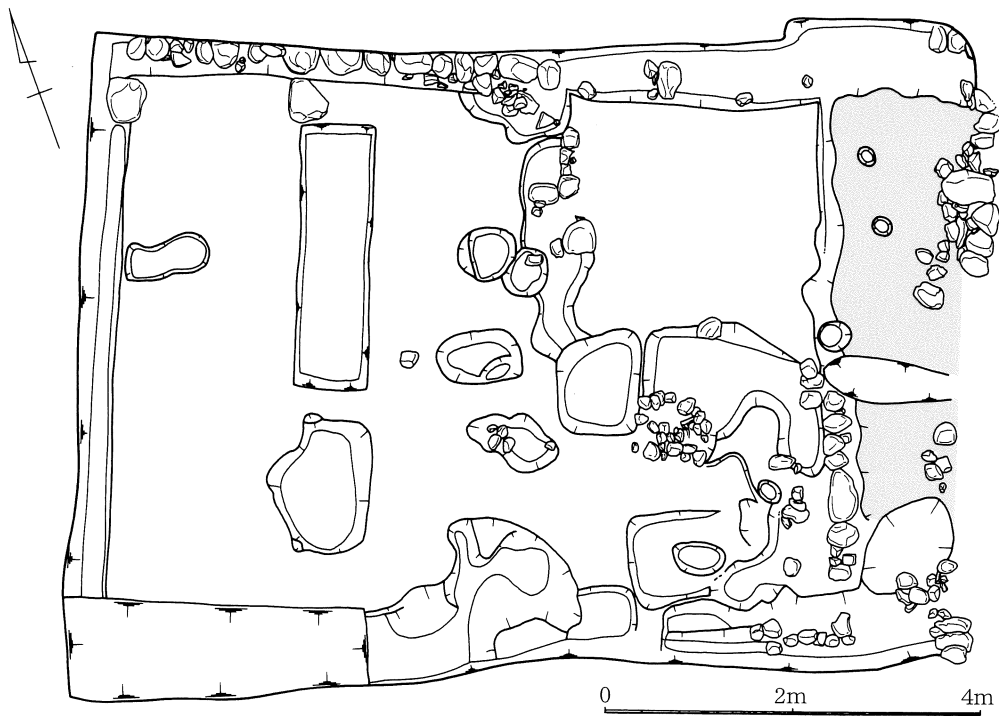


第100図 12区 甕出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(34.4)	—	(22.0)	在地	遺構検出	19世紀	甕
2	陶器	(10.4)	5.4	4.0	萩	甕内部	19世紀前半	藁灰釉
3	磁器	11.8	6.1	4.2	肥前	甕周辺	18世紀後半	ほぼ完形

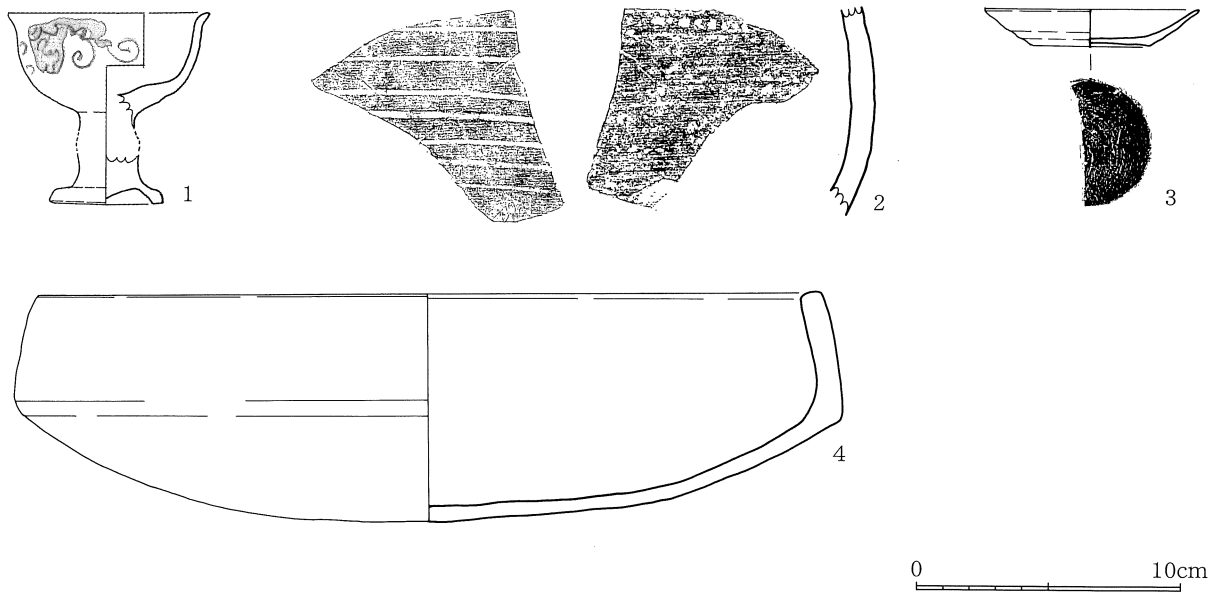
◆焼土（第101図）

調査区東で焼土を検出した。深さは5cm前後である。



第101図 12区 焼土範囲

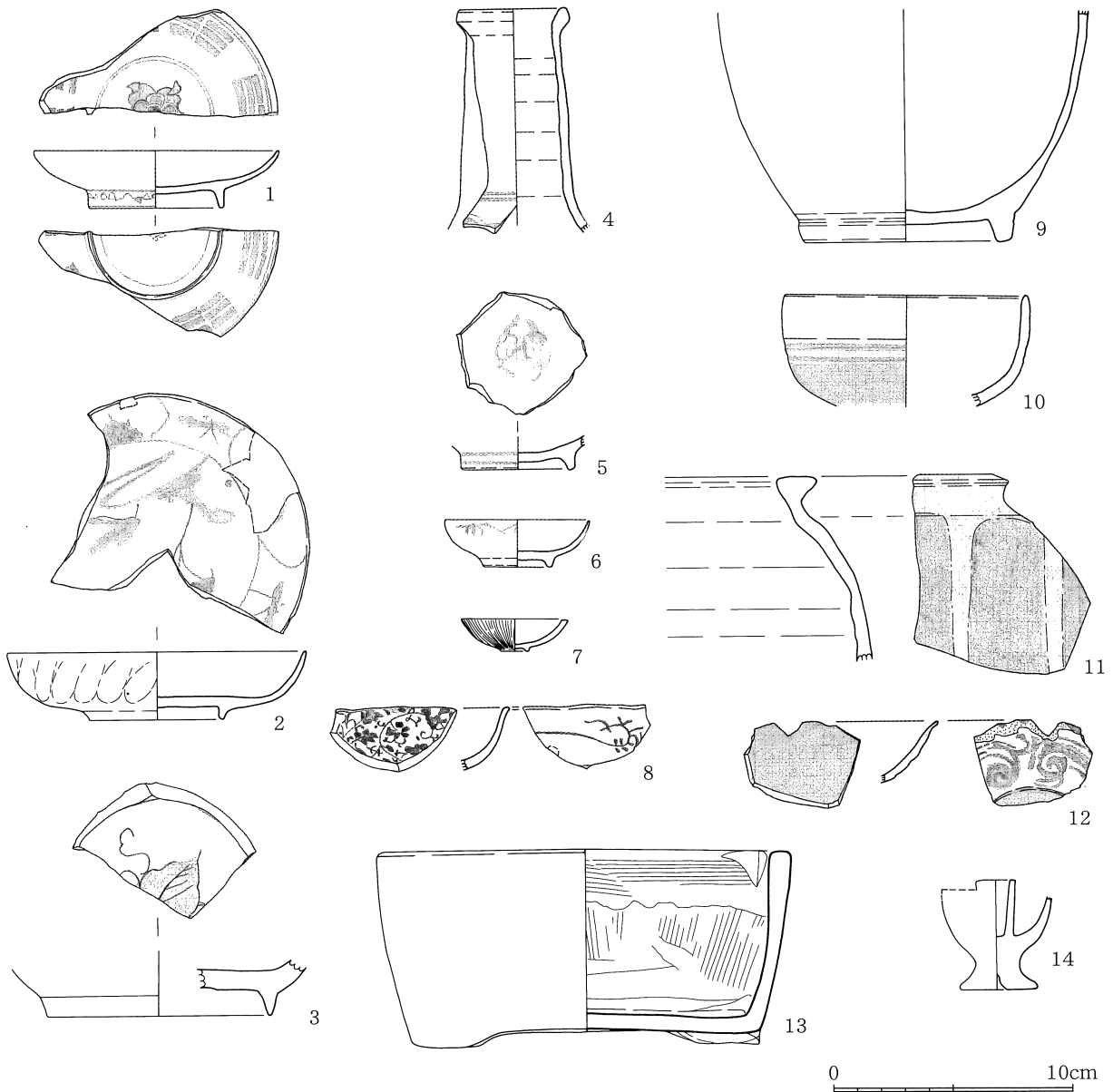
◇出土遺物（第102図）



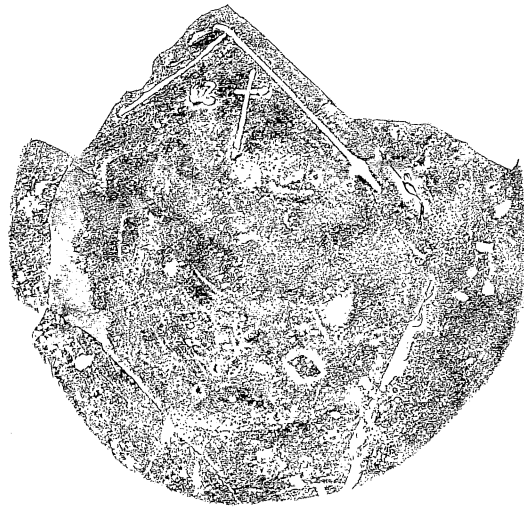
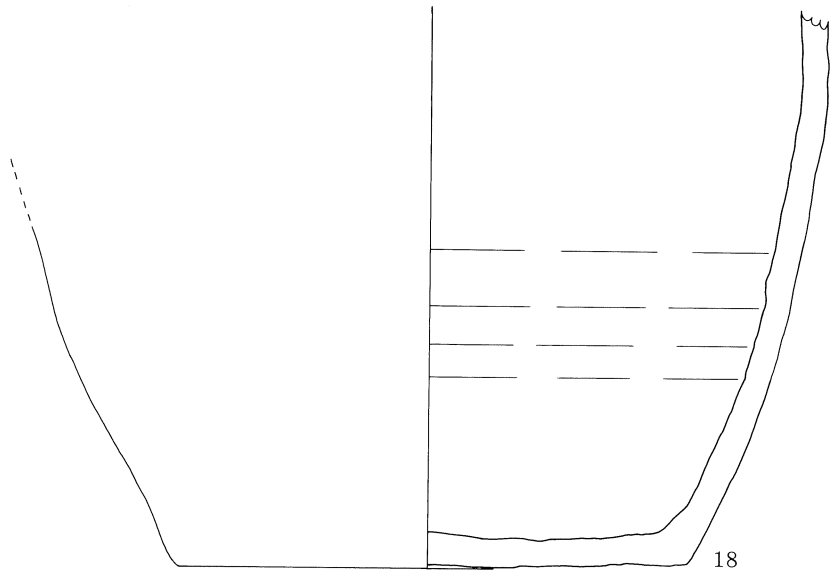
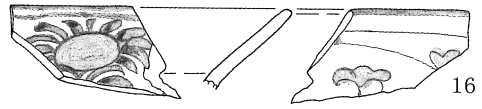
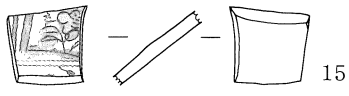
第102図 12区 焼土出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(8.0)	—	—	肥前	焼土	18世紀	仏飯器
2	陶器	—	—	—	肥前	焼土	?	遺構検出遺物と接合
3	土器	(8.4)	4.8	1.9	在地	焼土	?	ろくろ形成
4	土器	31.1	9.0	—	在地	焼土	18世紀前半	焙烙鍋

◆その他の遺物 (第103図)



第103-1図 12区 その他の遺物



0 10cm

第103-2図 12区 その他の遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(10.8)	2.5	5.8	肥前	北壁	18世紀後半	
2	磁器	(13.2)	3.0	6.0	肥前	表土剥ぎ	1630~1650年	
3	磁器	(9.8)	—	—	肥前	一括	18世紀後半	蛇の目高台
4	磁器	(4.6)	—	—	肥前	北壁	18世紀後半	
5	磁器	—	—	4.6	肥前	一括	18世紀	
6	磁器	6.4	2.1	3.0	肥前	表土剥ぎ	18世紀後半~19世紀前半	
7	磁器	4.6	1.9	1.2	肥前	表土剥ぎ	18世紀後半~19世紀	白磁 紅皿
8	陶器	—	—	—	?	表土剥ぎ	?	口縁部破片
9	陶器	—	—	9.0	肥前	表土剥ぎ	18世紀後半	
10	陶器	(10.6)	—	—	瀬戸美濃	表土剥ぎ	18世紀後半~19世紀前半	せんじ碗
11	陶器	—	—	—	肥前	一括	18世紀	壺? 口縁部
12	陶器	—	—	—	肥前	一括	18世紀前半	口縁部破片
13	瓦質	17.8	8.5	15.3	在地	表土剥ぎ	18世紀~19世紀	
14	陶器	—	4.8	3.4	関西系	表土剥ぎ	19世紀	灯火具
15	磁器	—	—	—		表土剥ぎ	17世紀末~18世紀前半	同一
16	磁器	—	—	—		表土剥ぎ	17世紀末~18世紀前半	染付芙蓉手花中文皿
17	陶器	(37.6)	—	—	備前	石の下	16世紀末~17世紀初	水屋甕
18	陶器	—	—	20.6	備前	遺構検出	16世紀末~17世紀初	水屋甕

### 13. 13区の調査

#### <概要>

12区と飴屋の坂の間である。本調査区は、以前鉄筋コンクリートの建物が建っており、遺構は壊されていると想定して、立会い調査を行った。

1mほど表土剥ぎを行ったが、建物の基礎がそのまま残っており、遺構の破壊が激しかった。3カ所を重機で掘り下げたが、全箇所において遺構は確認できず、また建物の基礎や鉄筋が地中に残っていた。

遺物は数点出土したが、どれも近代の新しい遺物で、遺構は完全に破壊されていると判断して、本調査は実施しなかった。

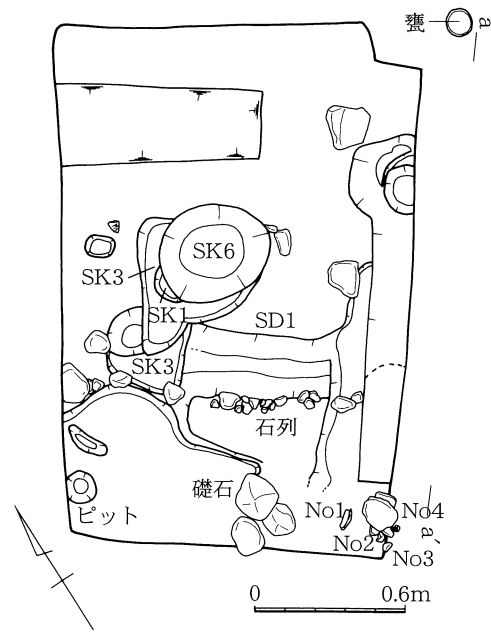


12区 完掘状況（北から）

## 1 4. 14区の遺構・遺物

### <概要>

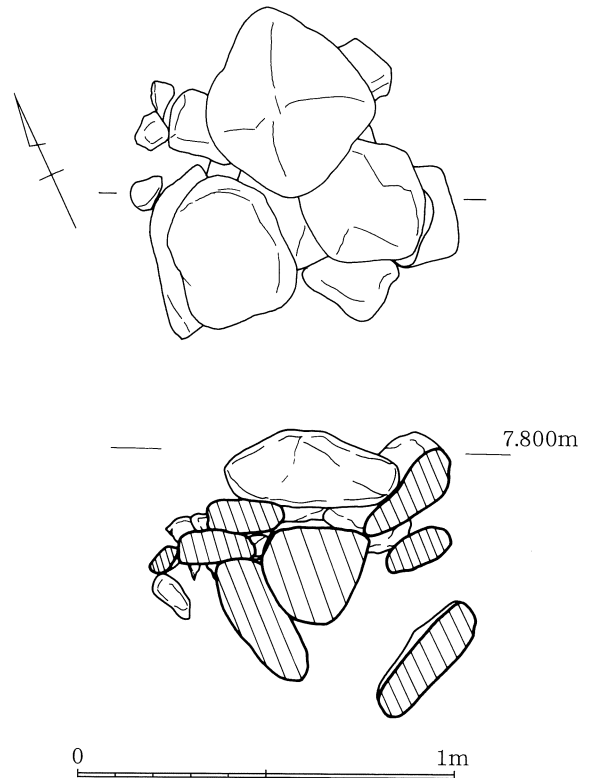
11区の西隣となる長さ5m、幅3.5mの調査区である。地表下60cm以下で総数7基の遺構（土坑5基、礎石1基、ピット1基）、さらに焼土2面を確認した（第104図）。



第104図 14区 平面図

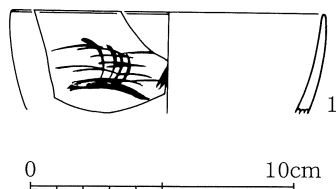
### ◆礎石（第105図）

調査区南端で、表土剥ぎの早い段階で検出した。礎石は河原石を用いており、3段にわたって石が積みまれていた。他の遺構と比べるとレベルが50～70cmほど高い。



第105図 14区 礎石平断面図

### ◇出土遺物（第106図）



第106図 14区 礎石出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(12.4)	—	—	肥前	礎石中層	18世紀後半	

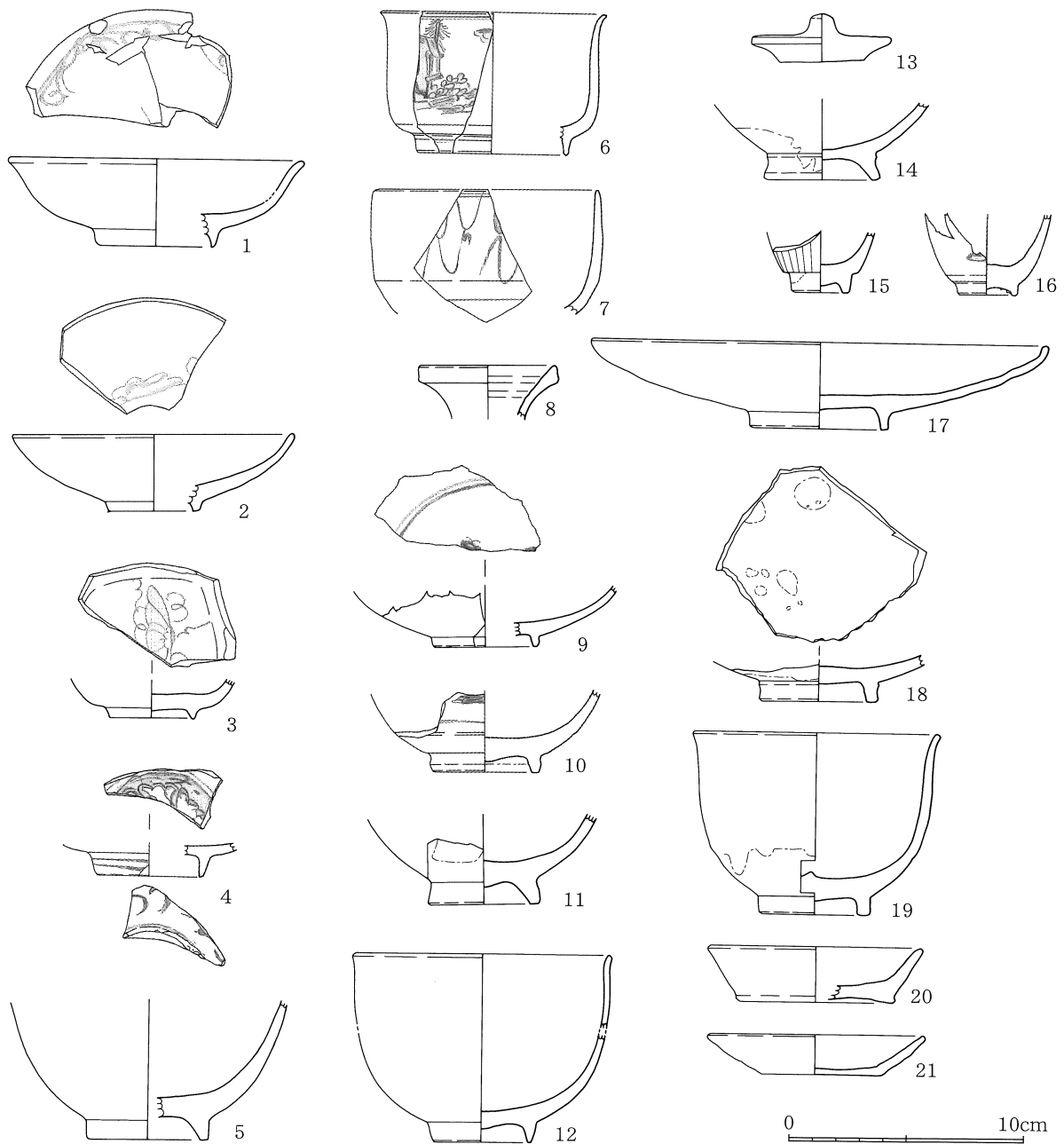




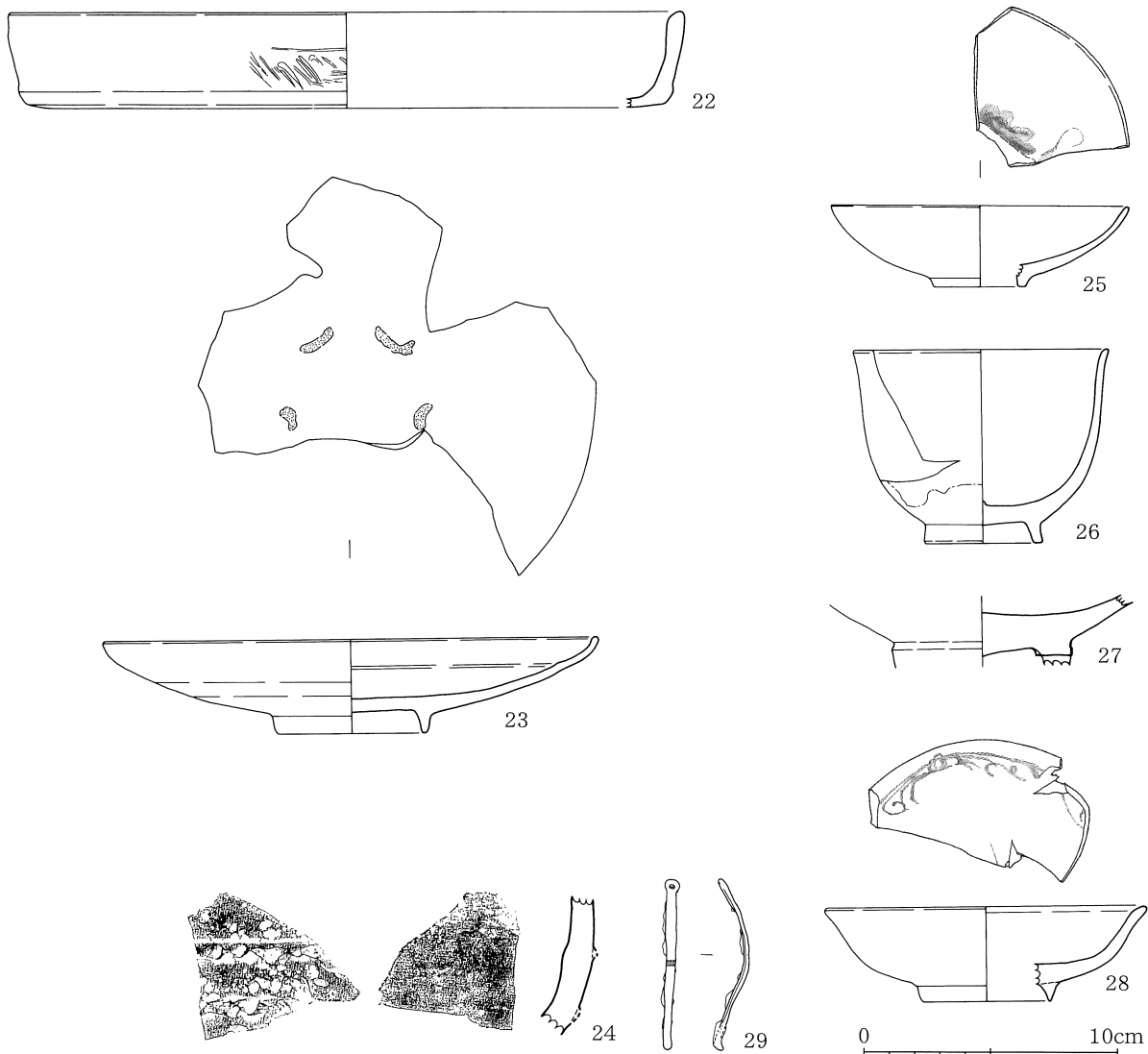
<第一焼土出土遺物>

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	—	—	(8.55)	肥前	焼土 1	18世紀前半	
2	磁器	5.4	3.15	3.15	肥前	焼土 1	17世紀～18世紀	白磁
3	磁器	—	—	—	肥前	焼土 1	18世紀後半	青磁染付 筒形碗 口縁部破片
4	陶器	1.2	—	—	関西系	焼土 1	18世紀～19世紀	
5	磁器	—	—	2.0	肥前	焼土 1	1630～1650年	白磁人形 (灯心押さえ人形)
6	陶器	—	—	—	堺	焼土 1	18世紀後半～19世紀	播鉢口縁部破片
7	磁器	2.0	—	—	肥前	焼土 1	18世紀後半	色絵 油壺

<第二焼土層／焼土 1～2 間出土遺物>



第108-2図 焼土2／焼土1～2間出土遺物



第108-3図 焼土2/焼土1~2間出土遺物

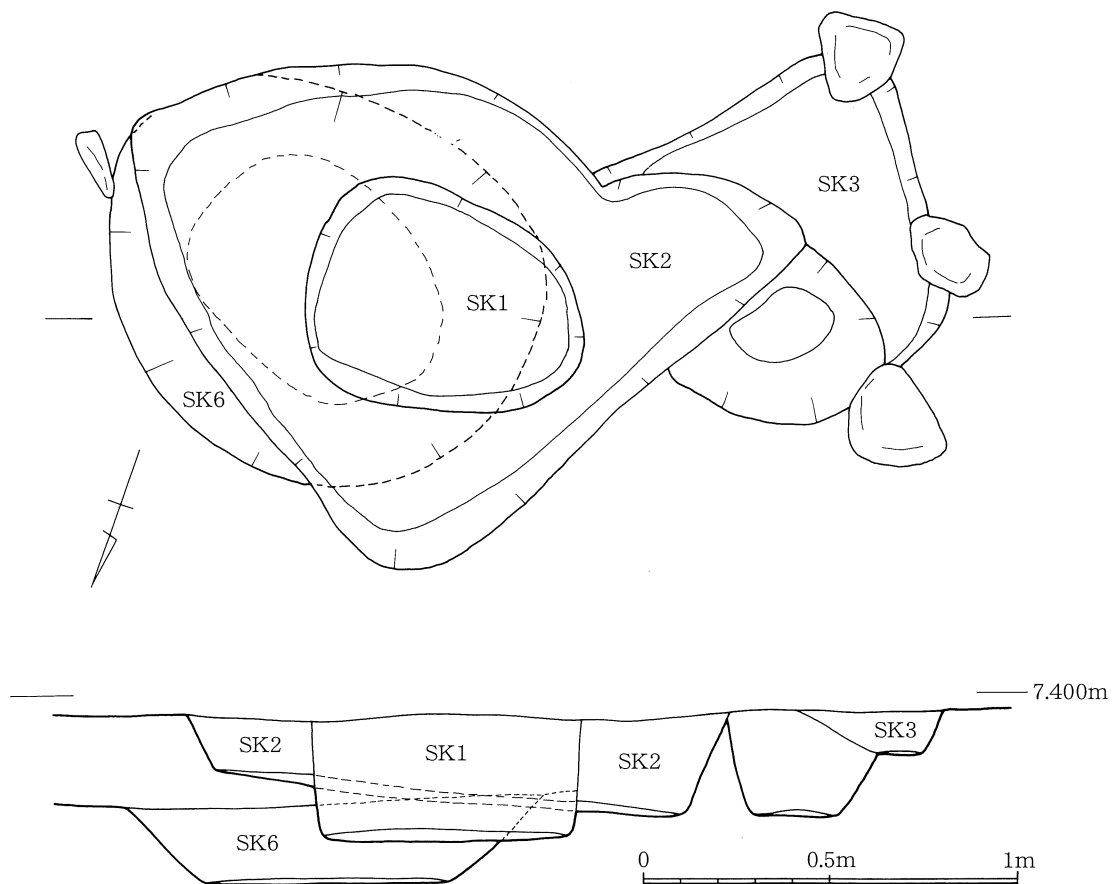
<第2焼土/焼土1~2間出土遺物>

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(13.05)	3.9	(4.5)	肥前	焼土2	1630~1650年	
2	磁器	(12.9)	3.4	(3.8)	肥前	焼土2	17世紀~18世紀	
3	磁器	—	—	3.7	肥前	焼土2	18世紀後半	皿
4	磁器	—	—	(4.1)	肥前	焼土2	18世紀	色絵
5	陶器	—	—	(5.4)	肥前	焼土2	18世紀前半	刷毛目
6	磁器	(9.9)	6.3	(6.5)	肥前	焼土1-2	17世紀前半	
7	磁器	(9.9)	—	—	肥前	焼土1-2	1640~1660年	
8	陶器	6.0	—	—	関西系	焼土1-2	18世紀	S K 2 (No4) と同一
9	磁器	—	—	(4.5)	肥前	焼土1-2	1630~1650年	
10	磁器	—	—	(4.6)	関西系	焼土1-2	1630~1650年	
11	陶器	—	—	(4.9)	肥前	焼土1-2	17世紀後半	
12	陶器	10.2	—	(4.3)	肥前	焼土1-2	17世紀後半	
13	陶器	6.1	2.1	3.7	関西系	焼土2	18世紀後半~19世紀	
14	磁器	—	—	4.7	肥前	焼土1-2	?	白磁
15	磁器	—	—	(2.4)	肥前	焼土1-2	1630~1650年	小杯
16	磁器	—	—	2.5	肥前	焼土1-2	1630~1650年	

17	陶器	20.4	3.85	5.8	肥前	焼土1-2	1600~1630年	内野山窯 砂目
18	陶器	—	—	(5.1)	?	焼土1-2	?	
19	陶器	10.3	8.1	4.6	肥前	焼土1-2	17世紀後半	
20	土器	(9.4)	2.5	(6.7)	在地	焼土1-2	?	
21	土器	9.0	1.25	5.4	在地	焼土1-2		
22	陶器	(27.8)	3.9	(25.8)	在地	焼土1-2	17世紀後半	焙烙
23	磁器	(20.6)	3.9	6.2	肥前	焼土1-2	1600~1630年	内野山窯
24	陶器	—	—	—	?	焼土1-2	?	SK2と同一
25	磁器	(12.4)	3.3	3.8	肥前	焼土1-2	1630~1650年	皿
26	陶器	(10.6)	8.0	4.8	肥前	焼土1-2	17世紀後半	
27	陶器	—	—	—	肥前	焼土1-2	17世紀	高台に3つのくぼみあり
28	磁器	(13.4)	(3.9)	(5.3)	肥前	焼土1-2	1630~1650年	皿
29	銅製品	—	—	—	—	焼土1-2	—	錠前

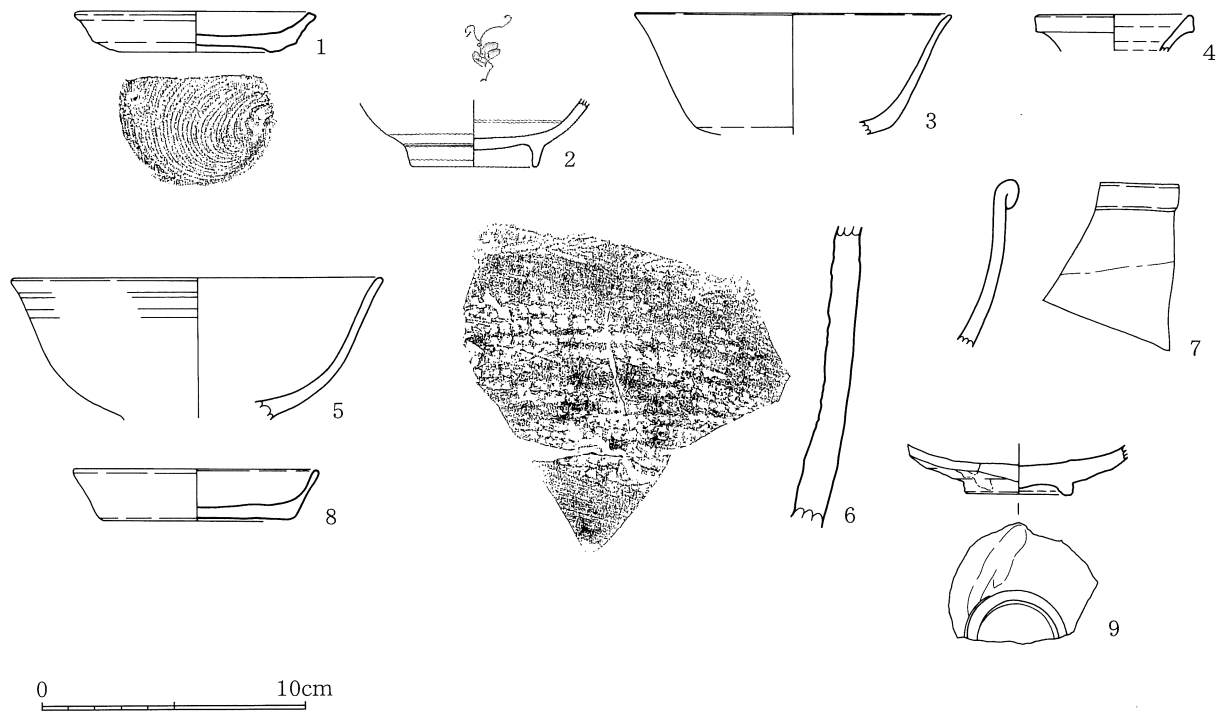
◆SK1・SK2・SK3・SK6（土坑）（第109図）

SK1は第二焼土に伴う焼土坑である。SK1を囲むようにSK2があり、SK3はSK2に切られている。また、SK1とSK2に切られる形でSK6があり、いずれも深さはあまりないが、この2m四方の中に4つの土坑が重複しあって展開している。



第109図 14区 SK1・2・3・6平面断面図

◇SK1・SK2・SK3・SK6出土遺物（第110図）

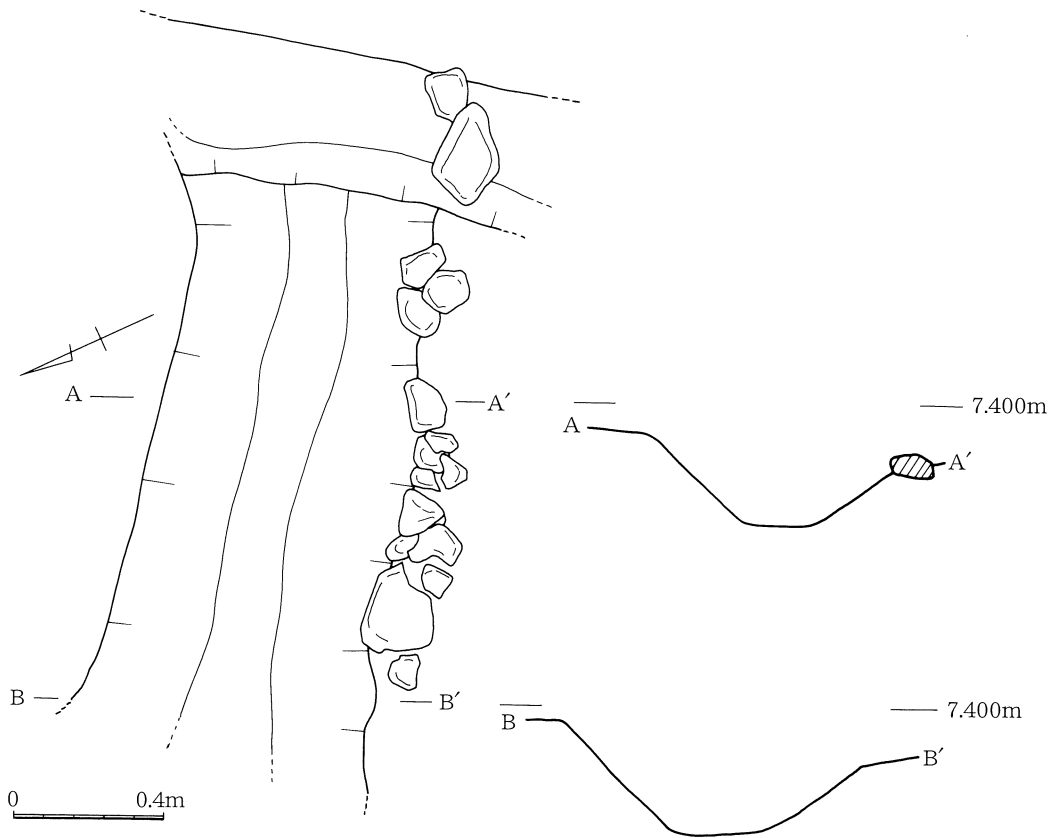


第110図 14区 SK1・2・3・6出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	土器	9.0	1.6	6.0	在地	SK1	?	
2	磁器	—	—	4.9	肥前	SK2	18世紀後半	
3	磁器	12.5	—	—	肥前	SK2	?	青磁
4	陶器	6.0	—	—	関西系	SK2	18世紀	焼土1-2 (No.9) と同一
5	陶器	(14.4)	—	—	肥前	SK2	17世紀後半	
6	陶器	—	—	—	肥前	SK2	17世紀~18世紀	
7	陶器	—	—	—	関西系	SK6	18世紀後半~19世紀	鉢の口縁部破片
8	土器	9.6	2.0	7.3	在地	SK6	?	
9	陶器	—	—	4.2	肥前	SK6	1600~1630年	砂目

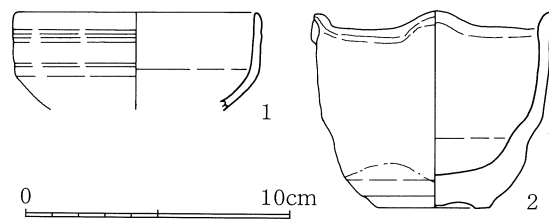
◆石列周辺（第111図）

トレンチ内のSK 5からSK 3までの東西方向で確認。SD 1に伴うものであると思われる。西ではSK 3に壊されている。



第111図 14区 石列平断面図

◇石列周辺出土遺物（第112図）



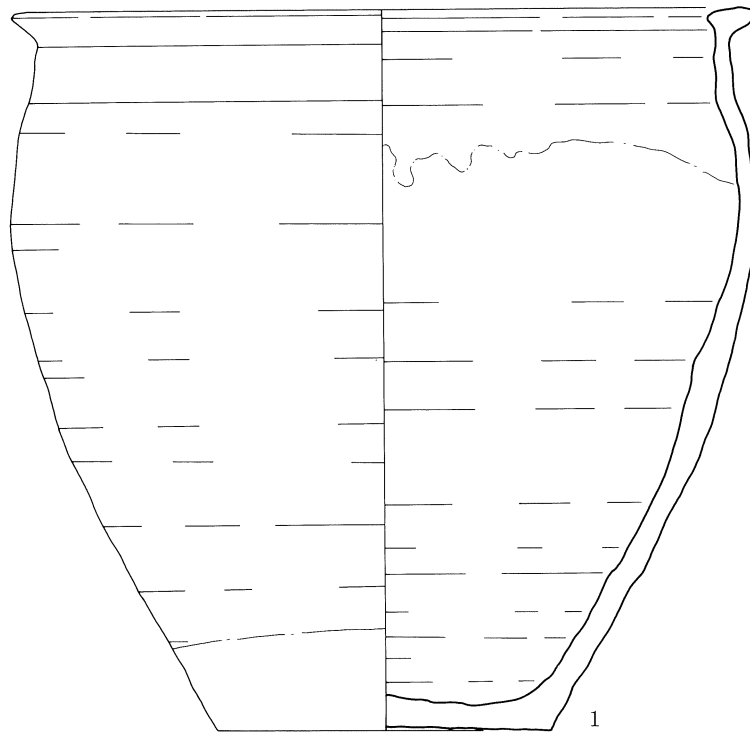
第112図 14区 石列出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(9.4)	—	—	関西系	石列周辺	18世紀後半	
2	陶器	9.1	7.8	4.5	肥前	石列（溝）	1590～1610年	

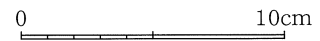
◆甕 (第104図)

北東の隅で甕を検出。ほぼ完形であるが、内部からの出土遺物はない。

◇甕 (第113図)

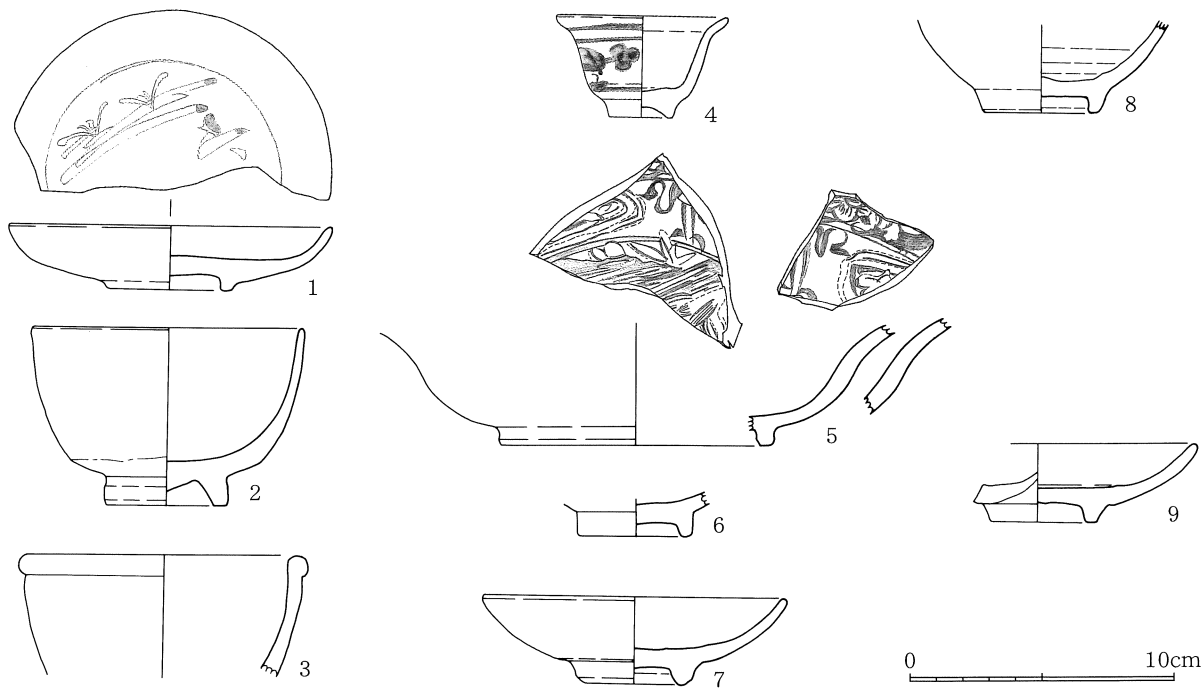


第113図 14区 甕

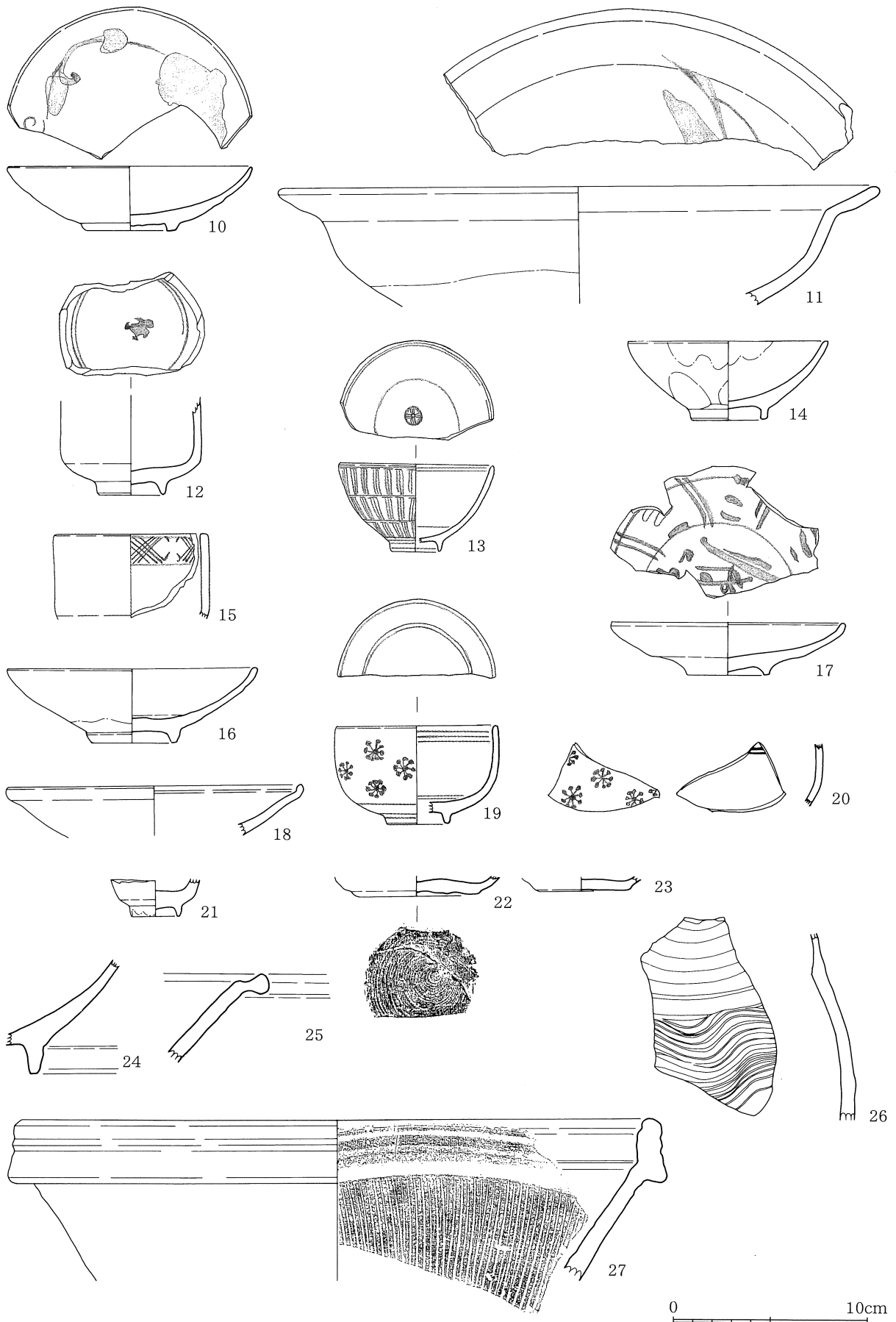


No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	30.0	28.4	13.4	関西系	遺構検出	18世紀後半~19世紀	甕

◇その他の遺物 (第114図)

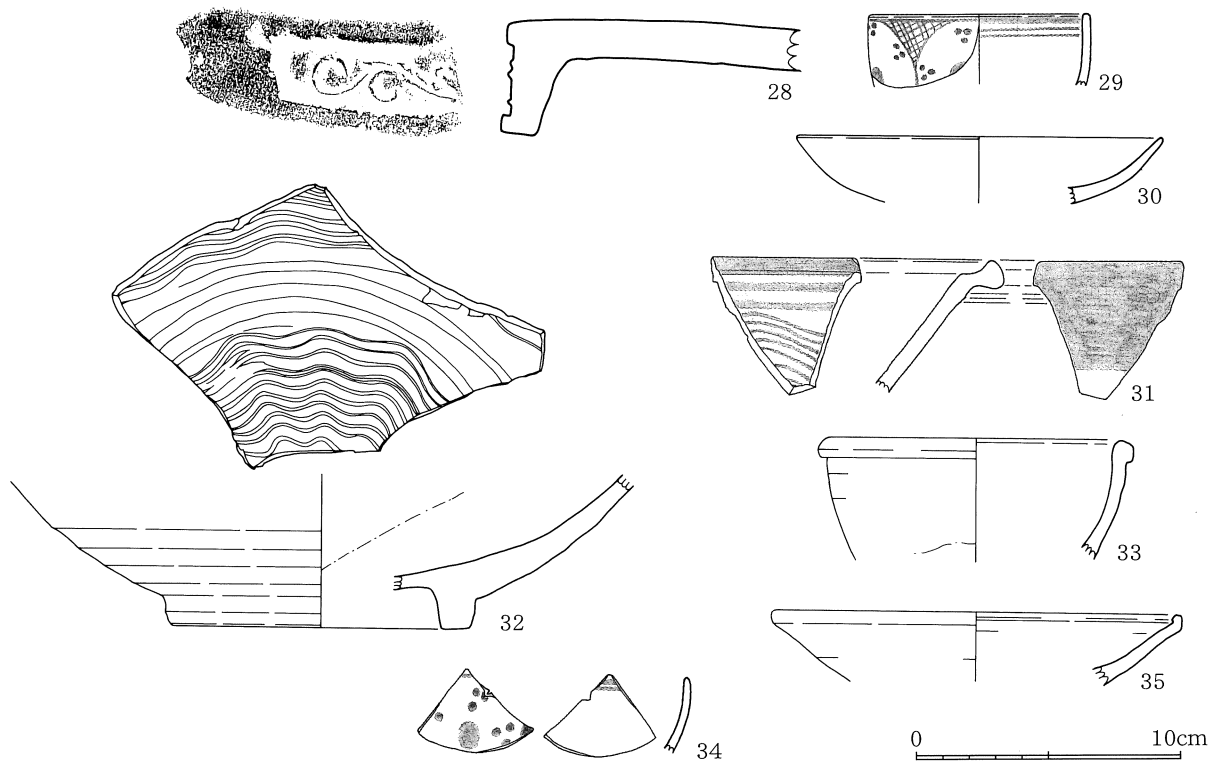


第114-1図 14区 その他の遺物



第114-2図 14区 その他の遺物





第114-3図 14区 その他の遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	12.8	2.6	4.7	肥前	No. 3	1630~1650年	
2	陶器	10.6	7.0	4.65	肥前	S K 4	17世紀後半~18世紀前半	鉄釉碗
3	陶器	(10.7)	—	—	関西系	S K 4	?	鉢
4	磁器	6.7	4.0	2.5	中国	S K 5	17世紀	
5	磁器	—	—	(10.6)	中国	S K 4	16世紀末~17世紀前半	呉須赤絵
6	磁器	—	—	4.4	肥前	No. 4	18世紀後半	青磁
7	磁器	11.9	3.4	3.9	肥前	表採	18世紀後半	皿
8	磁器	—	—	4.6	肥前	表採	18世紀後半~19世紀	瓶
9	磁器	(12.6)	3.1	4.3	肥前	表土剥ぎ	18世紀後半	
10	磁器	(13.2)	3.45	4.5	肥前	No. 2	1630~1650年	
11	陶器	(32.0)	—	—	肥前	No. 1	18世紀	
12	磁器	—	—	3.5	肥前	表採	18世紀後半	青磁染付 筒形碗
13	磁器	8.2	4.6	2.1	肥前	表採	18世紀後半	暦紋
14	磁器	10.2	4.25	3.85	?	表採	大正~昭和	
15	磁器	(7.9)	—	—	肥前	表採	18世紀後半	青磁染付 筒形碗
16	磁器	12.5	2.8	4.4	肥前	表採	1630~1650年	

17	陶器	13.5	4.0	4.6	肥前	表採	1690～1740年	内野山窯
18	陶器	(15.9)	—	—	関西系	表採	?	鉢
19	磁器	8.6	5.2	3.2	肥前	表採	18世紀後半	No.20と同一
20	磁器	—	—	—	肥前	表採	18世紀後半	No.19と同一
21	磁器	—	—	2.5	肥前	表採	17世紀～18世紀	
22	土器	—	—	6.6	在地	一括	?	
23	土器	—	—	4.4	在地	一括	?	
24	陶器	—	—	—	肥前	表採	17世紀末～18世紀前半	
25	陶器	—	—	—	肥前	表採	18世紀前半	口縁部破片
26	陶器	—	—	—	肥前	表採	17世紀後半～18世紀前半	刷毛目徳利
27	陶器	(34.0)	—	—	堺・明石	一括	17世紀～18世紀	播鉢口縁部
28	軒平瓦	—	—	—	在地		18世紀後半	瓦
29	磁器	(8.4)	—	—	肥前	表採	18世紀後半	No.34と同一
30	磁器	(14.5)	—	—	肥前	表採	17世紀～18世紀	
31	陶器	—	—	—	肥前	表採	18世紀前半	鉢?
32	磁器	—	—	(11.9)	肥前	表採	17世紀後半～18世紀前半	刷毛目 鉢
33	陶器	(12.6)	—	—	関西系	S K 4	18世紀～19世紀	碗
34	磁器	—	—	—	肥前	表採	18世紀後半	No.29と同一
35	陶器	(16.4)	—	—	関西系	表採	18世紀～19世紀	鉢



14区 礎石検出状況（南から）

## 15. 15区の遺構・遺物

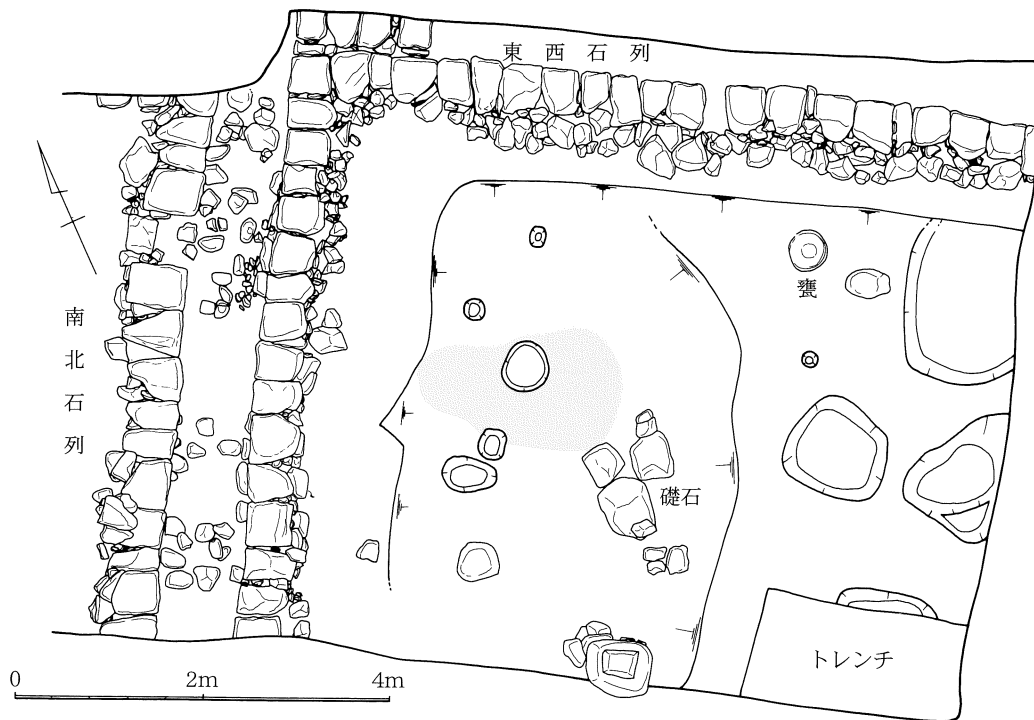
### <概要>

14区の西隣で、町屋敷絵図によると『須磨屋諸兵エ』か『岡野屋』付近と思われる長さ10m、幅8mの調査区である。

地表下30cm以下で総数13基の遺構（石列3基、ピット5基、土坑4基、礎石1基）を確認した。このうち石列は3面にわたって確認した。遺構検出は2面行った。

### <<1面>>（第115図）

石列を残しながら掘り下げていくと、礎石付近に岩礫が集中する範囲があった（第115図）。



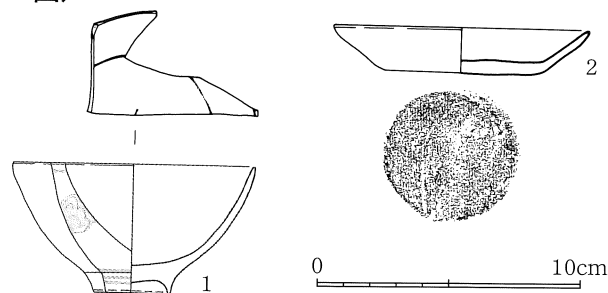
第115図 15区 第1面平面図

### ◆南北石列（第116-1・2・3図）

1面で確認した石列は、東西から南北に直角に曲がっていた。南北の石列は屋敷の区画溝と思われる。町屋敷絵図から考えると、『須磨屋諸兵エ』と『岡野屋』との境の区画溝の可能性も考えられる。

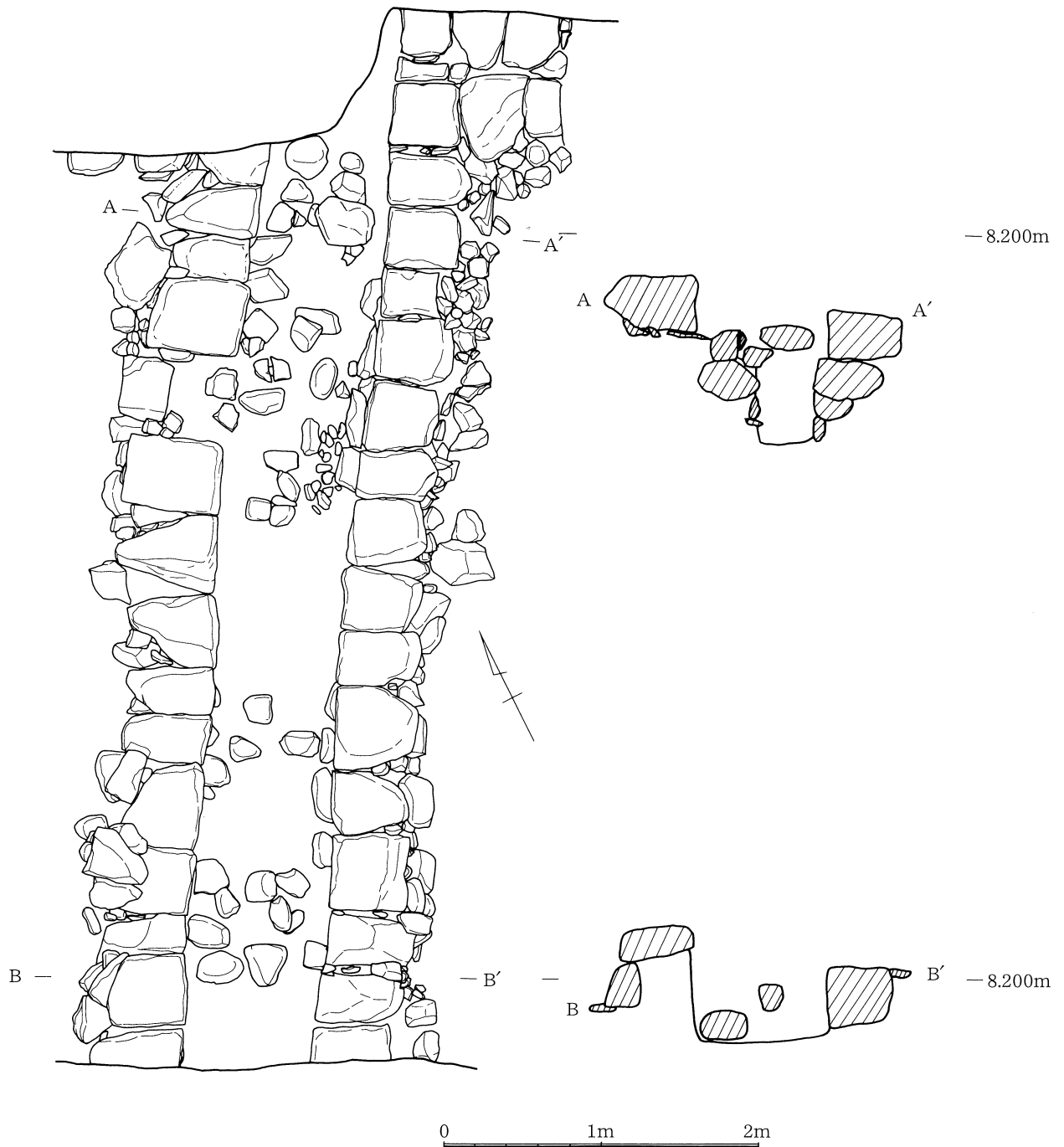
1面の石を外すと、1面の石を支えていたと思われる石列が現れ（2面の石列 第116-2図）、さらにその石列を外すと、区画溝の名残と思われる溝に伴う石列が現れた（3面の石列 第116-3図）。

### ◇南北石列出土遺物（第117図）

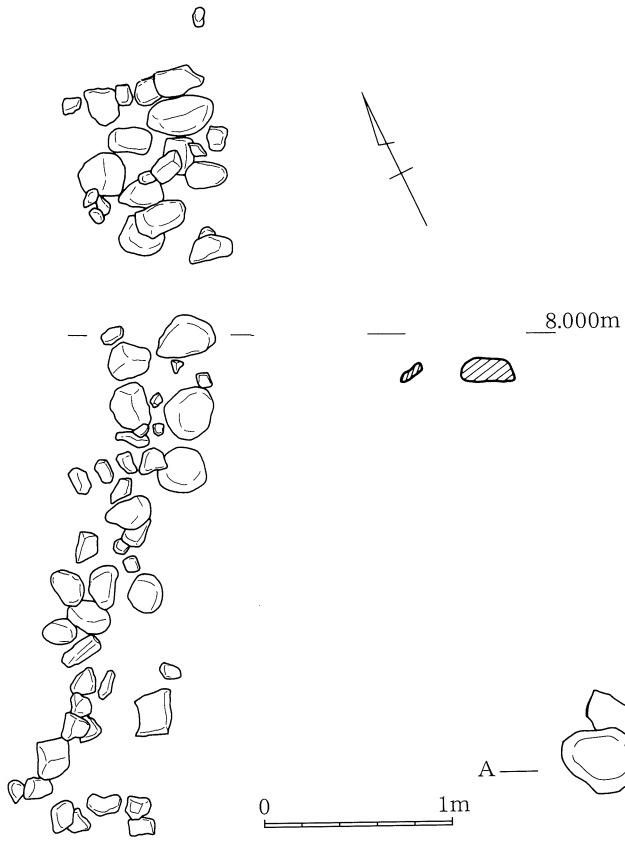


第117図 15区 南北石列出土遺物

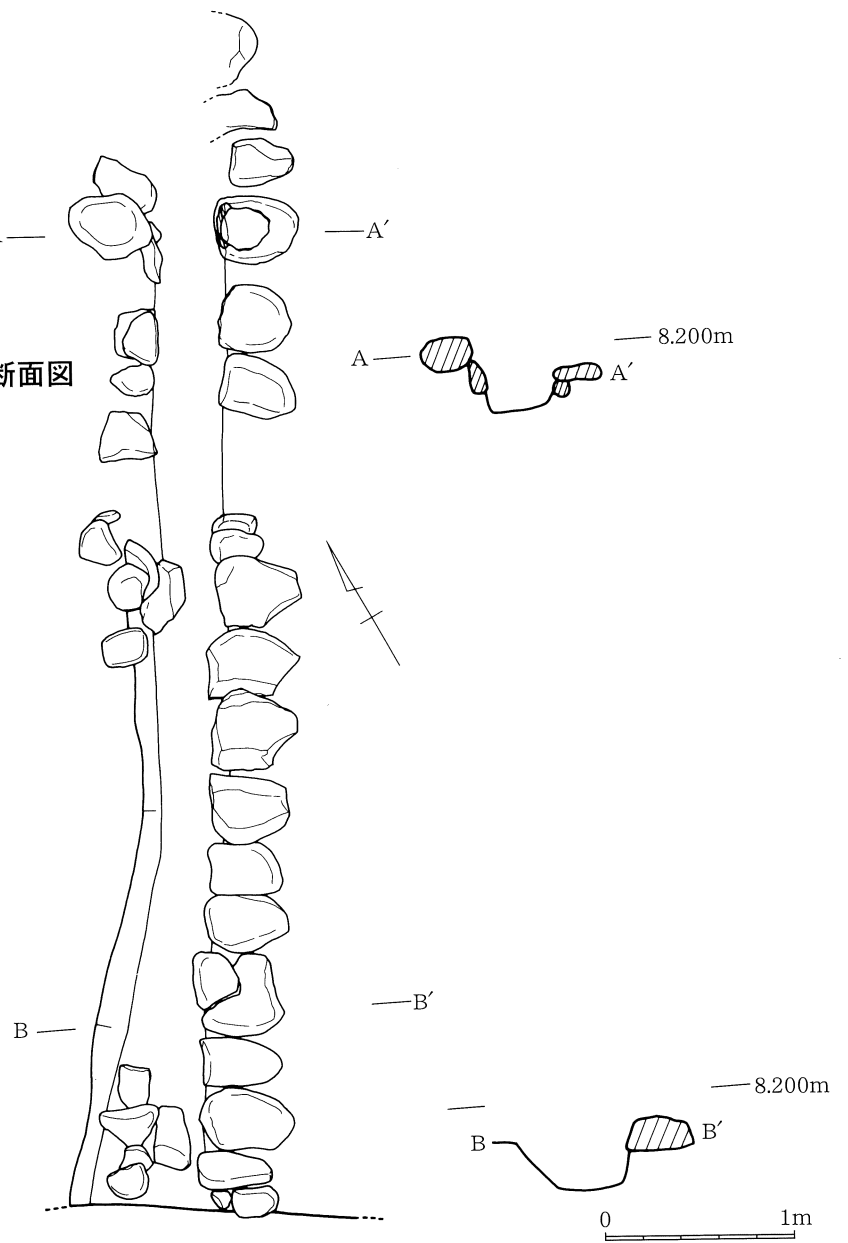
No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(9.5)	5.0	2.9	肥前	南北石列	18世紀後半	
2	土器	10.1	1.8	5.0	在地	南北石列	?	



第116-1図 15区 南北石列第1面 平断面図



第116-2图 15区 南北石列第2面 平断面图

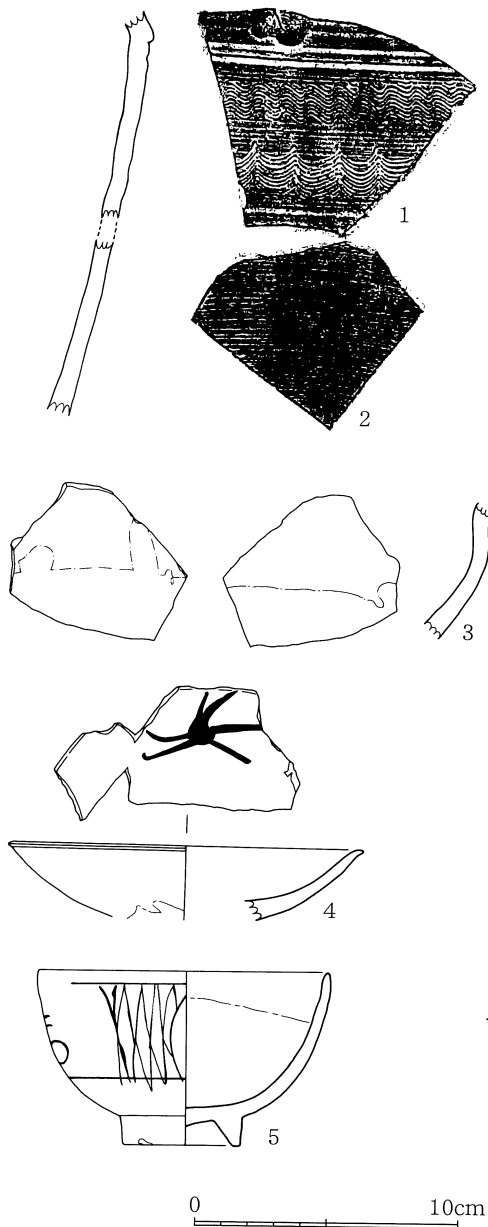


第116-3图 15区 南北石列第3面 平断面图

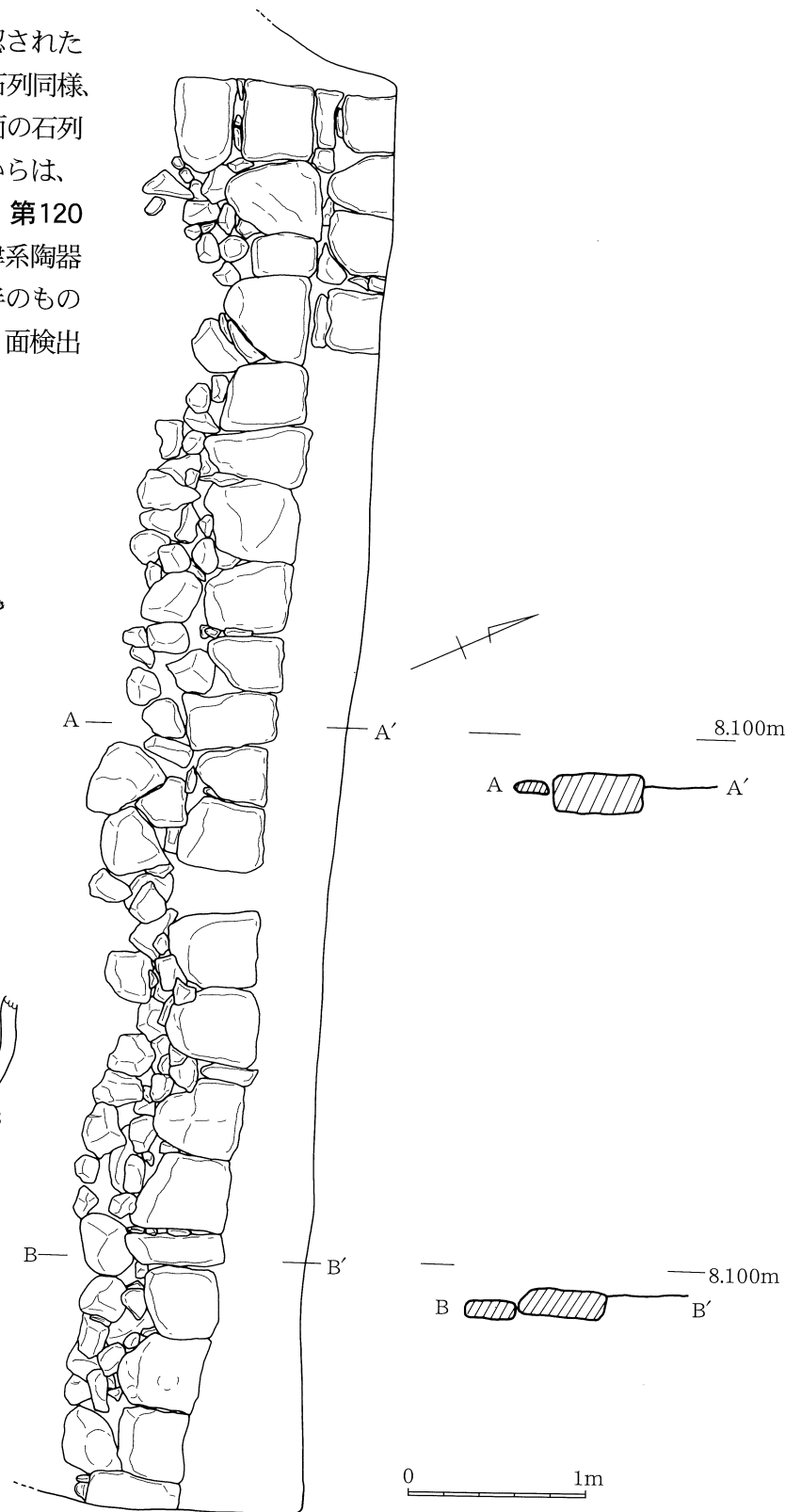
◆東西石列（第118-1・2・3図）

東西の石列は10区、14区の土層で確認された現道に伴う側溝の石列と思われる。南北石列同様、1面の石を外すと、1面を支えていた2面の石列が現れ（第120-2図）、さらにその下からは、規則性のない石を検出した（3面の石列 第120-3図）。3面の石列からは、砂目の唐津系陶器が出土しており、この区画溝は17世紀前半のものと思われる。また、焼石が多く見られ、2面検出時の第二焼土面に伴うものである。

◇東西石列出土遺物（第119図）



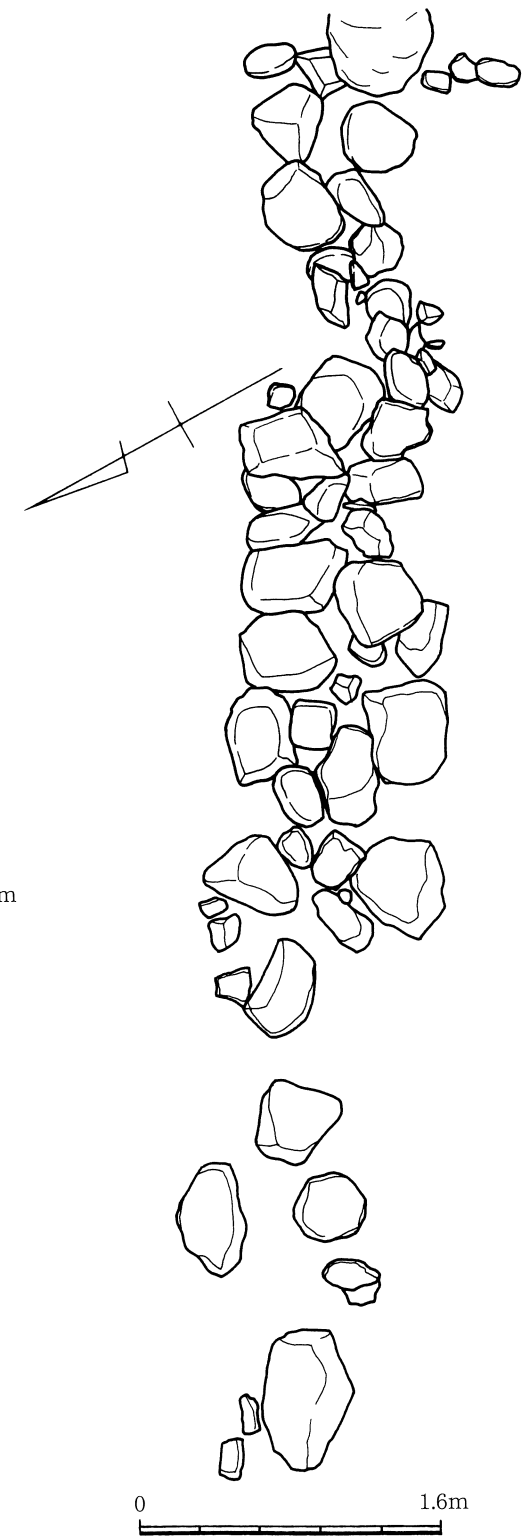
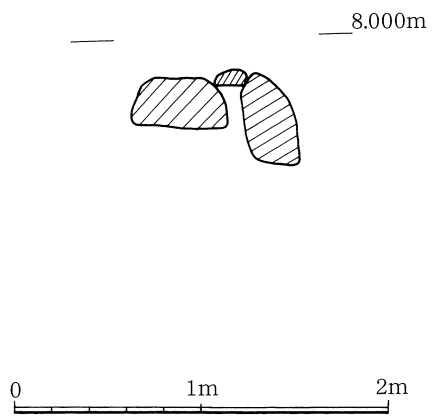
第119図 15区 東西石列出土遺物



第118-1図 15区 東西石列第1面平断面図



第118-2图 15区 東西石列第2面平面圖



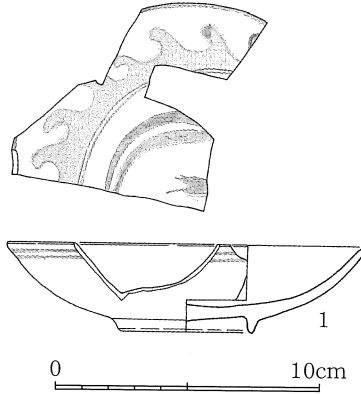
第118-3图 15区 東西石列第3面平面圖

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	—	—	—	肥前	東西石列 3 面	?	1 6 区No. 2 と同一
2	陶器	—	—	—	肥前	東西石列 3 面	?	
3	陶器	—	—	—	肥前	東西石列	?	
4	陶器	(13.6)	—	—	肥前	東西石列	17世紀前半	
5	磁器	11.4	6.9	4.6	肥前	東西石列	1630~1650年	

◆礎石 (第115図)

調査区ほぼ中央で検出した。

◇礎石出土遺物 (第120図)



第120図 礎石出土遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(14.0)	3.5	(5.15)	肥前	礎石中	17世紀後半	12区SK 1 と接合

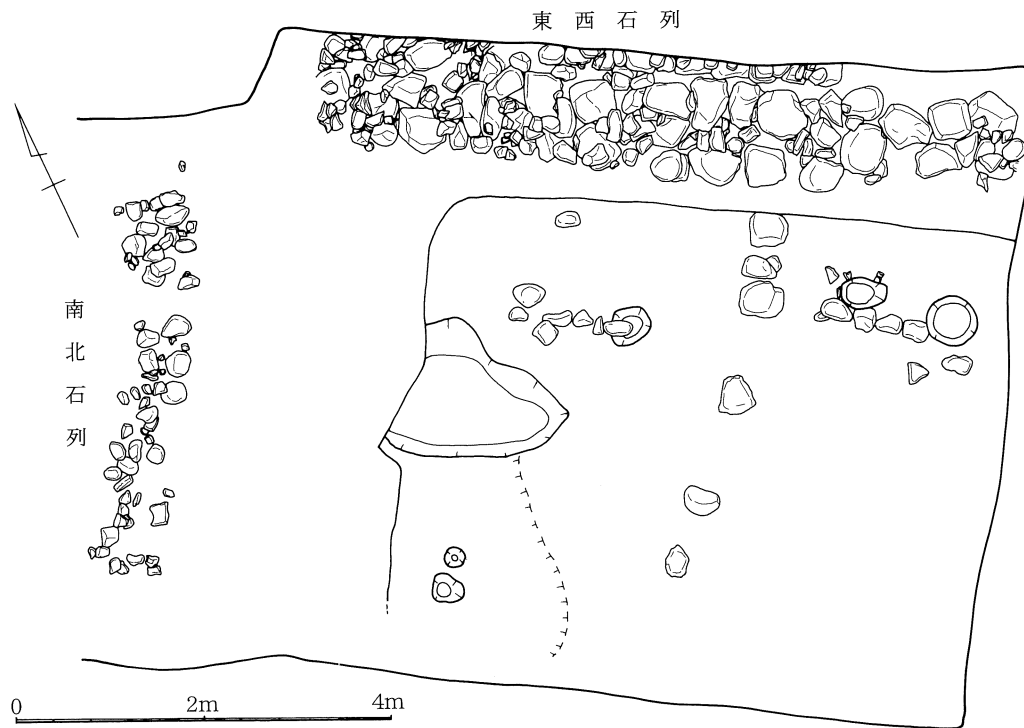


15区 遺構検出状況 (南から)



《2面》(第121図)

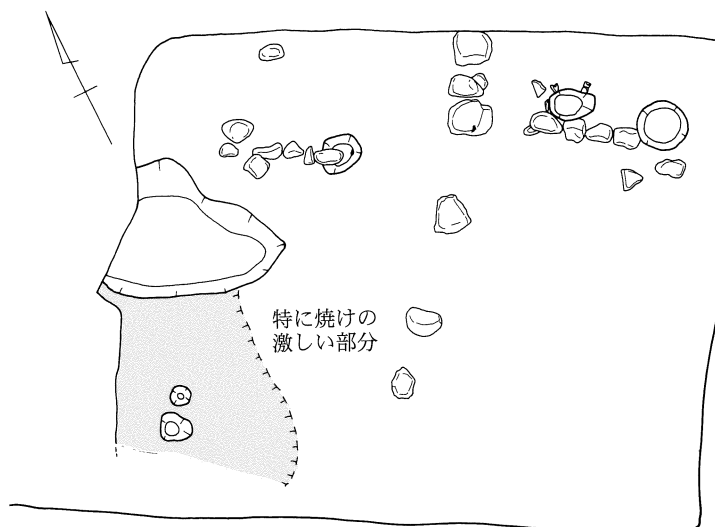
石列の1面に伴う面では遺構が確認できず、10cmほど下げてピット4基を確認した。



第121図 15区 第2面平面図

◆焼土(第122図)

石列の2面に伴う面では、焼土の広がりを検出した。特に焼け方の激しい西に向かって焼土が厚くなる。この焼土は、石列の3面にも見られ、同時期の火災のあとである。

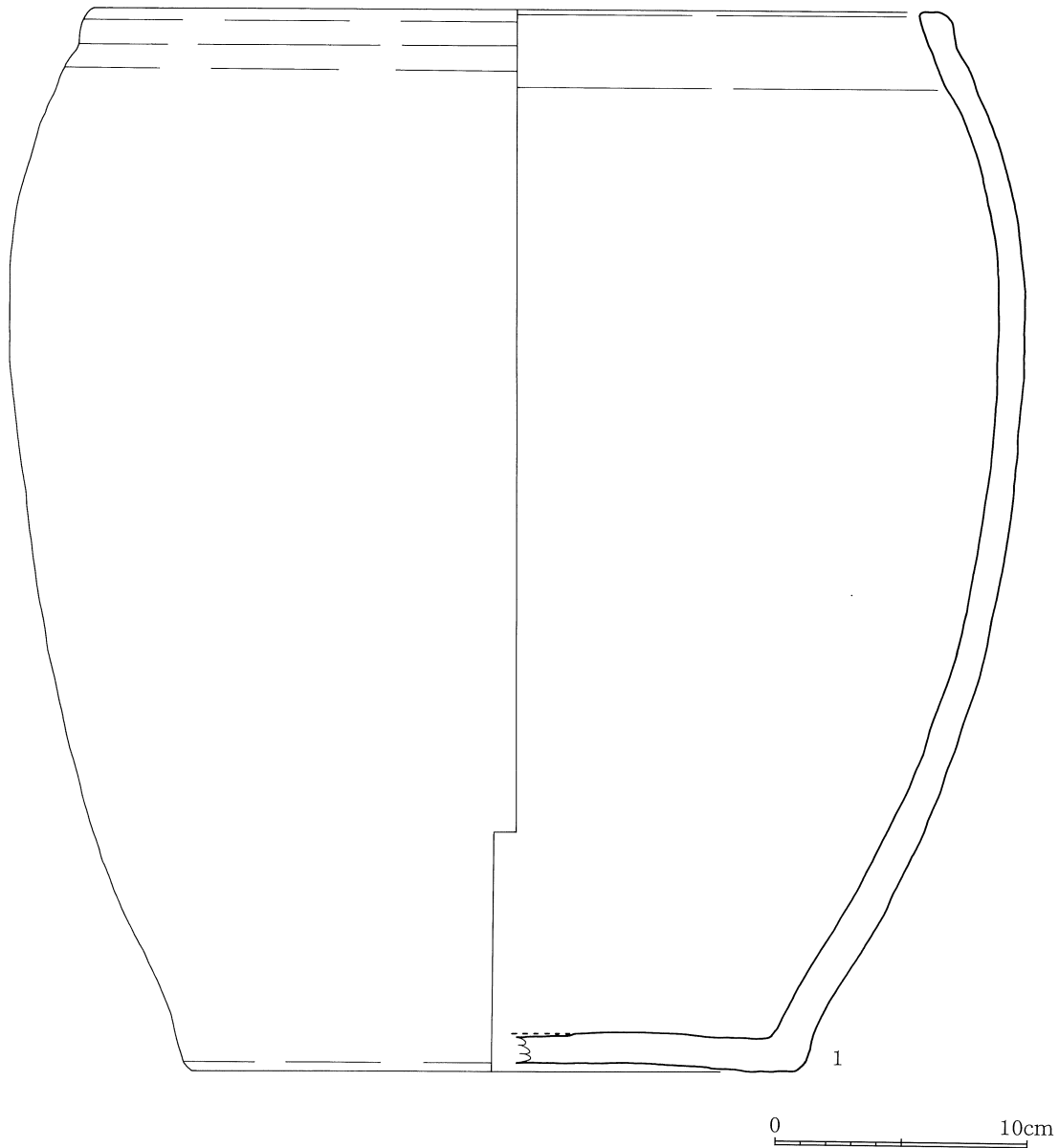


第122図 15区 2面焼土範囲

◆ 甕 (第115図)

北側の石列より少し南で検出した。深く埋められていたようであるが、一部を残して破損が激しい。内部からの出土遺物はない。

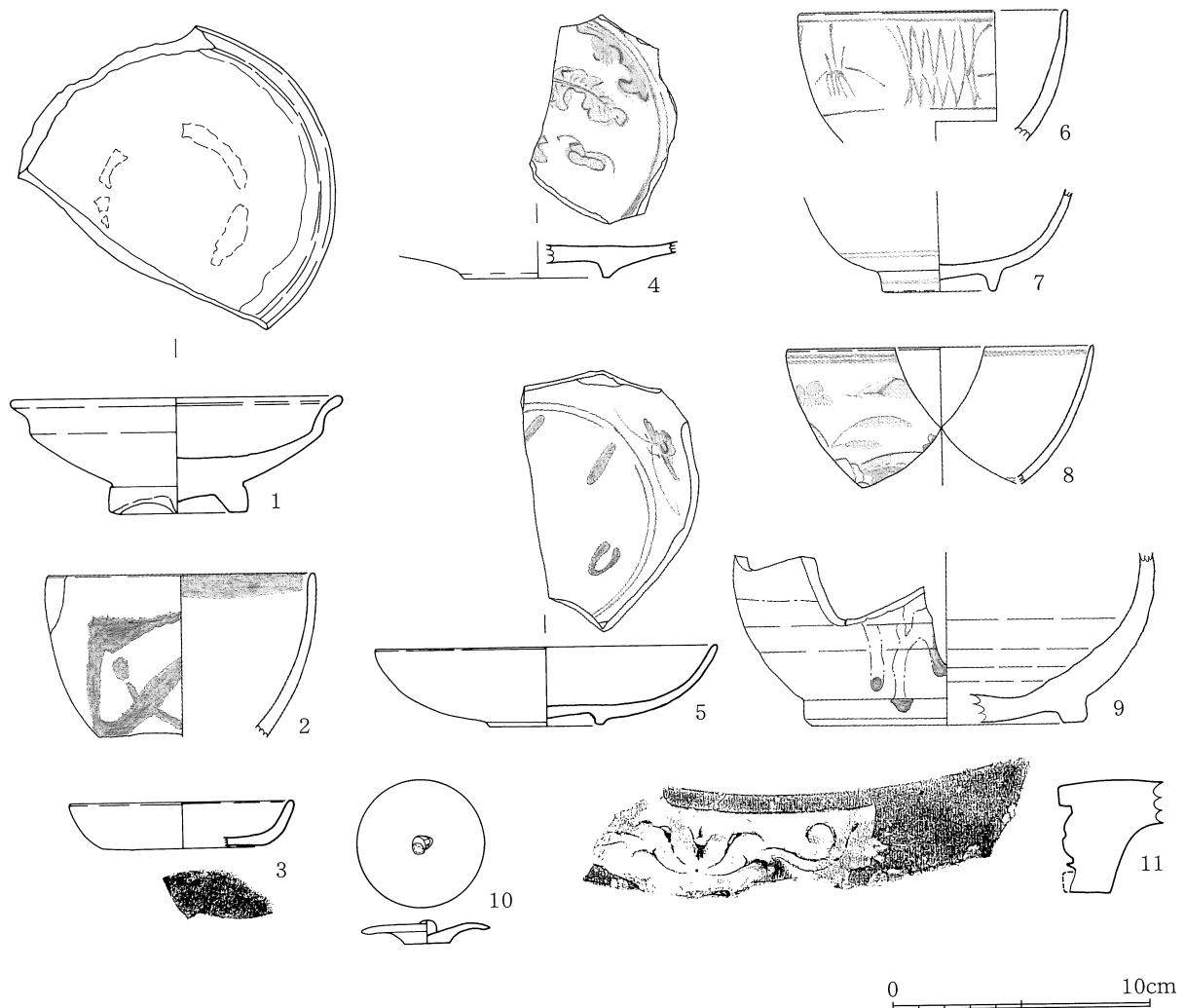
◇ 甕出土遺物 (第123図)



第123図 15区 甕

No.	胎質	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	土器	35.4	44.0	25.0	在地	?	甕	

◇焼土出土遺物／その他の遺物（第124図）



第124図 15区 焼土出土遺物・その他の遺物

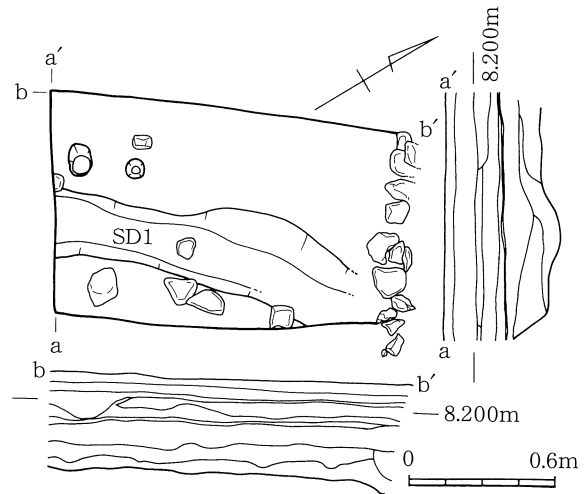
No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	陶器	(13.6)	5.6	4.7	肥前	焼土	17世紀～18世紀	鉢
2	陶器	(9.8)	—	—	肥前	焼土	1630～1650年	
3	土器	(9.0)	1.9	6.6	在地	焼土	?	
4	磁器	—	—	(6.0)	肥前	焼土	18世紀?	皿
5	磁器	(14.0)	3.2	4.6	肥前	焼土	1630～1650年	
6	磁器	(10.0)	—	—	肥前	焼土	1630～1650年	碗
7	磁器	—	—	4.6	肥前	焼土	18世紀?	碗
8	磁器	(12.3)	—	—	肥前	2面掘り下げ	17世紀後半	
9	陶器	—	—	(20.9)	肥前?	2面掘り下げ	?	
10	陶器	5.2	1.0	1.9	関西系	一括	18世紀後半～19世紀	蓋
11	軒平瓦	—	—	—	在地		18世紀後半～19世紀	瓦

## 16. 16区の遺構・遺物

### <概要>

15区の西隣となるが、15区との間に現代の攪乱があり、15区より5mほど西に位置する。

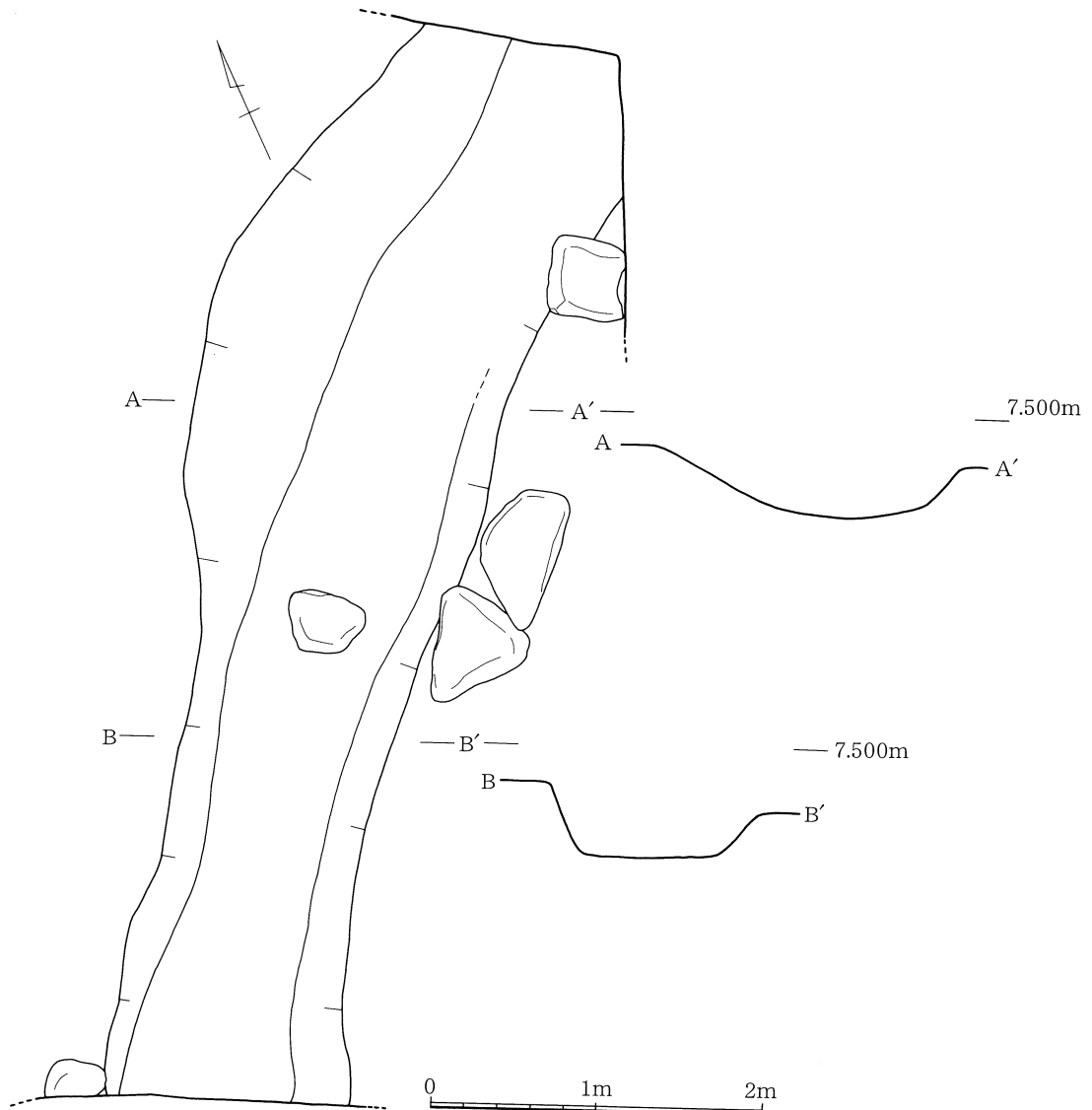
総数2基の遺構（溝状遺構1条、石列1基）を確認した（第125図）。



第125図 16区 平面図と南・西壁の土層図

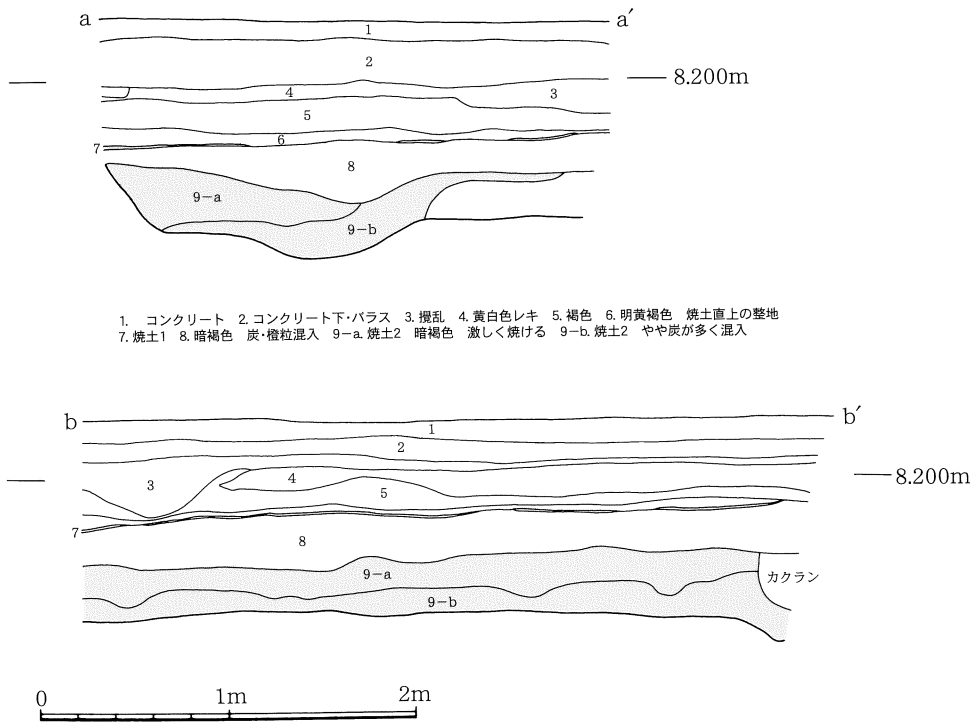
### ◆SD1（溝状遺構）（第126図）

調査区のほぼ中央で、南北に伸びる形で検出した。埋土から、溝状に掘られた遺構とも考えられる。しかしそのまま焼土が入り込み、東側へ段落ち気味に落ち込んでレベルを下げており、比較的大きなくぼみとも考えられる。焼土の時期とほぼ同時期と考えられる。



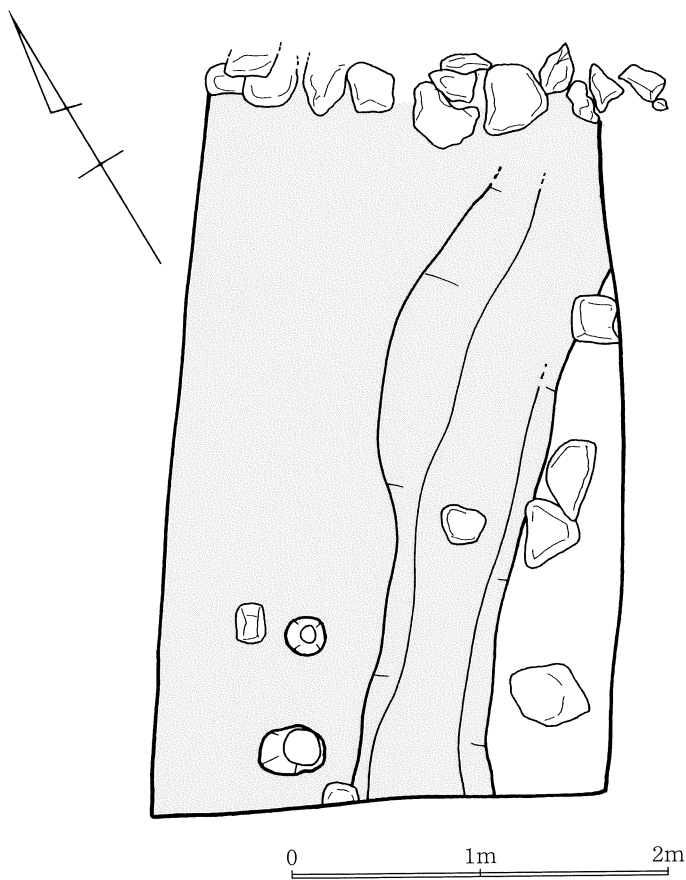
第126図 16区 SD1平断面図

◆土層図 (第127図)



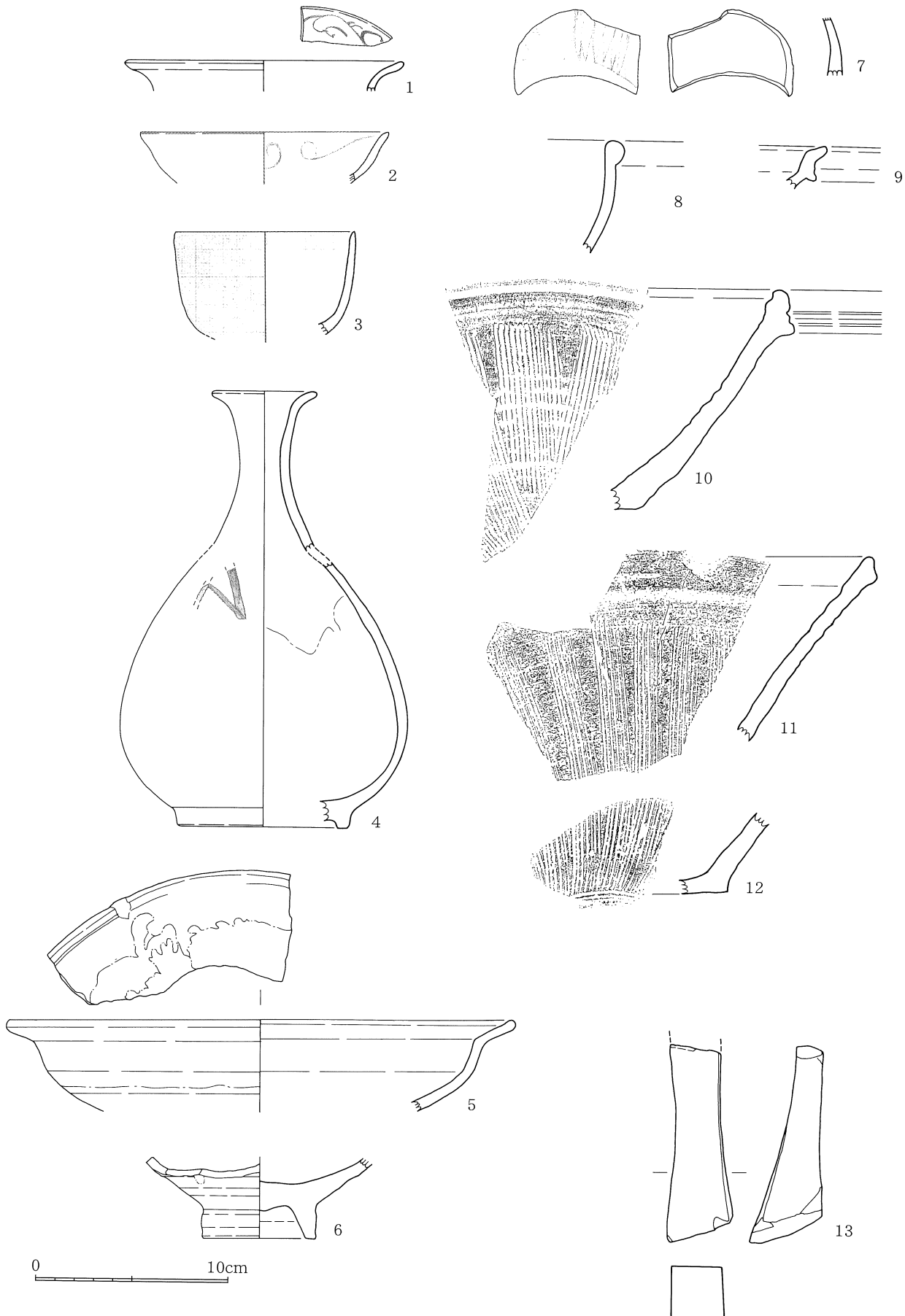
第127図 16区 南壁・西壁土層図

◆焼土 (第128図)



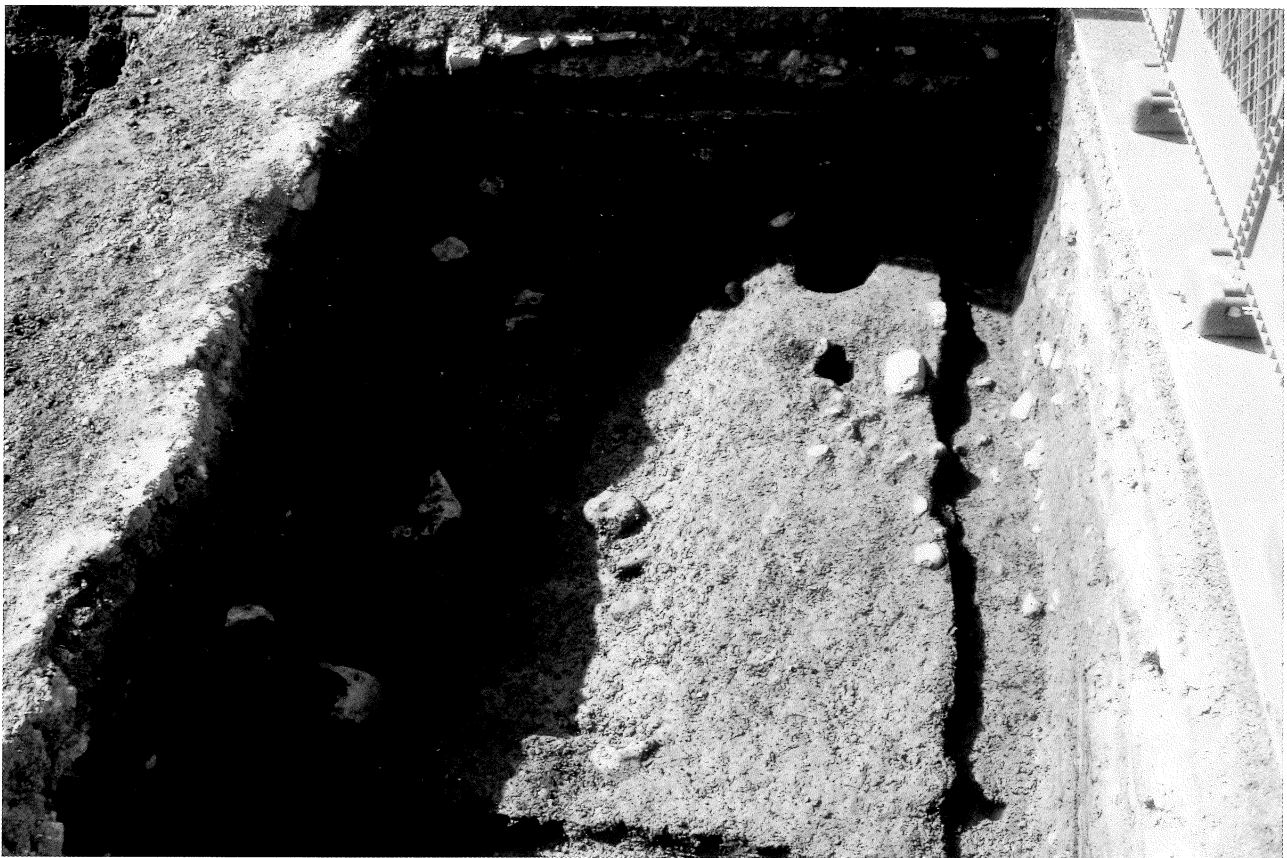
第128図 16区 焼土範囲

◇焼土層出土遺物／その他の遺物（第129図）



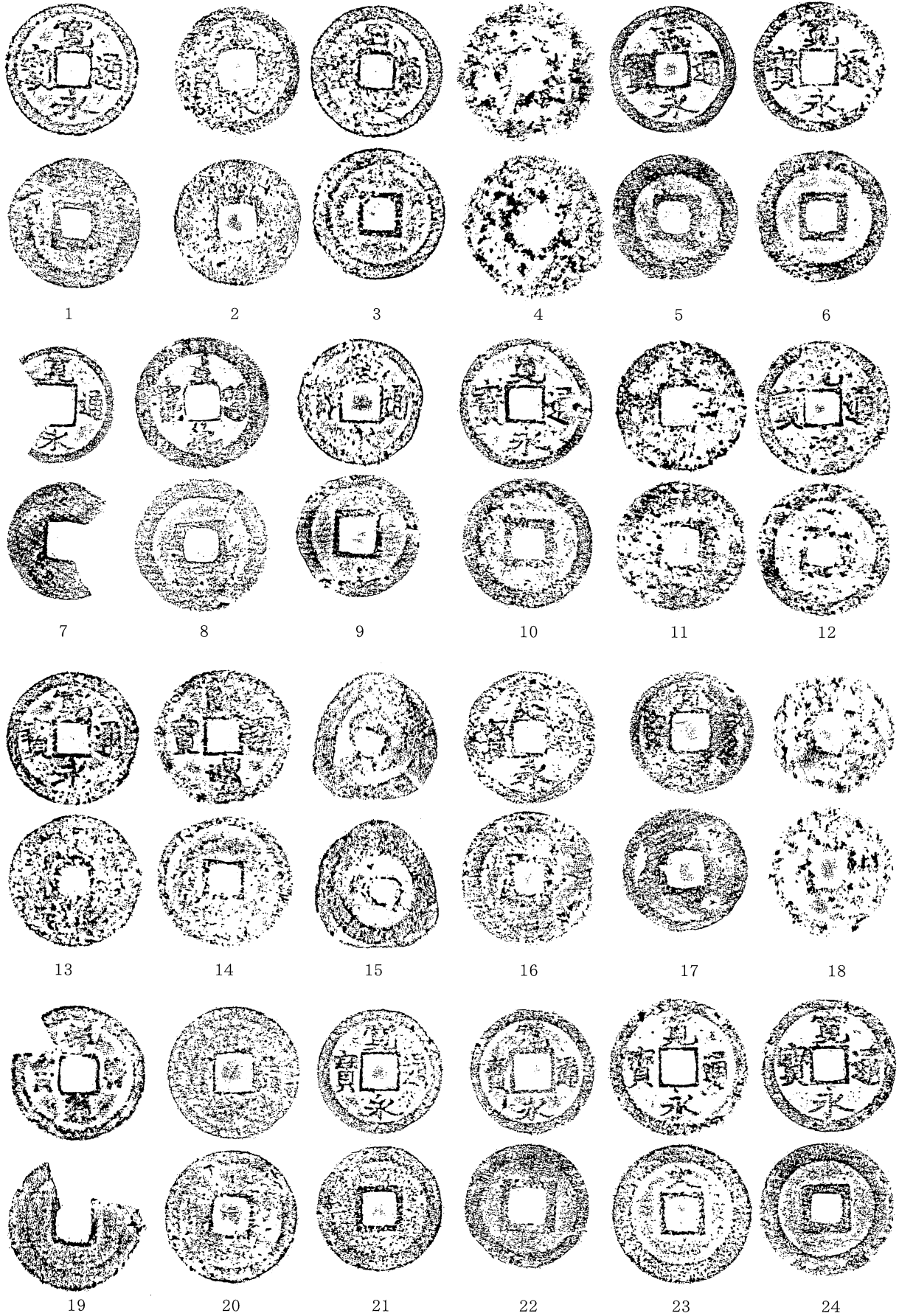
第129図 16区 焼土層出土遺物／その他の遺物

No.	種類	法量 (cm)			推定産地	出土位置	推定年代	備考
		口径	器高	底径				
1	磁器	(13.3)	—	—	肥前	焼土	1630~1650年	
2	磁器	(11.8)	—	—	肥前	焼土	1630~1650年	
3	磁器	(9.6)	—	—	肥前	焼土	1630~1650年	青磁
4	磁器	5.6	—	9.2	肥前	焼土	18世紀後半	
5	陶器	(27.8)	—	—	肥前	トレンチ下層	18世紀?	
6	陶器	—	—	(6.1)	肥前	焼土	17世紀~18世紀	高台に3ヶ所くぼみあり
7	磁器	—	—	—	肥前	焼土	1630~1650年	碗
8	陶器	—	—	—	堺・明石	焼土	18世紀	播鉢口縁部破片
9	陶器	—	—	—	丹波	一括	17世紀?	播鉢口縁部
10	陶器	—	—	—	肥前	焼土	17世紀前半	口縁部破片
11	陶器	—	—	—	肥前	焼土	17世紀前半	口縁部破片
12	陶器	—	—	—	丹波	一括	17世紀	播鉢底部破片
13	砥石	—	—	—	—	焼土	—	砥石 (粘板岩?)



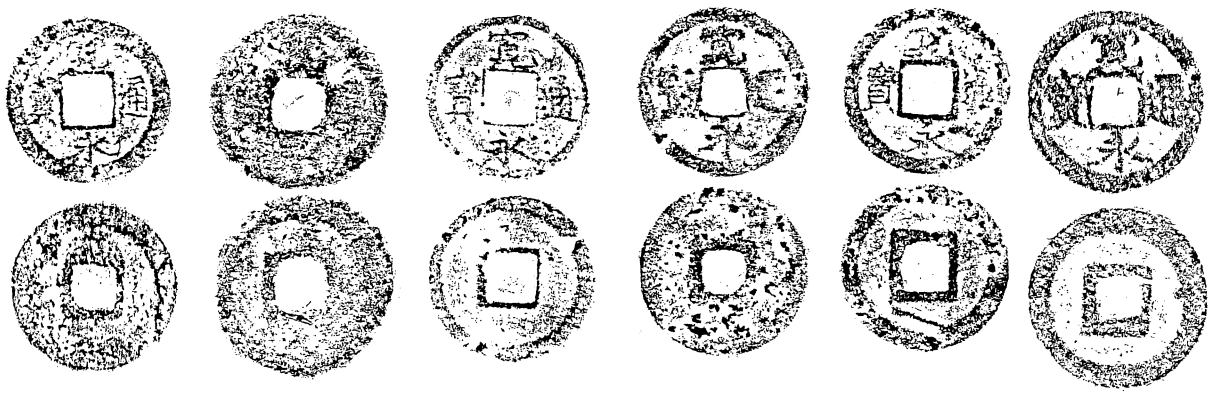
16区 完掘状況 (北から)

17. 出土錢貨一覽 (第130圖)



第130-1圖 出土錢貨

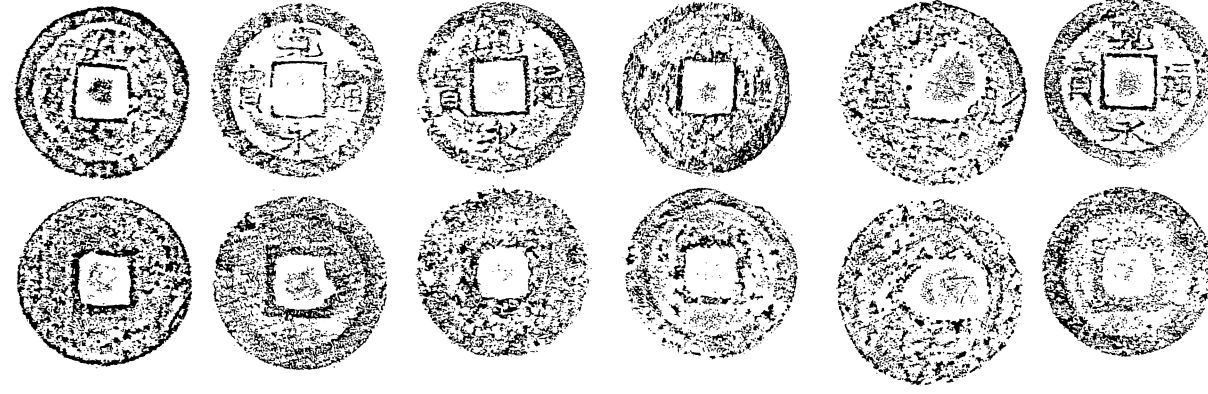




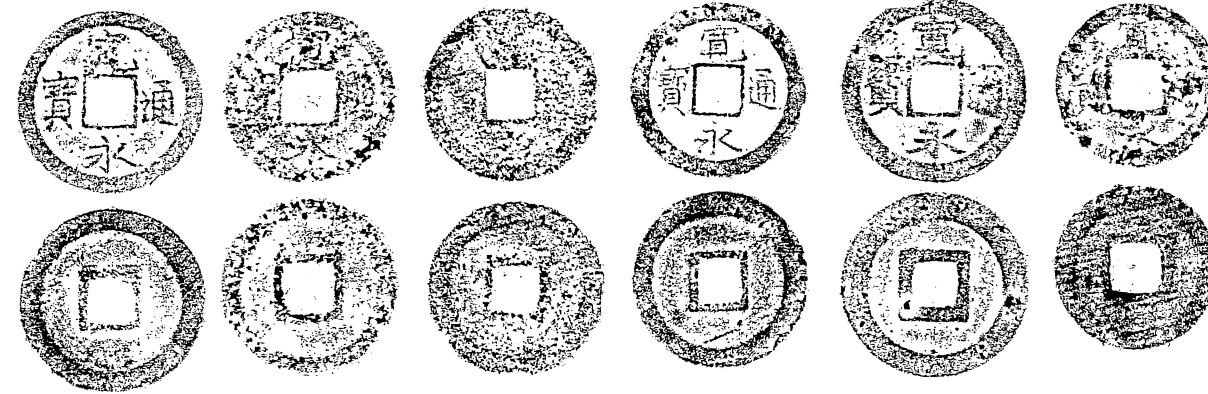
25                      26                      27                      28                      29                      30



31                      32                      33                      34                      35                      36

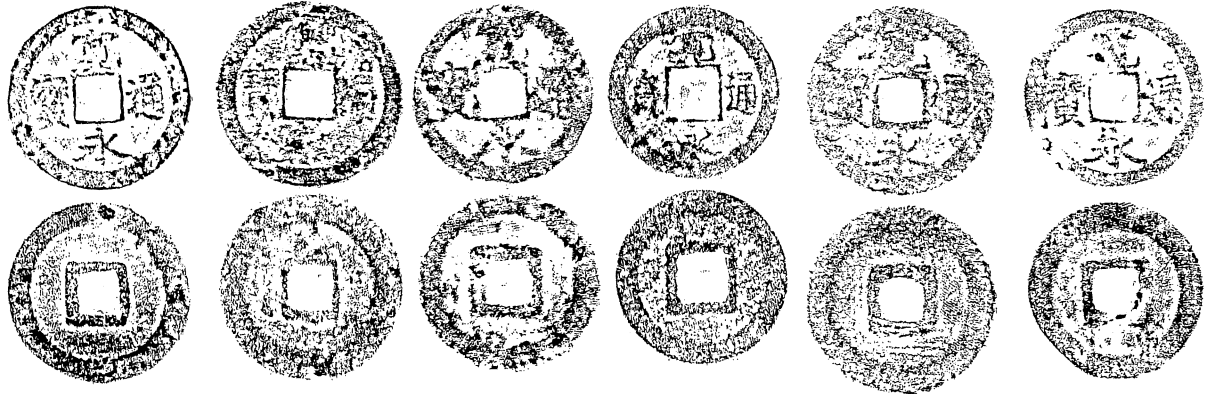


37                      38                      39                      40                      41                      42

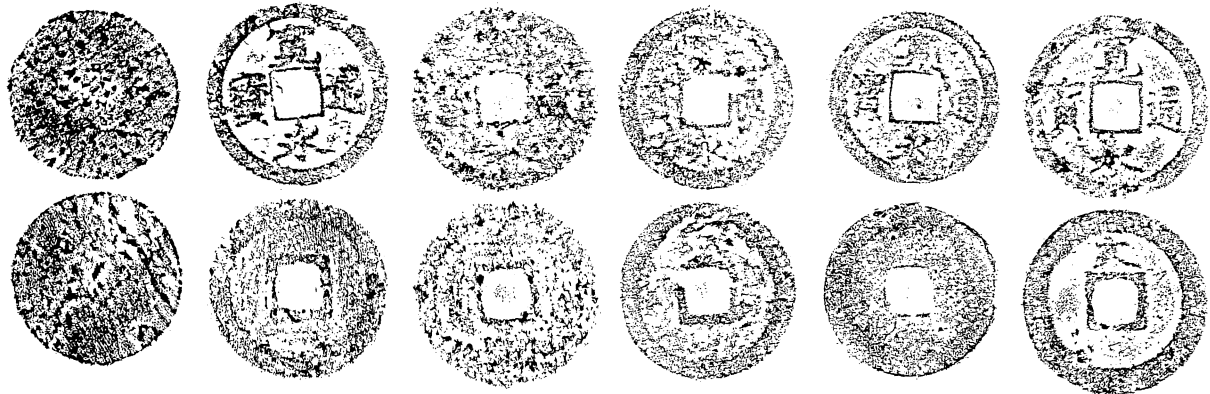


43                      44                      45                      46                      47                      48

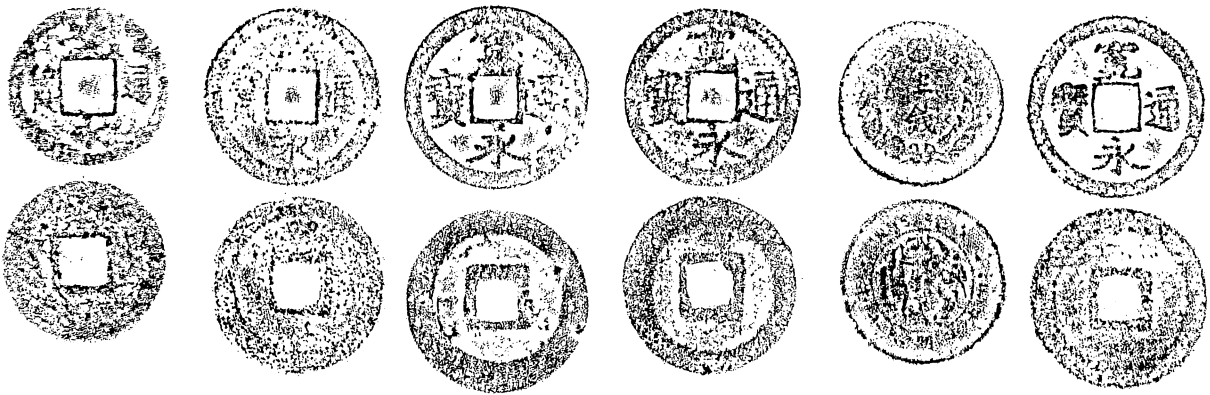
第130-2図 出土銭貨



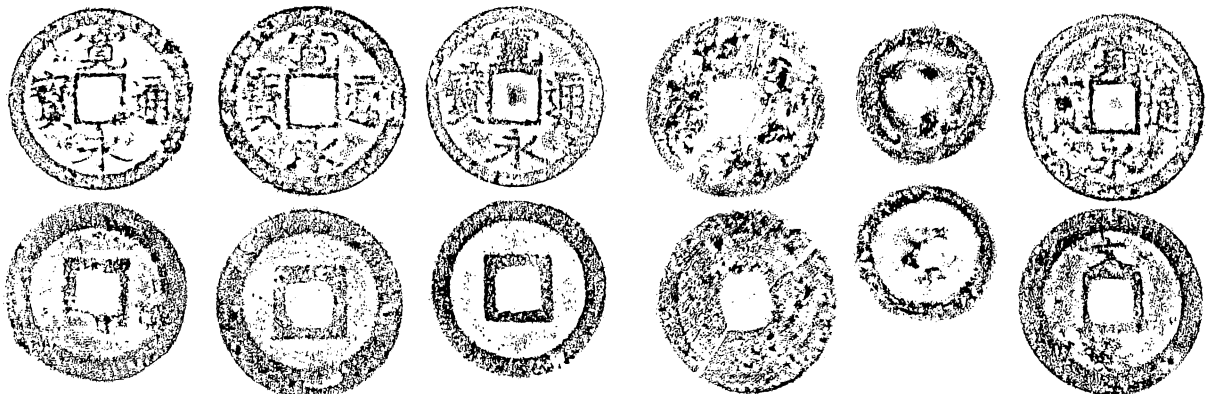
49                      50                      51                      52                      53                      54



55                      56                      57                      58                      59                      60



61                      62                      63                      64                      65                      66



67                      68                      69                      70                      71                      72

第130-3圖 出土錢貨

出土銭貨一覧表 (第131図)

杵築城下町出土銭一覧表 (1)

No	出土区	遺構・層	銭貨名	直径	厚さ	重量	備考
1	SK2	SK2横・焼土	寛永通寶	24.3mm	1.6mm	4.0 g	
2	SK2		寛永通寶	23.4mm	1.2mm	2.7 g	
3	3区	SD2	寛永通寶	24.5mm	1.2mm	2.7 g	
4	3区	南壁	鉄銭	25.8mm - $\alpha$	2.8mm	3.6 g	錆びて表裏不明
5	5区	東・2層	寛永通寶	24.4mm	1.3mm	3.1 g	
6	5区	東・2層	寛永通寶	23.5mm	1.2mm	3.2 g	
7	5区	東・残り遺構	寛永通寶	21.5mm	1.1mm	1.5 g	1 / 4 欠
8	5区	東・(残り)遺構検出	至道元寶	24.8mm	1.1mm	3.1 g	北宋・995年
9	5区	東・(残り)遺構検出	寛永通寶	23.0mm	1.0mm	2.6 g	
10	6区	Pit2	寛永通寶	24.2mm	1.3mm	2.7 g	
11	7区			24.1mm	1.4mm	2.9 g	表に四字
12	7区	P-1	寛永通寶	25.1mm	1.3mm	3.6 g	
13	7区	溝1	寛永通寶	24.5mm	1.5mm	3.4 g	
14	7区	溝	宣和通寶	25.2mm	1.7mm	3.5 g	北宋・1119年・篆書
15	7区	溝	雁首銭	24.3×22.5	2.2mm	2.6 g	
16	7区	SK1	寛永通寶	24.9mm	1.2mm	3.4 g	
17	7区	SK1	寛永通寶	22.6mm	0.7mm	2.0 g	
18	7区	SK1		22.3mm	1.9mm	2.4 g	無紋銭か?
19	7区	SK1	祥符通寶	24.8mm	1.1mm	2.6 g	一部欠
20	9区	SK10	寛永通寶	24.6mm	1.0mm	2.7 g	
21	9区	西・1層目	寛永通寶	23.1mm	1.2mm	2.6 g	
22	9区	西・南トレンチ上層	寛永通寶	23.1mm	1.1mm	2.3 g	
23	9区	西・南トレンチ上層	寛永通寶	25.5mm	1.5mm	3.3 g	裏面「文」
24	9区	西・南トレンチ中層	寛永通寶	22.8mm	1.5mm	3.8 g	
25	9区	西・南トレンチ中層	寛永通寶	24.7mm	1.3mm	2.8 g	
26	9区	西・1層	寛永通寶	24.2mm	1.4mm	2.8 g	①
27	9区	西・1層	寛永通寶	22.4mm	1.2mm	2.1 g	②
28	9区	西・1層	寛永通寶	23.2mm	1.15mm	3.0 g	③
29	9区	西・1層	寛永通寶	22.8mm	1.5mm	3.0 g	④
30	9区	西・第1層その2	寛永通寶	24.7mm	1.2mm	3.4 g	①
31	9区	西・第1層その2	寛永通寶	24.4mm	1.1mm	2.9 g	②
32	9区	西・第1層その2	寛永通寶	23.3mm	1.4mm	2.6 g	③
33	9区	西・第1層その2	不明	23.1mm	1.4mm	1.3 g	破片「通」のみ判明
34	9区	西・第1層その2	鉄銭	24.7mm	2.0mm	4.1 g	
35	9区	西・西トレンチ上層	寛永通寶	24.8mm	1.0mm	2.6 g	
36	9区	西・西トレンチ上層	寛永通寶	23.4mm	1.0mm	2.5 g	
37	9区	西・西トレンチ上層	寛永通寶	23.3mm	1.1mm	2.7 g	
38	9区	東・表面採集	寛永通寶	23.5mm	0.9mm	1.8 g	①穴左欠

杵築城下町出土銭一覧表（2）

No	出土区	遺構・層	銭貨名	直径	厚さ	重量	備考
39	9区	東・表面採集	寛永通寶	23.2mm	1.2mm	2.4g	②
40	9区	東・表面採集	寛永通寶	23.3mm	1.5mm	3.0g	③
41	9区	東・表面採集	無紋銭	24.8mm	1.3mm	2.5g	④穴周辺欠落
42	9区	東・整地層・2層目	寛永通寶	23.0mm	1.4mm	2.5g	
43	10区	SK7	寛永通寶	24.8mm	1.2mm	3.0g	
44	11区	西壁・N0.1	寛永通寶	23.6mm	1.2mm	2.2g	
45	11区	焼土	寛永通寶	23.8mm	1.5mm	3.3g	①
46	11区	焼土	寛永通寶	23.8mm	1.2mm	2.7g	②
47	11区	焼土	寛永通寶	25.2mm	1.5mm	4.0g	③
48	11区	焼土	寛永通寶	22.1mm	1.0mm	2.2g	④
49	12区	東・焼土	寛永通寶	24.7mm	1.4mm	2.9g	
50	12区	表土剥ぎ	寛永通寶	25.3mm	1.5mm	4.0g	
51	12区	表土剥ぎ	寛永通寶	24.5mm	1.3mm	3.7g	
52	12区	一括	寛永通寶	23.3mm	0.9mm	2.0g	
53	12区	遺構検出	寛永通寶	25.6mm	1.2mm	3.5g	
54	12区	SK3	寛永通寶	24.0mm	1.2mm	3.3g	
55	12区	東・焼土	無紋銭	23.2mm	1.5mm	3.4g	
56	12区	つぼ中	寛永通寶	24.7mm	1.3mm	3.0g	
57	12区	つぼ中	不明	25.2mm	1.3mm	2.8g	
58	12区	P-1	寛永通寶	24.0mm	1.2mm	2.4g	
59	12区	SX1	寛永通寶	23.4mm	1.0mm	2.3g	
60	12区	SX2	寛永通寶	25.2mm	1.5mm	3.7g	裏面上部に「文」
61	12区	SX2	寛永通寶	22.0mm	1.2mm	2.6g	
62	14区	表面採集	寛永通寶	23.7mm	1.3mm	2.9g	①
63	14区	表面採集	寛永通寶	23.4mm	1.3mm	3.6g	②
64	14区	一括	寛永通寶	23.8mm	1.0mm	2.8g	
65	14区	第一焼土下層	半銭	22.4mm	1.5mm	3.5g	明治時代
66	14区	西壁	寛永通寶	24.4mm	1.5mm	4.0g	
67	14区	焼土1～2の間層	寛永通寶	24.6mm	1.8mm	3.9g	
68	14区	礎石周辺	寛永通寶	25.5mm	1.5mm	3.7g	
69	15区	遺構検出	寛永通寶	23.9mm	1.5mm	3.3g	
70	15区	一括	不明	24.5mm	1.4mm	3.4g	
71	15/16区	SD	雁首銭	1.89×1.95	2.3mm	2.0g	
72	15/16区	SD	寛永通寶	25.2mm	1.3mm	3.5g	裏面に「文」
73	16区	表面採集	寛永通寶	23.7mm	0.9mm	2.1g	

## IV まとめ

今回の調査の成果の一つは、江戸時代の町屋の様子を紐解いたことであった。道路は江戸時代から変わらず踏襲されていると考えていたが、調査の結果現在の家屋の下から道路面を発見するという意外な成果があった。側溝の遺物から判断すると、発見した道路は17世紀後半から18世紀前半まで使用されていたと思われる。これは、文化12（1815）年の町屋敷絵図（第132図）作成当時よりも以前のものである。

文化12年の絵図では、今回調査した箇所よりも西で道路が鍵曲がり状になっている。現道でも絵図の通りになっていたようだ（現在は道路改良工事のため、鍵曲がりには消滅している）。しかし、今回検出した道路をまっすぐ西にのぼしてみると、ちょうど鍵曲がりの箇所にぶつかる。つまり、今回検出した道路は鍵曲がりになっておらず、直線道路であった可能性がある。

また調査区内で、現道（文化12年の道路）とは直交しない区画溝を10区・16区で3基検出した。検出レベルや遺物から検証したところ、これらの区画溝は旧道（文化12年以前）に直交していることが分かった。城下町形成当時の区画溝であろう。さらに遺跡全体を通して見ると、北台・南台へ登る坂にも時代差があるように見える。飴屋の坂・岩鼻の坂は旧道に直交しているが、紺屋町の坂は現道に直交する形で位置する。おそらく紺屋町の坂は江戸時代前期には存在しなかったのだろう。旧道から現道へと変化したときに作られた坂ではないだろうか。（以上付録参照）

このように発掘調査の結果、絵図や文献にはない城下町形成当時の町屋の様子を知る重要な手がかりが多数見つかった。



第132図 1815（文化12）年 町屋敷絵図

1986年、北台にある杵築小学校の改築に伴う発掘調査（杵築小学校校内遺跡）では、多数の良好な遺物が見つかっている。そのうちのひとつ、柿右衛門人形は杵築小学校以外では京都伏見代官所跡と久留米市両替町遺跡、名古屋城三の丸遺跡などで出土しているが、全国的にも出土例が少ないものである。また、肥前磁器にも組物や大皿等の高級磁器が多く認められる。北台や南台は武家地であり、杵築小学校校内遺跡での遺物組成は、武家地における陶磁器消費の様相を物語る。一方今回調査した町屋部分では、初期伊万里や盛期伊万里の大皿など高級磁器も小数見られるが、遺物組成のほとんどを雑器類が占める。

このように武家地と町屋では、陶磁器類組成に明らかな相違が認められるようである。

また、出土した陶磁器のほとんどが肥前系であり、播鉢では備前、さらに堺・明石が多く見られた。また、県内の調査例としては初期伊万里が多く出土した。今回出土した遺物から、杵築城下町遺跡の遺構の年代表を作成した（第133図）。この年代表から、17世紀、18世紀後半の遺構が多く見られる。17世紀の中でも1630～1650年代の遺物が多い。これは1645年に松平英親の入部の時期と一致する。松平氏の入部の際、城下町にも何らかの変化があった証ではないだろうか。また、遺構には焼土層が多くて2面検出された。今回の調査区では18世紀に最大2度の火災に遭っている（1725年・1729年）。焼土内の遺物を検証することで当時の火災の正確な範囲を割り出すきっかけになるのではないだろうか。

この年代表は、遺物や遺構の重複から判断し作成したもので、必ずしも正確な年代表とは言いきれないが、今後杵築城下町遺跡の調査に役立てて頂ければと思う。

年代	遺構の年代	主要関連事項
1550	14区石列(1590～1610)	1569 杉原長房 胎土目唐津(1590～1610 出土なし) 1600 細川忠興
1600	10区SD 1 (砂目) 9区SK 2 16区焼土 14区焼土 2 7区柱穴 2区SD 1 (17世紀?)	(1630～1650) 砂目唐津(1600～1630) 1645 松平英親 初期伊万里(1630～1650)
1650	12区P 2(1690～1740) 4区SD 1 5区SD 2 7区SD 1 8区SD 1 5区道路遺構 15世紀礎石(17世紀) 11区焼土(17世紀後半～18世紀前半)	17世紀後半～18世紀前半
1700	12区焼土(18世紀)	
1750	1区SD 2(18世紀後半) 1区柱穴 2(18世紀後半) 3区SD 1 5区SD 1 7区SK 1 7区SK 2 9区SK 2 14区礎石 14区焼土 1 12区石列(18世紀後半～19世紀前半)	18世紀後半 広東碗(1780～1810)
1800	1区SX 2(19世紀) 1区SD 1(19世紀)	端反碗の蓋 (1810～1860)
1850以降	1区P 6(大正後半～昭和前半) 1区SX 7(大正後半～昭和前半)	

第133図 年代表

写真図版



1区 検出状況（西から）



3区 1面 検出状況（西から）



3区 北壁 土層断面



4区 SD1 柱穴 検出状況 (西から)



5区 SD1 検出状況 (北から)





5区 遺構検出状況（西から）



5区 SD2 検出状況（西から）



5区 SD1の下の杭（南から）



7区 完掘状況（東から）



8区 SD1 検出状況（西から）



9区 2面 完掘状況（北から）





7区 出土遺物



9区 出土遺物



10区・11区 出土遺物



12区 出土遺物



14区 出土遺物



15区・16区 出土遺物



14区 甕

## 報告書抄録

ふりがな	きつきじょうかまちいせき
書名	杵築城下町遺跡
副書名	県道宗近魚町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第169輯
編集者名	生野令子・高橋信武
編集機関	大分県教育委員会文化課文化財資料室
所在地	〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号 〒870-1113 大分市大字中判田ビワノ門1977番地 大分県文化財資料室
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
杵築城下町 遺跡	大分県 杵築市 大字杵築	—	213118	33° 24' 50"	131° 37' 08"	平成14年 11月26日 ～ 平成15年 3月18日	1,000㎡	県道改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杵築城下町 遺跡	集落跡	近世	建物跡 道路跡 区画溝跡	初期伊万里 肥前陶磁器	1815(文化12年) の絵図以前の 道路跡



---

---

## 杵築城下町遺跡

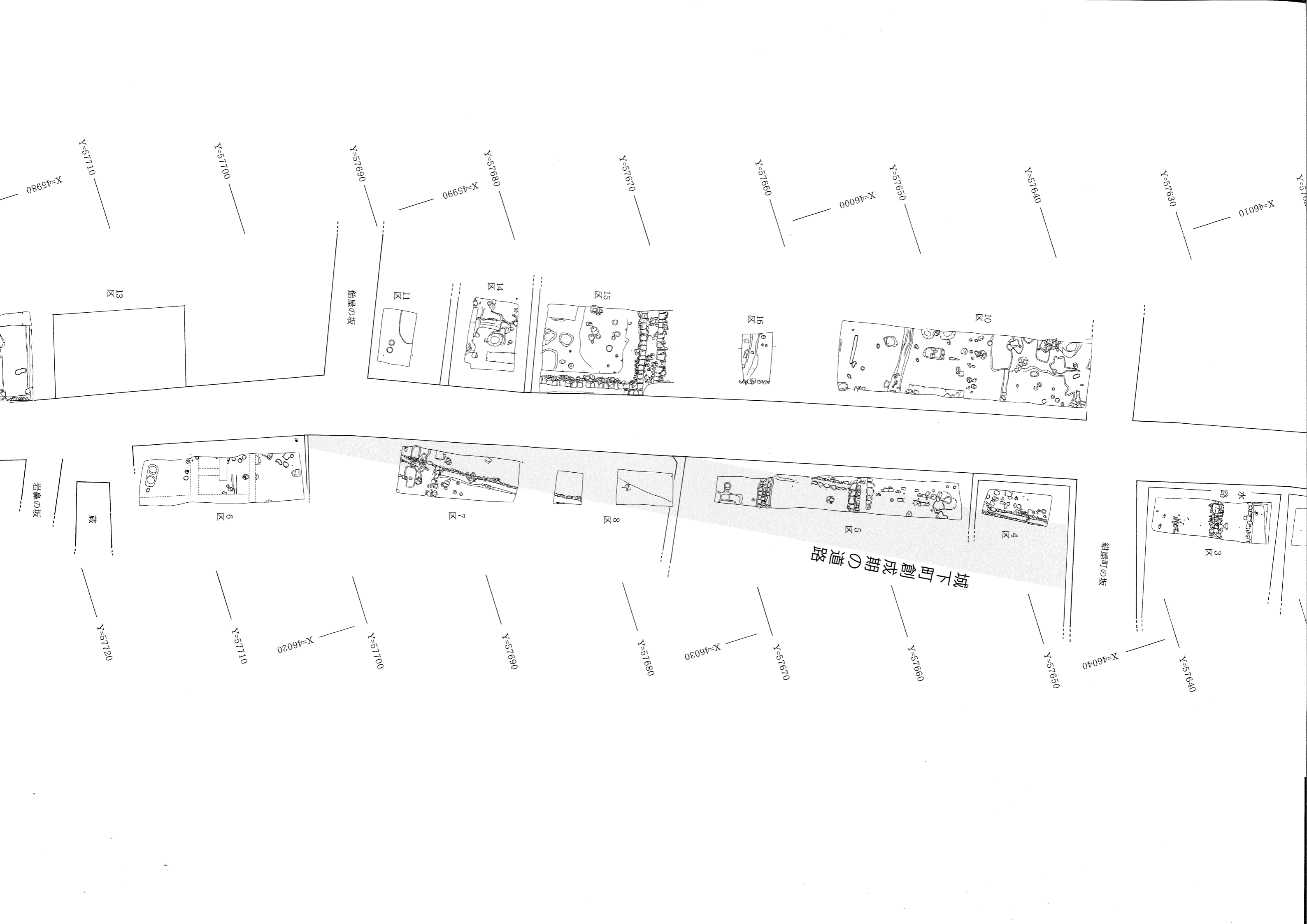
— 県道宗近魚町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

大分県文化財調査報告書 第169輯

平成16年3月31日

- 編集 大分県教育庁文化課(文化財資料室)  
〒870-1113  
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地  
TEL (097) 597-5675
- 発行 大分県教育委員会  
〒870-0021  
大分市府内町3丁目10番1号  
TEL (097) 536-1111
- 印刷 極東印刷紙工株式会社  
〒870-0844  
大分市古国府146番地の3  
TEL (097) 543-3131
- 
-





Y=57100

X=46010

Y=57130

Y=571400

Y=571350

X=46000

Y=571360

Y=571970

Y=571680

X=45990

Y=571690

Y=571700

Y=571710

X=45980

13区

船屋の坂

11区

14区

15区

16区

10区

3区

紺屋町の坂

水路

4区

5区

8区

7区

6区

蔵

岩鼻の坂

Y=571640

X=46040

Y=571650

Y=571660

城下町創成期の道路

Y=571970

X=46030

Y=571980

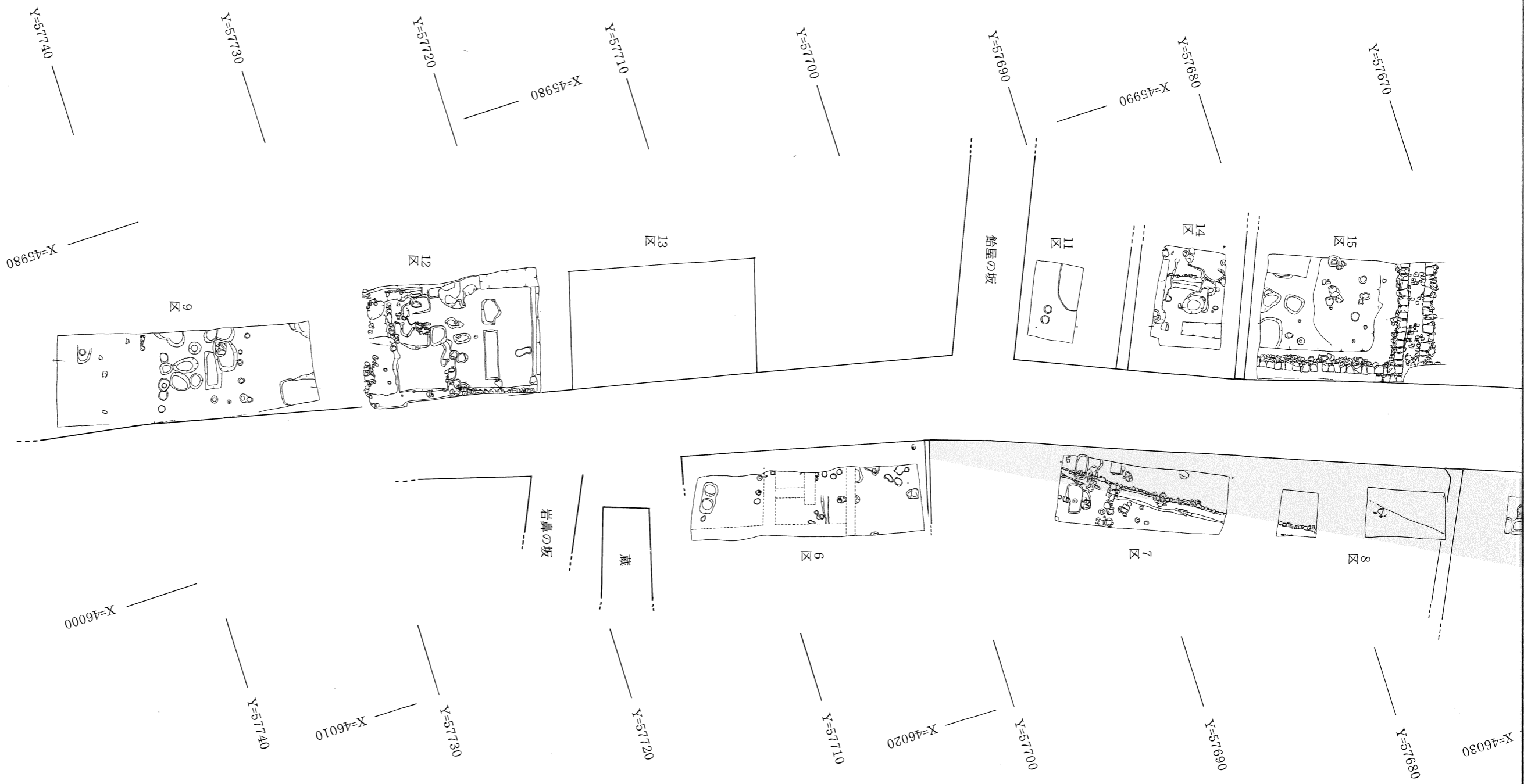
Y=571690

Y=571700

X=46020

Y=571710

Y=571720



調査区全体図 (杵築城下町遺跡)